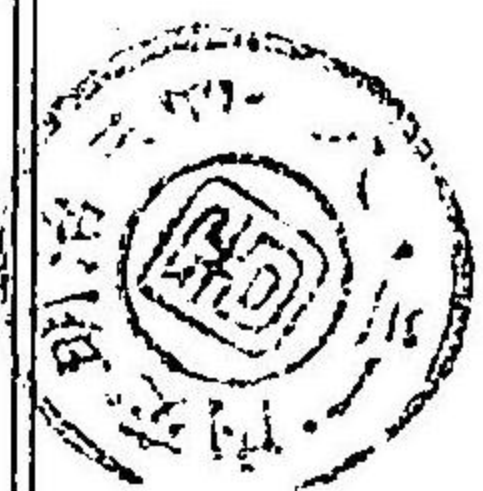


陸軍三等軍醫曾正荒并多門纂著



新纂麻刺里亞療法 全

明治三十四年發行

緒言

嗚呼吾領土臺灣ハ其地味ノ豊饒ナルニ關セズ不幸ニノ不健康ナル汚名ノ下ニ著明ナリ然レモ該島ニ於ケル一ノ麻刺里亞ヲ國外ニ驅除スルヲ得バ又實ニ健全ノ樂土ニシテ高砂島ノ名ニ副フ可キハ諸般ノ統計上確證シテ餘リアリ
曾テ吾人ノ命ヲ受ケ渡臺スルヤ其途次幾多ノ病院ヲ訪ヒ或ハ先任ノ同僚ヲ叩キ麻刺里亞ニ對スル有益ノ談話ヲ聞クヲ尠カラズ而シテ回顧スレバ其記憶ニ止マルモノ唯十中ノ二三ノミ爾來潛心斯病者ノ救濟ニ注目シマンナレルヒバウセリ一マラ
クリヤノ一諸氏ノ成籍ヲ涉獵シテ得ル所尠カラズ頃日之ニ多

少ノ實驗ヲ加ヘ一小冊子ヲ編ス名ケテ新纂麻刺里亞療法ト云
フ蓋シ新ニ渡臺スルノ刀圭家諸君ニ對シ一讀ノ價値アルヲ疑
ハズ又本島第三課員ノ如キ生蕃塚ニ居住シ若クハ醫ナキノ僻
遠ニ出入スルノ諸氏ニ本書ヲ熟讀スルノ榮譽ヲ與フルアラ
バ本病療法ニ就テ得ル所尠少ナラザル可ク以テ自ラ術リ以テ
人ヲ濟フノ一助タラン吾人ノ微衷全ク茲ニ存ス然レモ本書ハ
未タ完成ヲ以テ世ニ公ニシタルモノニアラズ幸ニ世間志ヲ同
フスルノ諸彦ニシテ能ク遺漏ヲ指教シ且其實驗ニ係ル這般ノ
庶事ヲ吾人ニ報導セラル、トアラバ他日板ヲ改ムルニ際シ救
集シテ更ニ世ニ問ハントス即チ本書ハ其礎石タルニ過キサレ
ナリ想フニ棟梁ヲ建置シ偉大ノ殿堂ヲ裝飾スルハ諸君ノ義務

ニ、其盡力如何ニ基因ス如斯シテ真美ノ殿堂ヲ設ケ茲處ニ諸
君ノ經驗ヲ收録シ完成スルノ好期ニ達セバ治臺上ノ裨益鮮少
ナラザルノミナラズ愉快亦極レリト云フ可シ今ヤ礎石就ル聊
カ吾人ノ感スル所ヲ記シ以テ卷首ニ附スト云爾

於臺灣

明治三十四年八月

纂著者識

昭和十一年

本書ノ纂著ニ當
リ陸軍一等軍醫
岡隆太郎君ガ諸
般ノ補助ヲ與ヒ
ラレタルヲ感
謝ス

新纂麻刺里亞療法
麻刺里亞寄生體ノ名稱
麻刺里亞寄生體ノ變化
麻刺里亞寄生體ノ名稱

新纂麻刺里亞療法

目次

第一章 麻刺里亞ノ歴史

第一年紀

第二年紀

第三年紀

地球表面ニ於ケル麻刺里亞ノ蔓延

地球上有名ナル麻刺里亞地

日本帝國軍隊三年間ノ麻刺里亞數

第二章 麻刺里亞汎論

「ア」形態

麻刺里亞寄生體ノ變化

麻刺里亞寄生體ノ名稱

一八頁

二二頁

五三頁

七八頁

九八頁

一〇頁

二〇頁

二二頁

二三頁

二五頁

二七頁

目次

三

麻刺里亞臨床的症候	三〇頁
麻刺里亞ニ於ケル血液及内臟變化ノ順序	三一頁
麻刺里亞傳染上ノ區別	三三頁
麻刺里亞ノ診斷	三五頁
顯微鏡的血液検査	三六頁
麻刺里亞治療汎論	三八頁
(A) 病理的原因上直接ノ作用	三八頁
麻刺里亞寄生體ニ對スル規尼涅ノ作用	三八頁
麻刺里亞寄生蟲ニ對スル「メチレンブラウ」ノ作用	四三頁
(B) 寄生蟲萌芽ニ對スル直接作用	四五頁
(C) 傳染ノ防遏法	四八頁
麻刺里亞療法上所要藥物	五〇頁
規尼涅鹽ノ水中溶解量	五三頁
規尼涅製劑ノ規尼涅含有量表	五四頁

麻刺里亞療法上所要藥物ノ用法及用量	五八頁
「メチレンブラウ」	六六頁
砒石	六七頁
多ク用ヒラルル砒石製劑及其他ノ藥物	六八頁
麻刺里亞臨床療法	七二頁
一般療法及豫防法	七二頁
麻刺里亞傳染ノ療法總論	七五頁
用法ニ據リ規尼涅ノ血中ニ現出スル時間	七七頁
整然タル間歇熱ノ療法	八三頁
重症不整間歇熱療法	八五頁
亞稽留性惡性熱療法	八七頁
混合性間歇熱療法	八八頁
黑水熱膽液性血色素尿、膽熱	九二頁
黑水熱ニ關スル最近說	九八頁

黑水熱ノ主徴	一〇二頁
黑水熱ノ持續	一一二頁
黑水熱ノ結果	一二二頁
黑水熱ノ診斷	一三三頁
黑水熱ノ豫後	一四四頁
黑水熱ノ合併病貽後病及快復期	一五五頁
(第一) ナイルノ輕症黑水熱治療	一八頁
(第二) ボネツシノ昏睡ニ依リ卒死セル黑水熱報告	一一一頁
(第三) ブレインノ重症黑水熱治療ノ實驗	一二二頁
黑水熱療法	一二八頁
小兒及老人ノ急性麻刺里亞傳染	一三六頁
麻刺里亞接種試驗	一四七頁
(第一) 麻刺里亞接種試驗表	一四七頁
(第二) 麻刺里亞寄生蟲及熱型表	一五〇頁

第六章 麻刺里亞毒侵入經路	一五一頁
(第一) 水ノ有害說	一五一頁
(第二) 印度蚊ノ有害說	一五六頁
(第三) 空氣ノ有害說	一六〇頁
第七章 バツセリノ麻刺里亞ニ對スル靜脈内規尼涅注入法	一七二頁
注入用中性鹽酸規尼涅溶液製法	一七四頁
第八章 ローベルト、コツホ 印度亞弗利加旅行報告	一八二頁
熱帶地方ノ麻刺里亞	一八二頁
潜伏性麻刺里亞	一九二頁

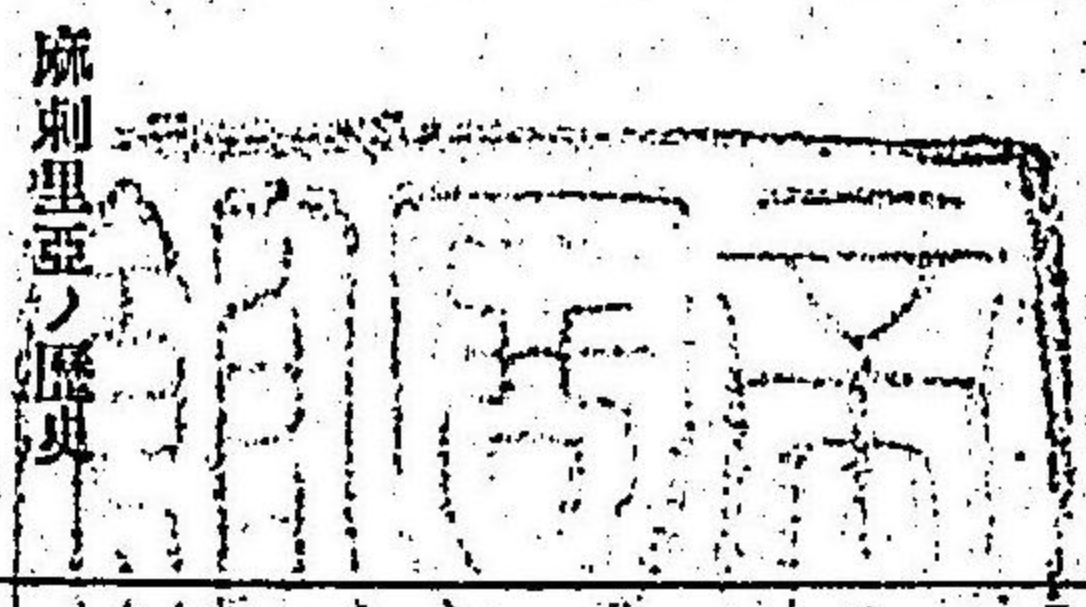
新纂麻刺里亞療法目次終

新纂麻刺里亞療法

正六位 荒井多門纂著

第一章 麻刺里亞ノ歴史

最モ古キ醫學上ノ記録ヲ閱スルニ麻刺里亞ハ古來ニ在リテモ亦現今
 ノ如ク存在セルヲ明ニシテ多クハ壯年ノ男性ヲ侵シタルヲ記述セ
 リ蓋シ當時ニ在テモ男子ハ専ラ農業殊ニ耕耘ニ從事スルモノ多キガ
 故ニ本病ニ罹ルコト相加ハルハ疑フ可ラザルノ事實ニ即チ未ダ少
 シモ耕作ニ着手セサルノ地ハ多クノ麻刺里亞病原ヲ含有シ之ヲ耕シ
 地底ヲ發掘スルカ或ハ配料ヲ集拾ヌナス等ニ因テ該病原ノ侵ス所ト
 ナルハ理ニ於テ正ニ然ル可キナリ



グロフニ從ビハ麻刺里亞ハ古ク埃及ニ於テ有名ニシテ彼ノAntナル語
ハ廟誌ノ轉化セル樹名タリ而シテ是レ年々歳々萌芽ヲ出シ反覆流行
スルヲ意味スルナリト
麻刺里亞ヲ理解スヘキ歴史ハ二個ノ主要ナル關係ヨリ自然ニ三年紀
ニ分レタリ主要ナル關係トハ何ゾヤ一ハ機那皮固有性質ニハラウエラ
シク寄生體發見之ナリ
第一〇〇年紀トハ機那皮ヲ發見シ之ヲ療法ニ用ヒタルヨリ以前ハ麻刺里
亞熱ハ他ノ熱病ト共ニ明了ナラザリシガ機那皮ノ結果ニ因リ此區別
ハ誘導セラレ大ニ闡明スル所アリ然モ尙此世紀ノ始メニ認ム可キモ
ノハ病理解剖ト僅々タル臨床實驗トニ過キズ
古昔ハ詳カニ種々ナル熱ヲ區別スル能ハザルノミナラズ概シテ之ヲ
區別スルヲ豫想セラレサリシ即チ彼ノヒボクラテスツエルツスノ記
録ノ如キハ古ヨリ知り得タル概要ヲ紹介スルニ過キス例令ハ豫後可
良ノ熱ナリシヤ否ヤ熱ノ成立ニ就テノ辨明及熱ノ持續ト原因トノ關

第一世紀

係ヲ記スルノミ
ヒボクラテスノ熱ヲ分ツヤ今日ノ如ク綿密ナラズ只彼ノ記載ニハ四
個ノ種類アリ曰ク稽留熱毎日熱三日熱及四日熱之ナリ且ヒボクラテ
スハ熱ノ種類ハ四季ニ從フモノトシ夏季ニ於テハ上記ノ他又持續熱
炎症熱三日熱等ヲ發シ更ニ秋季ニ到レバ之ニ加フルニ四日熱不正熱
脾腫及水腫等ヲ以テシ不正熱ハ再發ノ爲ニ脾腫ト水腫及麻刺里亞惡
液質ヲ來スモノナリト云ヒリ
ヒボクラテスハ能ク熱ト惡液質ノ間ニ於ケル關係ヲ識別シ多クノ場
合ニ病症進行スレバ容易ニ水腫ニ轉歸スルヲ(夏季ノ赤痢下痢及慢
性四日熱ニ於テ)經驗シ此疾病長ク持續シタルキハ體質變ジテ水腫ヲ
繼發シ易キニ到ルト云ベリ
尙濕氣ト熱トノ關係ヲモ次ノ如ク説明セリ曰ク若シ冬乾燥シ單ニ北
風ノミニシテ春ニ降雨ト南風アルキハ夏季ニ到リ熱病ヲ來スト沼澤地
ノ居住及流域ノ變更ニ由リテ成ル所ノ地方ニ寓居スル邦國ハ概シ沼

澤地ニシテ温暖水利豊富栽培ニ良ク又四季ニ劇雨アリテ流去陷落ノ患アルモ住民ハ生命ヲ沼澤地ニ托ス此沼澤地ノ人ハ長大ニシテ之ガ爲ニ強ク青白皮色ノ人黃疸ニ罹ルモ全ク強キ温調ヲ失フヲナシトヒボクラテスハ惡水ヲ用ユレバ熱ヲ誘起スルヲ記載シ若シ健康ヲ欲セバ水ニ注意セヨ沼澤水及池水ハ夏季間必然温暖且濃厚ニシテ臭氣アリ之ヲ飲用スレバ脾腫ヲ來スコトヲ言ヘリ

ツエルツスハ已ニ間歇熱ノ臨床記載ト此普通症候トヲ知り四日熱ニ關係シタル日發熱アルコトヲ記シ殊ニ惡性熱ヲ惡性三日熱ト記載セリ

羅馬人ハ麻刺里亞ノ原因ニ關係シ眞理ニ近キ成績ヲ殘セリワルロー・ゴルメルラ・ブラデュー・スノ説明ハ沼澤ヨリ蒸發シ生活體ニ及スモノトシアウツ・エン・メ・モ亦之レヲ是認セリ

此原因的理會ハ而モ中世ニ於テガレンノ學說ニヨリ全ク消失シ後チモルトン(十七世紀ノ終)ニ至リ再ヒ之ニ連絡ヲ探レリ

第二第三世ヒリツプノ侍醫メルカチウスハ間歇熱ニ來ル惡性發作ハ

第二年紀

主トシテ三日熱ニ來ルトノ經驗上ノ説明ヲ與ヘ其他深ク體液病理ヲ過信シ不明ナル想像說ヲ擴延シ又亞刺比亞ノ醫士ランツ・ス・エ・ベンチ・ナハ間歇熱ヲ知レリ

第二年紀ハ機那皮ノ輸入ニ因テ開發セラレ早ク之ニ關係シテモルトン・トル・チ・イ及シデ・ハンノ記憶スベキ作業ハ成立シ麻刺里亞ノ臨床的病理ヲ集拾完成スルニ至レリ

機那皮ニ於ケル實驗上トル・ヂ・ト・及モルトンハ其熱ヲ二種トナシ機那皮ニ因テ治ス可キモノト機那皮又禁忌ナルモノトヲ區別シトル・ヂ・トハ廣ク此原則ヲ研索シテ麻刺里亞ヲ説明シタルモ臨床上トル・ヂ・トノ著書ハ著名ナラス又決シテ優等ノモノニアラザリキ故ニ精密ナル經驗上ノ問題トシテ多クノ實驗及記述ノ想像ハ著書撰擇ノ關係ヲ分ツニ至レリモルトンノ記載ハ多クハ心學的ニ機那作用ニ就テ説明シ原因ヲ萌芽ニ就テ全クガール・レン以前ヲ忘却セルモノ、如シ

眞ニ古來ノ說トシテ世間ニ信用セラル、地底ノ性質ニ關スル想像及

麻刺里亞ト氣象氣候ノ關係ハランチシーノ研究ニ因リ始メテ注意セラレタル問題ニノ漸々試験的ニ研索セラレ又ランチシーハ始メ麻刺里亞ノ死ノ經過ヲ探ルモノハ肝臟ノ著シク暗黒色ナルヲ注意セリ十八世紀ノ呼唱スベキ恩賜ハ惡寒期ノ間ニ既ニ體温ノ上昇スルト云フデ、ハオーンノ證明之ナリ

麻刺里亞ノ地球表面ニ蔓延スルノ狀ヲ了解スルニハ十八世紀ニ於ケル歐羅巴其他ノ大陸ニ於ケル殖民事業ノ進歩ヲ考ヘサル可ラス之ト同時ニ又當時重症現象ヲ以テ顯レタル他ノ熱帶的傳染病(黃熱)ヲ區別スルニ至レリ此區別ハ病理的ノ討究ニ起因シ十九世紀ノ利益ト功績トヲ説明スルニ足ル可シ

一方ニハ麻刺里亞ノ血液及ビ有機體染色法ノ著シキ進歩アリ(ボアイリ、ホルヒ)他方ニハ各病ト麻刺里亞ノ重症トニ於ケル區別ヲ研究シ殊ニ下腹室扶斯ニ於テポストベルトノウニコイスゲルハルトペンソック氏等ガ小腸内ニ固有ノ微候ヲ發見シタルヲ本病歴史中主要ノ件ナリ

麻刺里亞學ニ向テ必要ナル機會ノ來リシ誘因ハ一千八百四十七年ハインリッヒ、メッケルノ色素及着色セル小體ヲ發見シタルトウエルヒヨウノ業府ニ因テヘッシー、ルブラチール、フレリッヒノ作業ヲ公ケニシ之ニ因テ利益ヲ與ヒタルト是ナリ

麻刺里亞ノ原因上ニ臨床的ノ業績アルモノハマリオートハスベル、オンコリング、グリー、ジンゲル、メリユールトカラミツ、スヘルツ等殊ニ模範タルモノハゲルシキト、チル等ノ研究タルヲ忘ル可ラズ之レ吾人ニ殷富ナル臨床的及解剖的ノ證明ヲ與フル妙シトセズ

其後本病原因ノ研究ニ競争ヲ試ミ徒ラニ病原ヲ豫想ミットヘルレサリ、スプリト、エクル、ドト、マ、ス、グ、ル、デ、リ、等シ之ガ發見ニ苦ミシモ一千八百八十年十一月ニ至リ唯ラヴ、エ、ラ、シ、ノ、ミ此目的ヲ達シ數年ノ後ニ至リテ其實驗愈々全勝ヲ占メ以テ麻刺里亞研究ノ第三年紀ヲ開キ醫學上ニ利益ヲ與ヘタリ

然レモ尙僅ニ麻刺里亞ノ一門戸ヲ地球上ニ開キタルニ過キズ爾來單

三ラヴラジノ設計ノ基ニ依ラズ諸他方方面ヨリ漸次進行セルヲ見ル
 今ヤ考究者ニ確タル基礎ヲ與ヘタリト雖此作業ハ反テ伊國ニ移轉
 セラルルニ至ル
 ゴルギトナルヒアウツエルリトグラッシーフレッチービーナミータア
 イエルマンソンサカロフダツチニコフ及其他ノ著者ヲ近ク結合セシ
 メ之カ發達ヲ計レリ
 此時ニ於テ説述セザル可クナルモノハベルレチルトカウエンソンノ
 規尼涅發見之ナリ(一千八百三十年)即チラヴラジノ發明ハ麻刺里亞ト
 他ノ疾病ヲ區別スルニ活働ヲ與ヘ規尼涅發見ハ疾病ヲ確實ニ治療セ
 シムルノ目的ヲ達シ兩者相待テ能ク本病ヲ研究セシメタリ
 終リニ必要ナル進歩ヲ望ムハ單純合理的ノ豫防法ト麻刺里亞寄生體
 ノ體外ニ於ケル存否ノ證明及寄生體ノ體內侵入路之ナリ此問題ニ答
 フ可キハ傳染病ノ研究上必須ノ事項ニシテ現時ノ醫學ニ於テ此答案
 ヲ完成セズ此勞力ニ對スルノ尊敬ヲ受ク可キハ論ヲ待タズ實ニ麻刺

地球表面ニ於ケル
 麻刺里亞ノ蔓延

里亞ハ豊饒ナル今世紀ニ於テ勤ム可キハ此問題ニ在ラズヤ

地球表面ニ於ケル麻刺里亞ノ蔓延(第一圖参照)

麻刺里亞ハ地球上廣ク蔓延セル傳染病ニ屬スレモ各地齊シク流行ス
 ルモノニアラズ反テ赤道地方ニ密着繁殖シ緯度ノ増加ト共ニ南ヨリ
 北ニ向テ漸ク減少ス
 最モ多ク麻刺里亞ヲ認ムル處ハアイスランドニシテ殊ニ一千八百六十
 一年ニ於テ流行性ニ蔓延セリセルニ從ヘ本病ハ十五乃至十六度
 ノ等温線内ニ發生スルコト多シト云フ
 麻刺里亞ノ年々反復流行スル地方ハ常ニ多少流行シ一時尋常度ヲ踰
 テ蔓延シ其流行全國ニ及ビ延テ流行ナキ邦國ニ及ボスコアリ
 麻刺里亞蔓延ノ情况ハ短時ニ變化ヲ來シ古來流行セル邦國モ現今ハ
 全ク其跡ヲ絶ツアリ阿蘭陀ノ如キハ十九世紀ノ始メニ於テ麻刺里亞
 流行ノ故國ナリシモ現今ハ減少シテ羅馬ノ流行病トナルニ至レリ而

地球上有名ナル麻刺里亞地

ノ現今ノ流行タルヤ比較的小區域ニ限界セラレ古來ノ如キ惡性麻刺里亞ノ長ク流行スルコトナシ之ト同シク曾テ英國ニ於テモ倫敦及愛蘭ノ如キハ甚タ多數ノ該患者アリシコトヲシテムハム及セルトン等ニ因テ社會ニ報告セラレタルニ拘ラズ現今ハ少數患者ヲ認ムルノミ佛國ニ於テモ亦或地方ノ海岸河口等ニ重症ノ麻刺里亞ヲ發セシモ今ハ良性トナリ獨乙國ニ於テモ地方ニヨリ十八世紀ニ惡性麻刺里亞流行セシモ今日ニ至リテハ全ク之ヲ免ルルヲ得タリ
此他麻刺里亞ハ新開ノ邦國ヲ侵ス例令ハ伊太利北亞米利加等ニ多カリシモ現今大ニ減少シ瑞典ニハ古來甚タ尠キガ如シ
ヒルシユニ從テ現今地球上有名ナル麻刺里亞地方ヲ順次記載スルコト左ノ如シ

亞弗利加ノ熱帶部ハ最重症ノ麻刺里亞地方ニシテ西方ノゼ子ガルコシゴト間ノ沿岸地方殊ニゼ子ガヒアンニ重症流行シ此沿岸地方ノ島嶼ニ流行スベレナ市ハ之ニ反シテ皆無ナリコンゴトノ下方ハ麻刺里亞ノ中心タリ之ヨリ周圍ニ向テ漸次瀰蔓性ニ減少スカブランドハ其痕跡ダモナシ
東南ニ於ケルマタカスガル島附近ノ諸島ハ麻刺里亞非常ニ多ク其沿岸サシシバル附近ニ到ルマテ流行ス紅海ノ西岸ハ僅カノ地點ヲ除ケハ僅々タル麻刺里亞ノ鄉國タリ
サシマツト並ニアベシニヤ殊ニ連山地方ハ同シク中數ニ位シ之ニ反シテアベシニヤ沼トタザアデ沼ノ間ニ非常ナル麻刺里亞ヲ有シ以テツタン地方ヲ圍繞ス
上及中埃及ハ僅少ノ麻刺里亞アリ之ニ反シテシルデルタ地方ノ一部ニ流行ス
北亞弗利加ニ於テハアルギールハ固有ナル本病ノ鄉國ニシテ佛人ノ

軍隊衛生ノ進歩ト共ニ漸次改良セラレタリ
 古來麻刺里亞ハアルギールニ於テ四八%ナリシモ現今之ニ反シテ一
 千八百九十年ノ麻刺里亞ハ三四六%中死者一五%ヲ示セリ即チ死者
 百十二名中
 悪性發作 五八% 惡液質 四三% 間歇熱 二二%
 一千八百九十三年麻刺里亞 八四% 死者 一七%
 一千八百九十四年麻刺里亞 九九% 死者 一〇%
 又大荒地中ノ沃野ニ流行シツタシヲ中心トシ同時ニ下リボリ及ト三
 湖水ノ沃地ニ重症流行セリ
 澳大利大陸並ニ群島ハ麻刺里亞免疫地方ニシテ只ニユウギニア沿岸
 サロモシ島ビスマルク群島ニ流行スニユウカレドニヤニ數多ノ沼澤
 アルモ本病存否ハ不明ニ屬スタスマニヤニユウセルランドフイドシ
 一サモアサンドウチ島等モ同一ナリ
 亞米利加ニ於テハ主トシテ西印度群島南亞米利加東岸ニ於リテ重症

流行シ之ニ反シバマ島ハ比較的僅少ナリ南亞米利加ノ東岸グアナ
 ハ本病ノ占領地タリ
 大ニ劇甚ナル本病發生地ハ北ブラジル等ニシテアルゲンチニヤノ西
 岸ハ免疫地ニ近シ百露及エクアトルノ西岸ハ比較的短カク流行セリ
 中央亞米利加及墨西哥殊ニアトランスチツク沿岸ハ大ニ流行シ常ニ靜
 穩ヲ壞亂セリ
 北亞米利加東岸墨西哥ノゴルフェス地方ハ強劇ナル流行地ニシテ本病
 ハミスシッピー河ニ沿テ國內ニ擴布シ同シクテキサス新墨西哥ノ一部
 ニ流行シ同シクフロリダガオルギアノ中國ヨリ殊ニ東岸ニ在リテ著
 明ナル中心ヲ示シ中央ト西北ニ向テ僅カナリ強キ中心ハ南ニ始マリ
 オントリオエイッ海岸ニ到リ減少シフロロン沿岸附近ハ免疫地ト
 ナル
 ペンシルワニ一及新約克沿岸ノ一部ハ重症ノ中心ニシテ此國ノ内地
 ハフドントンテラワレー等ノ河流ニ沿テ著明ナリシモ土地ノ改良ト共

ニ年々減少セリ
 加拿太ニ於テハオランダリオ沿岸ノ他本病ノ流行稀有ニシテ西方ノ國
 ニ於テ本病ハイラシングウタ及クロラードニ來リ其他カリホルニヤ
 及アリゾナニ顯ハル
 歐羅巴露西亞ハ著明ナル麻刺里亞區域ニシテカスビアン海ノ砂地ヨ
 リカウカシノ低地ビルガニ沿テ黒海ノ北沿岸國タウリエンクリム
 ツェルゾンヘスアラビエシノ諸流ニ沿テ流行シトユラサマリヤカサ
 シニ於テ少クカウガサハ殊ニ麻刺里亞多ク即チ黒海沿岸カスビシ
 海ノ沿岸其他ニ存在ス
 埃國ウシガリトニ於テハ數多ノ地方ニ流行シ主ナル中心ハクラゴ
 ーホヘミアフドウイッタルノ一ニ在リ此流行経路ハドナウノ支流ニ沿
 テ流行セリ此起點ハマルヒヘルドニ始リウシガリト低地ニ及ビ然ル
 後ニ大ウシガリト低地トドナウ及タアイスノ間ニ數多ノ重症麻刺里
 亞ヲ發見シサウヘトテウラウノ間ニ終レリアトリヤニ於テハイスト

リヤミー及ダルマニ一沿岸ニ多ク殊ニ島嶼ニ流行シエスドリンフ
 ラトハ免疫地ナリ
 シルダツニ從ヘハ埃國及ウシガリト軍隊ノ一千八百七十年乃至一千
 八百八十二年間ノ麻刺里亞患者平均數ハ五五〇・三二一・〇％平均數ニ
 タ一年間ニ於ケル實驗數ハ一千八百八十三年ニ三三・九％ナリ陸軍行
 政管區ノ間歇熱患者數ヲ千分比例トシ算スレハインマブルグ二五・九
 フラグ二九・九ブリエシ四三五維那ニ於テ六三・五クライツニ於テ九六
 六レンベルグニ於テ二五〇・六トリエスニ於テ一六六・四サラジニ於
 テ二一一・八トアラニ於テ二四六・七クラガウニ於テ二四四・七ブタベス
 トニ於テ二六六・八ヘルマン市ニ於テ二七七・六フレマブルグニ於テ四
 七三・八アクラムニ於テ五三七・三ナリ
 一千八百七十三年ヨリ一千八百八十二年ニ至ル十年間ニ於ケル急性
 麻刺里亞傳染ノ結果七十二ノ死者ヲ出セリ一千八百八十二年埃國ウ
 シガリト軍隊ニ於ケル除隊ノ數ハ著シク増加シ一千八百八十三年ヨ

ヒレチー半島ニハ南西沿岸ニ流行シ東岸ニハ少ナク其他グアデチアナ
 グアダルクチーラタヨノ沼澤等又カスチリヤエストレマチュラノ高原
 ニモ發生セリ
 佛國ニ於テハ南西方ニ多ク西岸ハ殊ニ製鹽場タルロイレットソイドレ
 ン鹽濱ヲ中心トシ就中有名ナル流行地方ニハロヘホル及マレニチ
 ンアゲニメ内地ニ在リテハドムペスノロクネブレンチ沼附近ニ流行
 セル下著ルシ
 瑞西ニ於テハカシドンテツシノ南方ゲンブ湖ノ下流下口ニ於
 テ僅カニ麻刺里亞ヲ見ルルニ獨乙聯邦ニ於テハ僅カニ南西方ノ羅因
 河岸及ナリノ低地ニ散見シ獨乙中央部ニ於テハ本病ヲ缺キ之ニ反
 シテ北獨乙低地ニハ非常ニ多ク殊ニシレスウイホルスタインノ上
 グルアルデンブルヒグストビレン及羅因低地等ハ其主ナル部分ナリ
 阿蘭陀ハ古ヨリ歐羅巴ニ於ケル麻刺里亞ノ鄉國ニシテ現今尙廣ク流
 行セリ然レモ其西部ニ於テハ減少シ白耳義ノ低地殊ニプロウエンツン

東西オランダ等ニ多ク流行中心ヲ示セリ
 英國ニ於テハイルクシトニ中心ヲ認ムルノ外全ク皆無夫更ニ
 デチアルクボロウラシド島フアルステルニ麻刺里亞流行ス
 スカンデナヴィルウエグル附近ハ本病斷絶シスウエテンニ二入流行ア
 リ
 亞細亞ニ於テハ亞刺比亞西岸及南岸ベルシヤ海灣ノ沿岸地方メソポ
 タミアニ流行シ麻刺里亞中心ニ其他シリヤ沿岸黑海岸カスピアン海
 岸ベルシヤ地方ニ蔓延シ殊ニベルシヤ灣ヲ固守シ尙アルディスタニア
 スガニネオン等ニ存在ス
 重症麻刺里亞中心ニ蔓延シ北西岸ニ顯シ麻刺里亞區域ニ印度流
 域ニ沿テ系統ヲ作リ第二ニ麻刺里亞區域ハマラヤノ南カンダス溪ニ
 於テベルガルジニ蔓延シ其他ハ麻刺里亞中心ニカンダス高原殊ニ
 リドラスニ在リト言ヘリ加之ハラズマラバル錫蘭並ニ其沿岸ヨリ内
 地ノ高地ニハ其發生若シク後印度ノ平原並ニマラツカハ尤モ優勢ナ

日本帝國軍隊ノ麻刺里亞數

ル鄉國ナリ。又馬來群島殊ニスマタラジヤワボル子オツエレベツ等ガ重症ノ中心點ナルモ比律賓ニ至リ減少シテヤムナイコン流域並ニ東京ニガ重症及輕症ノ麻刺里亞稍々擴布セル。其他強劇ノ流行ハ支那ノ沿岸及内地(香港、廣東、上海、朝鮮、沿岸、滿州)ニテ浦鹽斯德ハ殆ンド全ク免疫地ナリ。

大日本帝國ニ於テハ輕症麻刺里亞中等度ニ流行シ我國軍隊ノ最近明治三十年ヨリ三十二年ニ至ル三年間全師團ノ平均ハ六八、四%ニシテ各師團ノ千分比例ヲ列舉ス。左ノ如シ。

- 第一 近衛 二八、七%
- 第二 廣島 三七、二%
- 第三 弘前 三八、七%
- 第四 熊本 五二、八%
- 第五 北海道 五四、二%
- 第六 善通寺 五四、九%
- 第七 東京 五九、六%
- 第八 仙臺 六五、二%
- 第九 小倉 七三、九%
- 第十 姫路 九四、二%

麻刺里亞汎論

人第十二名古屋 九六、三% 第十三金澤 一〇七、六% 第十四大阪 一二八、八% 第十五新領土タル臺灣島ハ麻刺里亞最多キ吾人知ル所ニテ明治七年征臺ノ役ニ在リテハ恒春地方ニ於テ惡性麻刺里亞ニ罹リ死スル者渺カラズ明治二十八年占領後モ連年輕重症ノ流行アリ其中心タル臺中管下最モ重症ニシテ且數多ヲ發生ス其概況ハ第二圖ヲ以テ推知スヘク即チ臺灣ノ麻刺里亞ハ平均二四六一、二%ニシテ内地ノ約三十六倍ニ該當ス。

第二章 麻刺里亞汎論

麻刺里亞病ハ本病寄生體ノ人身體ニ侵入シ病的作用ヲ發スルヲ云フ此寄生體ハ一千八百八十年佛國ニ於テラウランノ發見シタルモノナルガ爾後伊國ニ輸入セラレタルヒヤンノウチルリト等之ヲ研究シゴルギトハ形態學的ニ其形ヲ研究シハツセリトハ臨床的ニ之ヲ講究

麻刺里亞寄蟲論

「アメバ」ノ形態

シ次テ今日ニ要用ナル形體學的ニ特徴ヲ講シ生物學上ニ推究確定シ其發育ニ變化ヲ標明シ終リニ本病ノ原因ヲ推定スルニ至リ

麻刺里亞寄蟲ハ多少強キ運動ヲ有スル「アメバ」ニシテ成熟スレハ半月形ヲ呈シ寄蟲ヲ萌生スベキ若年生殖體ヲ形成シ血行中ニ入り赤血球内ニ侵入シ更ニ新ニ成熟スルモノナリ

此「アメバ」ハ其場合ニ從テ種々ノ特徴ヲ顯ス左ノ如シ

(一) 小無色「アメバ」

(二) 地大有色「アメバ」

(三) 半月狀有色「アメバ」

(四) 有鞭毛體(鞭毛體)

(五) 半月狀體(或鎌狀體)

以上五種中天地玄ノ三形態ヲ麻刺里亞寄蟲ハ成長的若クハ退行的現象ナク疑ナキ所ニシテ其小且ツ不染ナル體ハ最幼ナルモノニ屬シ人稱シテ寄蟲ハ幼沖期ト稱シ此者自由ニ循環スル成形質中ニ檢

出シ得ル此寓所及其發育ノ基素ハ赤血球中ニテ此大ナル通例赤血球ノ五分ノ一ニシテ初メハ赤血球ノ内ニ於テ甚ダ活潑ナル「アメバ」運動アリ周圍ニ向テ突起ヲ作り暫時ノ間ニ種々ニ其形狀ヲ變シ或ハ短縮シ或ハ釘狀ニ或ハ又狀ヲ顯シ此間ニ「アメバ」ハ生育シ血球ノ三分ニ大ナリ自然ニ着色シ而シテ彼ノ運動ヲ持續ス又此色素ハ血球ノ血色素ヨリ吸收シ此作用ニ因リ黑色素トナリ終リニ小無色「アメバ」大有色「アメバ」トナル而シテ此發育高度ニ達スルハ自ラ半月狀ト成リ或ハ種々ノ形狀ヲ採ル可シ此半月狀小體ト色素小體ト自カラ一系統ヲナシ整然タル形狀ヲ顯シ寄蟲ハ向日葵狀若クハ邊緣狀ヲ備シ或ハ不整形トナリ互ニ此系統ヲ進シ終ニ甚ダ至小至微ナル小體ヲ貽ス之ニ他ナラス「アメバ」ハ幼兒ニシテ自由ニ血球ヲ求テ而シテ茲ニ新生殖ヲ營ムニ至ルヲ

半月狀體ト有鞭毛體トハ麻刺里亞寄蟲ノ形體學上ノ變化ニ過ギズ有鞭毛體ハ有色「アメバ」ハ生長シタルモノニシテ自在ニ血液中ヲ運動

麻刺里亞ノ種類ニ從テ其血液ヲ他ノ健康人ニ注射移殖シ其變化ヲ實驗スレバ此寄生虫ノ病理的作用ハ次ノ如キ經過ヲ探ル即チアメバハ血球中ニ侵入シ茲ニ於テ發育生長シ血球ノ構造ヲ破壊シ血球素ヲ變化セシメ色素ヲ分離シ而シテ遊離寄生虫ニ成形物ヲ與フ此際又其血球ノ破壊ハ血球ノ計數ト血球素ノ計算ヲ以テ證明スルヲ得タリ尙本病ノ特徵タル貧血ハ血球素ノ分解ニ因ル或ハ又黑血病ヲ誘起スルコトアルヲ以テ證スルニ足ラシカ

ゴルギトハ多クノ經驗ヲ進メ芽胞成形ノ熱ニ對シテハバツセリトシテ精神的憶想ニ從テ起熱物ヲ血中ニ混入スルニ因テ起熱スルモノトセリニ論ズ又麻刺里亞ノ發見シゴルギトハ是認セル如ク少シモ寄生虫ヲ見ス強キ熱發作ヲ起スコアルハ屢實驗スル所ナリ

寄生蟲ノ發見

麻刺里亞ノ發見

此症狀ニ於テハ寄生蟲ハゴルギトノ經驗ノ如ク脾臟骨髓ノ血液及白血球並ニ組織原ノ内ニ潜伏シ一様ニ生物學的好時季ヲ待チテ血液中心ニ輸出セララルハナラン

此等ハ全ク病原的進歩ニ依ルモノニシテバツセリトハ既ニ熱心ナル注意ヲ以テ寄生虫發見前ニ推察セシ所タリ實際上麻刺里亞ニ傳染スルハ赤血球侵サル可シ而シテゴルギトモ亦寄生虫發見前ニ成形學的ニ血球變化ノ中毒的ナルヲ主張セリ

麻刺里亞有機小體ノ體內ニ侵入スルノ道路ハ吾人ニ確實ナル經驗ヲ與ヘズト雖モ土地ノ氣候トニ因テ發生スルハ顯然タリ而シテ人身體內ニ侵入スルヤ今世紀ノ病床實驗ニ依レバ吸氣ハ傳染病毒ヲ携行スルモノト想察セララル

地底濕潤ト温暖トヲ有スレバ麻刺里亞發生ヲ助ケ地底ノ地質學上ノ性質及海面上ノ高度等ハ僅ニ感應アルノミ若シ地底ニ麻刺里亞發生スルモ地球表面此寄生體發生機ニ適セザレバ長時間其部分ニ止マル

麻刺里亞ノ臨
床的症候

ハバツセリトハ是認セル處ニシテ若シ要約適好ナレバ其發生最迅速ナ
レモ著ルシキ高所ニ達スルヲナク此地底ヨリ蒸發スルヤ大ナル時間
ヲ要セス

飲用水ノ麻刺里亞寄生虫ヲ蔓延セシムルヤ否ヤハ明ナラズト雖モ之
カ媒介物タルヲ推知スルニ餘アリ

マルヒアフツツ及ツルノ經驗ハ更ニゾロモチトマルノ等ニ依
テ實驗セラレ麻刺里亞地方ノ水ハ良水ナルモ之ヲ飲用スルヤ其結
果良カラズ蓋シ胚胎ヲ含有スルモノナラン

寄生體ハ人身體中ニ侵入スルノ機轉ハ瞬間時ニ於テスルヲ他ノ傳染
病ニ於ケルガ如ク疑ガキ事實ニシテ麻刺里亞ノ病床實驗ヲ以テセバ
多少傳染ヲ理解スルニ足ラン

麻刺里亞ノ臨床的症候

人身體内ニ侵入セバ寄生體ハ一定時ヲ經テ彼ノ作用ヲ逞スルモノナリ

麻刺里亞ニ於
ケル血液及内
臟變化ノ順序

(一) 本病ハ直接の種接ハ患者ノ血液ヲ用テ於テ他策ヲ用テ今日認
ルニ能ク臨床的經驗ニ適應ス然レモ寄生蟲ハ長ク體内ニ生活シ著明
ノ症狀ヲ誘起スルコトアリ又長時間少シモ障礙大キク又急性病或
ハ脾臟部ニ外傷ハ麻刺里亞ノ潜伏セルモノヲシテ急性症狀ニ轉化セ
シム即チ曾テ脾腫ヲ成ルモノニ電氣或ハ按摩ヲ試ミ之ニ由テ再發作ヲ
來セシメ實見セシムルヲ臺灣嘉義分院ニ於テ高熱ノ内臟變イタル
麻刺里亞ノ血液及内臟ノ變化ヲ來スノ順序ハ臨床上一定ノ經過ヲ認
メズト雖モ先ツ血液ヲ侵シ其血液ニ毒物即チ起熱物ヲ與シ赤血球ヲ
破壊シ黒色素ヲ形成セルモノナル可ク吾人ハ經驗セルモノヲ左ノ如
クシ

(二) 熱發作ハ本病自然ノ經過ニシテ種々ノ定型ヲ顯ス間歇性ノ熱ナリ
而シテ本病ニハ特徴三アリ惡感發熱發汗之ナリ或ハ時ニ此徵候ヲ失
却シ持續性ノ熱ヲ發シ間歇時ヲ缺除シ新發作ノ場合ニハ稍進行狀ヲ

麻刺里亞傳染
上ノ區別

呈シ多クノ發作集團スルモノアリ此實體ハバツセリノ證明ニ依レ
 ハ第一ハ發作ノ長ク持續セルモノ第二ハ數回ノ發作ヲ呈スルモノ之
 (ナ) 神經障礙ハ種々ニシテ中樞若クハ末梢神經ヲ侵シ此主ナル關係ハ
 血行ニ於ケル中毒症ニ屬ス而シテ此神經障礙ハ或ハ甚タ高度ナル
 アリ又此症狀ヲ以テ患者ヲ死ニ到ラシムルコトアリ此障礙ハ麻
 刺里亞ヲシテ惡性ナラシムルコトアリ此障礙ハ一般ニ此障礙ハ麻
 (六) 血行障礙ハ内臓充血ニシテ特ニ甚タシキ高度ノ内臓炎ヲ誘起スル
 コトアリ皆主トシテ血管運動神經ノ障害ニ起因スルコトニ由リ再發
 (三) 内臓ノ變化ハ大概充血ヲ發シ之カ爲メニ榮養ヲ障害シ永久の若ク
 ハ一時的ノ腫脹ヲ起スモノニシテ已ニ第一回ノ發熱ニ次テ脾臟腫
 起スルコトアリ終ニ肝臟骨髓及神經ニ波及スルコトアリ此障礙ハ
 (ホ) 赤血球ノ崩壞ヲ來シ貧血ヲ顯カスモノニシテ此障礙ハ再發
 (ニ) 黄疸及血色素尿ハ赤血球ノ崩壞下肝臟及腎臟以血行障礙ニ因リ

麻刺里亞傳染
上ノ區別

(ト) 惡液質ハ血液ノ榮養障礙下腹臟器及一般組織ノ榮養障礙ニ因ル
 麻刺里亞傳染ノ輕キハ其必要ヲ認メズト雖モ稍重症ナレバ多少持續
 シ殊ニ本病ニ對スル感受性ヲ作り種々ノ病狀ヲ呈ス今左ニ其系統ヲ
 各別ニ記載ス可シ
 (a) 單純間歇熱ハ種々ナル症狀ヲ發スルモ熱ヲ其主徵トス
 (b) 重症不整麻刺里亞熱ハ熱發作殊ニ重ク之ニ伴發セル症狀モ甚タ著
 シクシテ熱ノ趨勢永ク持續シ而シテ第二回ノ發作ノ來ルコト速ナリ
 故ニ一定ノ熱型ヲ失ヒ不規則熱ヲ誘發スルハ夏秋ノ頃屢經驗スル處
 トス殊ニ一地方ニ於テ重症ヲ發スルコトアリ此症ハ日發熱若クハ三日
 熱ニシテ熱ハ反復再發ス
 (c) 惡性稽留性麻刺里亞ハ病床上重症ノモノニシテ稽留性ノ熱ヲ有シ
 種々ナル熱ノ發作アリ亦種々ノ疾病ヲ誘發ス(稽留性窒扶斯稽留性肺
 炎膽液性僂麻質斯等)
 (d) 誘導性惡性間歇熱ハ重症ニシテ屢死ノ轉歸ヲ取ル所ノ間歇熱ナリ

發作中ハ特異ノ症候ヲ呈シ此發作タルヤ特ニ著明ニシテ生命ニ危險ヲナス(昏睡、吃逆、下利、搐搦、呼吸困難、卒中症、破傷風樣發作等)

(e) 麻刺里亞併發病ハ麻刺里亞傳染ノ結果他ノ病氣ヲ誘起スルヲ云フ例令ハ本病ニ肺炎ヲ起シ其他ノ疾病ヲ併發シ各固有ノ症狀ヲ有シ彼是輕重ヲ異ニスルコトアリ又情況ニ依リ集合熱ト名ク可キモノ即チ各病ノ副發ニシテ單ニ麻刺里亞傳染ニ起因シ麻刺里亞發作ノ退却ト共ニ消失スルヲ以テ本病タルヤ疑ナシ稽留熱ノ種類ハ其症狀ニ特徵ノ現在スルコトナク反テ神經障礙ヲ發スルコトアリ之レ亦麻刺里亞ニ起因スルモノトス

(f) 假面間歇熱ハ神經分布ノ區域若クハ器關ニ一定時期ノ間歇性ノ障害ヲ呈シ熱ヲ有スルコトアレモ症狀甚ク短キモノハ熱ナキヲ常トス稀ニ全經過中熱ノ發作ヲ顯スコトアリ

(g) 麻刺里亞惡液質ハ本病後劇熱發作等ナキ疾病ナリ

(h) 內臟障礙ハ本病傳染後ノ結果ニ因ル慢性肝臟炎、脾腫、慢性心內膜炎

麻刺里亞ノ診斷

等はナリ

多クノ病理家ハ弛張性及持續性熱ヲ說ク然レモパツセリーハ此場合ニ多クハ又稽留熱ヲ顯シ稽留性熱ト弛張性熱ハ實際的ニ其限界確實ナラズト

病理上惡性麻刺里亞ノ區別ハトルチーノ創說ニノ更ニパツセリーノ補足シテ明ニセルモノアリ曰ク惡性麻刺里亞ハ臨床上區別ヲ有スルコトナシト雖モ熱ヲ以テ特徵トシ高熱ハ種々ノ原因ニ依リ生命ヲ危險ニ迫ラシムトパツセリーハ尙患者各個ノ素因ト傳染原特異ノ毒ト二個ノ要素ニ因テ惡性ナラシムト云ヘリ

麻刺里亞ノ診斷

麻刺里亞ハ其地方ノ寓居ト熱ノ定型及其種類ト熱ヲ起スニ特異ノ時季ト有シ脾腫等病床的ノ症候ヲ形成スルハ大ニ價値アリ多クノ場合ハ之ニ因テ診斷ヲ爲シ得ベシ併シ診斷ヲシテ確實ナラシムル時特

顯微鏡的血液
検査

ニ不正型熱經過ヲ採ル場合ニハ顯微鏡的血液ノ検査ニ因ラサル可ラ
 ス此血液検査ニ要スル血液ハ通例指尖ヨリ之ヲ採取ス然レモ亦脾臟
 ノ血液ヲ必要トスルコトアリ血液ヲ採ルニハ始メ指ヲ清潔ナラシメ且
 特ニ能ク乾燥セシムルヲ良トス而シテ若シ脾臟ヨリ採ルニハ尋常ノ
 莫兒比涅注射器ヲ灼熱消毒シテ之ヲ用フ血液ハ新鮮若クハ乾固セル
 者共ニ検査ニ適ス先ツ新鮮ノ者ナレバ物體板上ニ採取セル血液ノ小
 滴ヲ置キ蓋板ヲ被ヒ巴拉賓ヲ以テ封鎖シ五六百倍ノ顯微鏡ヲ以テ檢
 ス可シ

新鮮着色標品ヲ作ルニハ種々ノ方法アリト雖モ就中迅速ナルモノハ
 ゴウリーノ法ニシテ物體板上ニ亞爾個保兒性「メチーレン」ブラウ液ノ
 一滴ヲ滴下シ乾燥セシメ然ル後其上ニ血液一滴ヲ滴下シ蓋板ヲ被フ
 キハ色素ハ徐々ニ血清ニ溶解シ血中ノ細胞要素着色シ寄生虫ハ青色
 ニ着色シ善良ノ標品ニ在リテハ血球モ亦赤色ヲ保ツモノナリ

乾燥標品ハ指ヲ刺シタル後直ニ蓋板ニ血液ノ一滴ヲ採リ第二蓋板ヲ

顯微鏡的血液
検査

被ヒ輕々壓迫シツ、彼是ニ移動セシメ廣ク擴テ後ニ之ヲ分離シ全ク
 薄キ血液層トナシ直ニ大氣中ニ乾燥シ蓋板硝子血液層ヲ上向シテ三
 回酒精燈炎上ヲ通過セシム乾燥標品ハ臨床上ニハ廣ク應用スルコトナ
 シ之レ蓋シ巴拉賓ヲ以テ封スル法及ビ其他種々ノ着色法アルヲ以テ
 ナリ臨床的ノ目的ニハ最速ナル次法アリ先ツ蓋板上ニ酒精ト依的兒
 等分ノ混合液數滴ヲ滴下シ之ヲ乾燥セシメ然ル後一二滴ノ「メチーレ
 ン」ブラウ液ヲ滴下シ一分時ノ後溜水ヲ以テ洗滌シ酒精燈上ニ乾
 燥セシメ加那太拔爾撒謨ヲ以テ封ス可シ此法全然佳良ナルニ非ズト
 雖モ單ニ巴拉賓封鎖ヲ用ユルヲ得可キノ便アリ寄生虫ハ青白色色素
 ハ黒點トナリテ顯ハル

脾臟ノ血液ヲ採取スルハ循環血中ニ寄生虫ヲ證明シ能ハサルモニ用
 ヲルノ法ニシテ夏秋流行ノ際ニ屢々遭遇スル所タリ此検査ニヨレバ
 已ニ記載セルガ如ク赤血球崩壞症狀及幼弱寄生虫ノ甚々無色「アメバ」
 ニ類似セルモノヲ認ム可シ之レ此検査上ニ決シテ忘ル可ラザルノ要

件ナリ
一般ニ染色法ハ麻刺里亞寄生生物ノ診斷ヲシテ最確實ナラシムルノ良法トス

麻刺里亞治療
汎論

麻刺里亞治療汎論

麻刺里亞感染ノ學理的療法中主要ナルモノ左ノ如シ

- (A) 直接ニ病原的寄生蟲ヲ制止スルノ作用アル藥物ヲ以テ廢滅セシムルノ法
- (B) 間接ニ病原的原因ヲ制止シ有機體ヲ自然ニ防止スル藥物ノ作用ヲ逞セシムルノ法
- (C) 傳染防遏法

(A) 病理的原因上直接ノ作用

麻刺里亞寄生蟲ニ對スル規尼涅ノ作用

病理的原因上
直接ノ作用
麻刺里亞寄生
蟲ニ對スル規
尼涅ノ作用

病原ノ直接制止作用ニ疑ナキ理想療法アリ茲ニ問題ヲ設クルハ單純ニ麻刺里亞寄生蟲ニ作用スル藥物ヲ有スル哉否ヤニ在リ

規那皮及規那誘導物ハ概テ定型及特徴ヲ顯シタル本病ニハ百年餘ノ經驗上良ク其効績ヲ呈ス即チ熱發作ノ經驗ト其他總テノ麻刺里亞定期症狀ニノミ作用スルハ規那誘導物強カラ占ム此傳染ニ効力ヲ有スルヲ豫定セルハ一千八百六十八年ニピンツノ研究ニ於テ規尼涅ノ「プロトブラスマ」上ニ作用シ之ニ因テ傳染病原ニ及ホスヲ説明シタルヲ以テ嚆矢トス

病原ノ發見後ハ此學理ニ從テ重要ナル經驗ヲ企ツルニ到レリ此精神ヲ以テ試驗ヲ施シタルハラヴェラン及ボツクナリラヴェランハ二個ノ麻刺里亞血液標品ヲ作り一方ニ規尼涅ヲ加ヘタルニ規尼涅ヲ加ヘタルモノハ「ヘマトツオアリン」運動ヲ止メ鞭毛ヲ消失スルヲ經驗セリ此經驗ノ價值ハマルヒ「アウア」及ツセルリトニ依リ大ニ攪亂セラレタリ之レ蓋シ食鹽若クハ蒸餾水ヲ麻刺里亞血液ニ加フルモラヴェランガ

藥ノ一定量ハ次ノ發作ヲ防止スルノ功アルモノナルヲ知ラシム
 三日熱「アメバ」ノ規尼涅作用ハ之ニ異ナリ血球内發育時期ニ於テハ四
 日熱ニ於ケル此作用ヨリハ寧ロ鋭敏ニシテ寄生蟲ノ生活ヲ妨ケ或ハ
 之ヲ死滅セシム
 ゴルギーノ經驗上芽胞及半月體ハ規尼涅ニ對シ最強ナル抗力ヲ有シ
 殊ニ血球内ノ「アメバ」ノ幼弱ナルモノハ抗力最モ強シト
 寄生蟲ニ對スル規尼涅感應ノ大小ハ全ク防護物ノ多少ニ關係スルモ
 ノニシテ若シ寄生蟲ノ厚キ血球素ニ保護セラレバ規尼涅ノ攻撃ニ
 抗抵ス寄生躰若シ發育シテ血球中ノ物質ヲ消耗スレバ終ニ血球ヲ壞
 崩ス故ニ規尼涅ノ効力ヲ遲スル所以ナリ此原理ヨリシテ芽胞ハ抗力
 最大ニ之ト同シク三日熱寄生蟲ハ四日熱寄生蟲ヨリ多クノ感應アリ
 (「ゴルギー」半月體ニハ規尼涅ノ効力微弱ナリ
 内臟組織内ノ寄生蟲ニハ規尼涅作用血行ニ於ケルモノヨリモ弱シ
 形體學的ノ要約ニ因ル規尼涅ノ作用ハ前後相次テ「バツセリー」
 「ゴルギー」

麻刺里亞寄生蟲ニ對スル「メチーレン」
 「ブラウ」ノ作用

「ローマ」ノウスキト及マンナベルヒニ因テ研究セラレタリ
 此研究ノ進行スルニ從テ規尼涅ハ愈々血球ノ壞疽的症狀ニ作用スル
 彼ノ「アメバ」ノ運動ヲ奪却シ終ニ此運動ヲ止メ彼ノ原形質ヲ崩壞スル
 ヲ知リ「バツセリー」ハ此ノ運動ヲ防止スルカ障礙スル前一時運動ヲ亢
 進スルヲ檢出シ其後マンナベルヒノ證明スル處トナレリ麻刺里亞
 寄生蟲ニ規尼涅ノ作用アルハ全クピンツノ言ノ如ク規尼涅ハ下等有
 機體及成形原質ニ作用スルヲ發見スルニ基キ遂ニ今日ノ如キ程度ニ
 進歩スルノ原因ヲ爲セリ

麻刺里亞寄生蟲ニ對スル「メチーレン」
 「ブラウ」ノ作用

規尼涅ノ他「メチーレン」
 「ブラウ」ニ就テ攻究スルヲ要ス此藥物ハ一千八
 百九十一年「エー」ルリッヒ及「グットマン」等始メテ麻刺里亞療法ノ目的ヲ以
 テ使用シ「ロー」ジンモ亦始メノ著者ノ如ク規尼涅ニ優リタル者ト誤解

麻刺里亞症ニ於ケル直接作用

シテ使用セルモノニシテ蓋シ水、鹽、メチレンブラウ溶液ヲ用ヒ顯微鏡下ニ於テ血液寄生蟲ニ對シ經驗セル結果ニ由ル此溶液ハ本品ノ一〇生理的食鹽水五〇〇〇〇トヲ以テ作り此液ヲ寄生蟲ニ致セハ忽チ其運動ヲ減殺シ終ニ死ニ到ル然ルニ規尼涅ニ於テハ一〇ト五〇〇〇ニアラザレバ此結果ヲ認ムル能ハザリシ然レモ已ニシテ此經驗ハ正確ナラザルヲ認メ充分研究ノ後麻刺里亞療法上規尼涅ハメチレンブラウニ卓越セルモノナルヲ再認セラル、ニ至レリ

ウアルウアソリーペロニーハ之ニ反シ患者血液中ノ寄生蟲ニ對シメチレンブラウ療法効果如何ヲ試ミ殊ニ不整熱ノ寄生蟲及半月體ハ此藥物ニ因リ侵害セラル、モノトセリフアレンスキー及ブラタアスキモ亦之ニ同意シ此藥物ノ感應ニ依リ血中ノ鎌狀體ノ消失スルヲ見タリト然レモ是等ノ實驗者ノ注意ハ完全ト云フヲ得ス或ハ又症狀ノ如何ニ依リ本品ヲ使用スルノ場合ナキニシモアラズ

麻刺里亞ニ因スル黒水熱ト規尼涅トノ關係ニ就テハ後章黒水熱療法

ノ條下ニ詳論ス可シ

寄生蟲萌芽ニ於ケル直接作用

(B) 寄生蟲萌芽ニ於ケル直接作用

麻刺里亞症ノ經過ニ大關係ヲ有スルハ各人各個ノ抵抗力ナルコト何人モ疑フ容レサル處ニシテ病床實驗上衛生的關係ヲノ佳良ナラシムレバ疾病ノ自然治癒スルコトアルハ屢見ル所タリ即チ住居ノ轉移榮養ノ佳良適宜ノ安靜等其首要ナルモノニ屬ス

此自然的治癒ヲ進ムル類例ハ明了ナラズト雖モ種々憶説ヲ以テ之ヲ説明シ殊ニ信ス可キハ強力ナル食細胞説ニシテ此食細胞ノ證明ニ種々アリ伊太利ニ於テハ(ラヴラン)此細胞ニ依リテ寄生蟲ヲ喰ヒ盡スモノト想像シマトシユニコツプ之ニ同意ヲ表シマルヒアファウア及ビグナミーゴルキー等モ亦之ヲ證明セリ

マルヒアファウアツエルリीडラニールハ顯微鏡下ニ麻刺里亞血液ヲ検査シ血行中ニ於ケル食細胞ヲ研究シグアルミービクナミーハ惡性症ニ於ケル屍體ニ就テゴルキーニ從テ研究シ食細胞ト病床熱型ニ

注意シ此着眼ニ因リ作業ヲ説明シ又此研索法方ヲ確定シ麻刺里亞原
 因ト實驗上ト相符合セルヲ證明セリ
 ゴルギーハ貪食細胞ヲ循環血液中ニ認知シ發作ノ始メ殆ト三四時ニ
 増加シ更ニ三四時間ヲ經レバ消失シ之ト共ニ發作ノ終局スルモノト
 ナシ而シテ一定時ヲ經レバ新發作ヲ反復ス此時間ハ八乃至十二時間
 持續シ貪食細胞ノ種類ハ發作ノ現象ニ適合シ寄生蟲發生成立スレバ
 之ト同時ニ發作ヲ誘起シ又之カ生熟ヲ遂クレバ寄生蟲ハ半圓形ノ形
 成ヲ始ムゴルギーハ此時期ニ於テ白血球ハ色素ヨリ分離セル物質ヲ
 含有スト云ヒ之レ半圓體ノ分離ニ因テ之ヨリ受クルモノトナセリ貪
 食細胞ハ主トシテ骨髓及脾臟内皮細胞ノ内ニ走入ス此貪食細胞ハ巨
 大ナル細胞ニシテ小核ヲ有シ骨髓及脾臟ヨリ起ルモノニシテ或ハ黒
 色素ヲ抱容スルカ貪食細胞ノ黑色素貪食甚々稀ニハ成形質ヲ含有シ
 最容易ニ檢出スルヲ得可シ
 麻刺里亞ノ自然治癒ハ如何ナル作用ニ起因スルヤ之ヲ決スルヲ甚々

明了ナラズト雖モ實際上證明スル處ハ本病ニ罹ルルハ白血球ノ數著
 シク減少スルガ(ケルシ及デオニシ)故ニ茲ニ存スル巨大白血球ハ發作
 ノ間ニ成立シテ自然的治癒ノ作用ヲ呈スルハ疑ナキガ如シ然レモ今
 日迄尙確定ノ域ニ達セズ只爭議ニ任ズルノミ又他ノ憶説ハ即チ高温
 説ニシテ此説ニ依レバ病原ハ此高温ノ爲メニ破壊セラレ之ガ爲メニ
 自然治癒スト然レモ之レ亦甚々信用スニ足ラズ想フニ此ノ温ハ半圓
 體ヤ寄生蟲ヲ壞崩スルノ原因ニアラザル可シ
 此治癒ノ眞原因ハ或ハ血漿ノ性質變化ニ歸ス可シ此變化ハ能ク寄生
 蟲ニ感應ヲ有スルモノニシテ例令ト慢性或ハ長時持續セル麻刺里亞
 ニ在リテモ靜脈内ニ食鹽水ノ注入ヲ施シ速ニ制止シ得ルヲ以テ明カ
 ナリ
 本病ノ自然治癒アルハ確實ニシテ人體ニ有効ナル藥物ヲ投スルモ亦
 麻刺里亞ヲ容易ニ治療セシムルノ特效アリ
 此原因ニ依リ古來強壯藥トシテ撰用セルモノ砒石化合物及鐵劑水治

法ハ共ニ麻刺里亞臨床的療法ニ大ニ聲價アルモノナリ

傳染防遏法

(C) 傳染ノ防遏法

根治療法時期以前即チ傳染病原ヲ消滅セシムルノ目的ヲ達スル能ハザルキニ此制遏法ヲ施スキハ反テ不良ノ結果ヲ來スヲ以テ全ク寄生蟲ヲ制服スルノ策ヲ止メ熱發作ヲ始ムレバ強力ノ解熱藥ヲ以テ強テ熱ヲ抑壓スルヲナク適當ノ時期ノ至ルヲ待ツベシ然レバ他ノ症候ヲ防禦セサレバ反テ重大ナル神經系ノ障礙ヲ來スヲ以テ之カ準備ヲナス可キハ經驗上將ニ然ル可キ處ナリ古來此目的ヲ以テ刺絡法ヲ試ミタリト雖モ實際ニ徵スルニ贅法ニ屬ス然レバ此刺絡法ハ最始ニ之ヲ施セハ發作ヲ防止スルハ疑ナク之レ血液中ニ存在スル毒素ヲ體外ニ排除スルニ因ルナラント言フモノアリト雖モ容易ニ信ヲ置キ難シ如斯療法ハ蓋シ僅ニ採ル可キニ過キズ然レモ更ニ重キ症狀即チ搖蕩失神等ヲ誘起スルノ虞アルキハ之ヲ施スモ亦可ナラン是等ノ療法ハ發

庇護アルキ不正確ナルモノニ茲ニ採用ス可キ療法ハ發作ヲ除去シ發作ヲカラシムルニアリ蓋シ此刺絡法ハ只其瀉血ニヨリ一時發作ヲ抑壓スルノミ完全ニ治癒セシムルニハアラバ發作ヲ進メ種々ノ循環器及神經系統ノ重キ障害ヲ來スヤ之ニ應スルノ策及發作現象ニ伴ハレタル療法的攻撃ニ於ケル藥物ニ就テハ後條ニ詳説スル處アリト總テ假面性症ハ寄生蟲ニ起因スルハ論又俟タズト雖モ急性發作ニハ其症狀ニ從テ處置スルヲ要ス然レモ此種發作ニ對シテ熱發作ハ症候的療法ハ少シクモ治療ニ價值ヲ有セズ只厭フ可キ症狀ヲ和スルノミ故ニ熱發作ニ就テノ療法ハ多クハ疾病ノ原因ニ向テ攻撃ヲ加ヘ血液ノ變化ニ適應ス可キモノニアラズ故ニ別ニ變化ヲ來ス原因ニ向テ攻撃シ目的ヲ達スルヲ良トス

血液變化ノ原因ハ三個アリ第一ハ寄生蟲ノ作用ニ因リ赤血球ヲ破壊ス第二ハ傳染ノ爲メニ來ル血液調製機關ノ變化ニ因リ重キ榮養障礙ニ歸ス之レ麻刺里亞惡液質ニ於テ知ルベシ

麻刺里亞患者ノ貧血ハ寄生蟲作用ノ直接結果ナリ故ニ病原ヲ除去スルヲ以テ療法ノ本旨トス而シテ衛生上及治療上ヨリ血球ノ回復ヲ計リ貧血ニハ血液製造機關ノ變化ニ起因スルヲ以テ衛生的療法ヲ施スト雖モ屢其結果ヲ認メサルコアリ

器關ノ變化ハ傳染ニ因テ來ルヲ以テ二種ノ療法アリ即チ原因療法及對症療法之ナリ然レモ其一ニ因テ他ニ及スコトヲ得ルヤ論ヲ俟タズ此必要ナル原因療法ハ獨リ血液寄生蟲ヲ破壊ス可キノミナラズ尙内臟ノ眞性組織ニ侵入セル寄生蟲ヲモ壞崩セサル可ラス症候的療法ハ只一時不良ノ結果タル内臟ノ消耗ヲ防クノ價值ヲ有スルノミ

麻刺里亞療法上所用藥物

麻刺里亞療法上所用藥物

規那製劑ハ麻刺里亞ヲシテ制止セシムルニ用ユル所ノ藥物中首坐ヲ占メ就中規尼涅ヲ最良トスルハ療法總論ニ於テ已ニ決スルガ如シ而シテ規尼涅ノ麻刺里亞ニ作用スルハ主トシテ寄生蟲ニ効力ヲ及ホス

ガ故ナルコトモ亦顯然タリ

古來規尼涅ハ血中ニ作用スルノミナラズ神経系統ニ感應シ神経官能ヲ遲鈍ナラシメ之ニ因テ發作ヲ妨害スルモノト主張セルハブリクエトニシテ又規尼涅ノ神経系統強壯作用ハ瘴氣毒ノ感應ヲ減少セシムルモノナルコトヲ唱導セルハヒトウクスナリ

總テ規尼涅ノ制熱力ハ成形質ニ作用シ神经力ニ感スルモノニシテ多クノ經驗上規尼涅ノ制熱力末梢血行上ノ作用及熱ノ損失ハ總テ他ノ解熱藥ト相同シク血管ヲ擴張シ温ヲ排除スルニ依ルモノタリ然レモ此點ニ於ケル經驗ハ決シテ同一ナラズ唯動物ニ於ケル試驗ハ能ク之ニ適合ス皮膚温政ノ經驗ハ人ニ於テハ之ヲ温浴後等ニ檢シタルモ其方法適當ナラス規尼涅作用ノ末梢血行ニ於ケル温政ヲ鼓舞スルコトハ明瞭ナラス反テ温ノ發生ニ感應シ稀ニハ神经力ヲ助クルコトナシビンツハ熱心以テ規尼涅作用ノ説明ヲ一定セント勉メタリ

規尼涅ノ麻刺里亞症狀ニ効力ヲ有スルハ特ニ寄生蟲ノ鎮壓力ニシテ

總テノ關係及經驗上已ニ言フ所ノ如シ而シテ此作用ハ忽チ變化ヲ來シ暫時間持續スルニ過キス他ノ解熱藥ノ如シト雖モ規尼涅ハ此持續方比較的ニ多シ

理論的關係ハ暫ク措キ本品ノ醫療上麻刺里亞ニ必要品ナルハ人ノ知ル所ニ又多量ニ之ヲ用ユ此用法ニ就テハ可及的發作ニ注意ス可シ規尼涅ヲ投スルニハ首トシテ各人ノ能耐カチ有スルヤ否ヤニ顧慮ス可シ著シキ規尼涅中毒ハ嘔吐種々ノ神經障礙殊ニ心臟及血管運動神經ヲ侵襲スルモノニシテビシツク硫酸規尼涅ノ少量ニ於テ顔面充血次テ發麻疹ヲ發スル一患者ヲ見ホリニルハ〇、一五ノ少量ニ於テ同症ヲ呈スルヲ見タリト云ス

トロトゼト及ビトドクネニ三五ノ規尼涅ニ因リ中毒ヲ起シ一日間精神錯亂ヲ發スルヲ見トトメスセリトハ又藥物中毒的出血ヲ腸胃ニ誘起シ血尿血色素尿及黃疸性血尿熱ヲ起スルヲ記セリ然レモ此中毒症狀ハ醫藥用シテ用ユルノ適量ニ於テハ揚言スルノ要ヲ認メス

規尼涅鹽ノ水中溶解量

此作用ヲ避クルニハ神經質ノモノニ投スルニ當リテ注意シ始メハ少量ヲ以テ能耐カチヲ試ム可シ茲ニ注意ス可キハ傳染ノ確實ナルモノニ之ヲ投スレバ大概目的ヲ達ス可シ規尼涅ヲ投ズルヤ屢々之ヲ嫌惡スルモノアリ殊ニ注意ス可キノ點ナリ

此他療法的藥量ハ決シテ致命ヲ惹起スルコトナク之ヲ發スルハ非常ノ大量(一〇、〇—一二、〇)ナルカ或ハ未熟者ノ錯誤ニ因リテ來ルモノナリ藥物學的ニ規尼涅鹽類ハ病床ニ用ヒラル而シテ此規尼涅ノ水ニ溶解スル多少ハ吸收ノ遲速ニ關係ヲ有ス故ニ治療上便宜ノ爲メ左ニ溶解表ヲ示ス

重 硫 酸 規 尼 涅	水 一 分 二	〇、六六 溶解ス
中性、スルホウイナチニム規尼涅	水 一 分 二	〇、七〇 溶解ス
中 性 乳 酸 規 尼 涅	水 一 分 二	二、〇〇—三、三〇 溶解ス
中 性 臭 素 酸 規 尼 涅	水 一 分 二	六、三三 溶解ス
中 性 重 硫 酸 規 尼 涅	水 一 分 二	九、〇〇 溶解ス
鹽 基 性 乳 酸 規 尼 涅	水 一 分 二	二、〇〇—三、三〇 溶解ス

規尼涅製劑ノ規尼
涅含有量表

鹽基性鹽酸規尼涅	水一分ニ	二、四〇溶解ス
鹽基性臭素酸規尼涅	水一分ニ	四五〇二溶解ス
鹽基性硫酸規尼涅	水一分ニ	五八二、〇〇溶解ス
規尼涅製劑ノ規尼涅含有量表		
鹽基性鹽酸規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅八一、七一
鹽基性重鹽酸規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅八一、六一
鹽基性乳酸規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅七八、二六
鹽基性臭素酸規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅七六、六〇
鹽基性硫酸規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅七四、三一
鹽基性スルホウイナチム規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅七二、一六
中性乳酸規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅六二、三〇
中性重鹽酸規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅六〇、六七
中性重硫酸規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅五九、一二
鹽基性スルホウイナチム規尼涅	一〇〇、〇分	規尼涅五、六、二五

規那鹽類用法 實際上多ク使用スル鹽類ハ鹽基性鹽酸規尼涅我國ニ於テハ硫規ニシテ鹽酸規尼涅ヲ處方スレバ藥舖ハ通例本品ヲ投ス又

硫酸鹽及重硫酸鹽ヲ用ユルハ規尼涅ノ含量豐富ナルニ因ル重硫酸規尼涅ハ能ク溶解ス故ニ重硫酸規尼涅ヲモ亦常用ス單純硫酸鹽ハ溶解力弱シ故ニ溶液トノ處方スルニ便ナラズ
他ノ規尼涅製劑ノ此問題ニ來ルモノハ續草酸規尼涅ニシテ屢治療上用ヒラル之レ規那ノ有効分ト續草酸ノ有効分ト聯結セルモノニシテ第三世拿破侖此鹽ノ創造者タリ續草ニ因テ規尼涅ノ嫌惡スベキ神經作用ヲ制止スルノ効ヲ有ス
伊太利ニ於ケル多クノ實地醫ハ續草酸規尼涅ハ他ノ規尼涅鹽ニ優レル強壯藥ナリト云ヒカンタニトハ最モ好テ麻刺里亞患者ノ神經系或ハ衰弱的症狀虛脫等ヲ呈スルキニ用ヒ又麻刺里亞的神經病ニ用ヒラル亞砒酸規尼涅ハ規那ノ有効分ト砒石ノ結合セルモノニシテ慢性症狀ニ用ユ此用量ハ甚タ少量ニシテ實際ニ用ユルニ適セス如何トナレバ規尼涅ノ含量甚ダ少ナクバツセリトハ通例數密瓦ヲ用タリシカ著明ノ効力アリタリト即チ三瓦半ヲ八日ニ用ヒタリ本品ニ就テハ數多

議論アル處ニシテカシタニノ注意セル如ク二個人作用ヲ聯結セシメタルヤ確實ニシテ此危險ナル鹽類ヲ用ユルヨリハ寧ロ兩藥ヲ各別ニ處スルニ如カズ

規尼涅鹽ハ通例皮下注射及灌腸劑トシ或ハ直接ニ靜脈血中ニ注入ス皮膚ヨリ藥物ヲ輸入セルタンツリ及ブリハウラーノ經驗ニ依レバ規尼涅鹽ノ皮膚ヨリスル吸收ハ銳ナラズ從テ麻刺里亞ニ對シテ特ニ足ラズ只中性規尼涅鹽ニ於テノミ其吸收ヲ證明スルニ過ギズト規尼涅服用ノ道ヲ胃ニ採ルキハ大概價值アリ即チ胃ハ能耐力ヲ有シ吸收ニ障礙ナク非常ニ速ナル作用ヲ望マサル限リハ主トシテ一定ノ時期ニ充分ノ量ヲ血行中ニ吸收シ寄生蟲ニ作用ヲ逞ニス而シテ其用法ハ種々ノ形態ヲ以テ目的ヲ達シ得ルモノニシテ就中溶液ト爲シ用ユルハ其吸收速ニシテ利益アリト雖モ規尼涅ノ速ニ尿中ニ排泄セラル、ユヲ忘ル可ラズ已ニ投藥ノ後十五分時ニシテ之ヲ尿中ニ認メ六時間ニシテ高度ニ達シ三十六時間ニシテ消失スルカ或ハ其痕跡ヲ

殘スニ過キス之ニ反シ若シ規尼涅ヲ原形(散藥)ニテ投スルハ甚然徐々ニ吸收セラル故ニ一定時ノ血中吸收量ハ正ニ減少ス此原因ニヨリ處方上第一溶液第二散劑トシテ投スルノ良トス殊ニ丸劑ニ於テハ最モ不確實ニシテ若シ投スルニ散又撰キモ溶液ニ比シテ四分一乃至三分一ノ多クハ吸收時間ヲ要スルハ溶液ニ比シテ四分一乃至三分一ノ多クハ患者ニ劇シキ苦味ヲ與ヘ之ヲ改良ス可キノ方法ナシ故ニ之ガ爲メ往々嫌惡セラレルモノニシテ咖啡ハ尙不十分ナガラ味覺ヲ蓋フ可シト雖モ此處方ニ對テ溶解スルモノ一部ハ咖啡中ノ單寧ニ因テ不必要不溶解性ナル單寧酸規尼涅ヲ造ルル患ヲ以テ又一日ニ投スル藥ハ一回乃至二三回ニ分服セシムルモ十五分ヨリ二十分間ニ分服セシム可シ然ルレバ一時間内ニ全量ヲ輸入セラル可シ

常ニ一定量ヲ投スルノ時間ハ通例熱發作ハ五六時間前タルヘシ然レ此規定ハ各臨床的症狀ニ從テ變スルヲ要ス是等ノ詳細ハ療法各論ニ於テ麻刺里亞ノ種類ニ從テ之ヲ説明セン

麻刺里亞療法上所要藥劑ノ用法及用量

藥物ノ量ハ患者ノ年齡ト其製劑ニ依リテ異ナリアリ小兒ハ年齡ニ由リ鹽規ノ數垓瓦ヲ投シ大人ハ一五乃至三〇ヲ以テ足ル

麻刺里亞療法上所要藥劑ノ用法及用量ヲ概論スレバ如左

(一)鹽酸規尼涅ハ一〇ヲ溶液トシテ半時間ヨリ一時間内ニ分服セシム

最モ良キヲ頓服トス散トシテハ〇五宛二三包ヲ作り「オブライト」ニ包ミ一時間内ニ用ユ但シ鹽酸含有ノ水ヲ以テ飲用スルヲ良トス九ハ一五乃至二〇ヲ一時間内ニ投ス

(二)鹽基性硫酸規尼涅ハ一定量ヲ溶液トシテ用ユルヲ法トス

(三)重硫酸規尼涅ハ一乃至二〇ヲ水劑散劑共ニ用ウ九ハ一五乃至二〇

(四)纈草酸規尼涅ハ〇六乃至〇八ヲ溶液トシ九ハ一二小兒ニ投スルニハ通例十分ノ一瓦等各年齡ニ從テ處方ス可シ而シテ若シ要スレバ增量ス可シ但シ此鹽ハ規尼涅ノ含量比較的尠シ

灌腸法ハ通常或ル原因ニヨリ服藥スル能ハサル場合ニ行フモノニシテブリクエットニ從ヘハ此法ハ吸收速ニシテ常法ニ優レト云ヘリ然レ

ル亦一方ヨリ論ズレバ此法ハ消費量多キノ弊害アリ此迅速ナル吸收ハ麻刺里亞ニ對シ療法上甚ク要用ナリ此法ハ一定時ニ大量ノ藥ヲ循環血液中ニ認ム然レバ此法ハ發作ハ前一二時ニ施ス可シ直腸ヨリ藥ヲ輸送スルニハ溶液ノ他尙坐藥トノ挿入スルヲアリ此種ノ處方左ノ如シ

處方

鹽酸規尼涅

蒸溜水

芳香阿片丁幾

先ズ右處方ノ一半ヲ灌腸シ更ニ半時間ノ後之ヲ行フ小兒ニハ一年毎ニ〇一五宛ヲ處シ且多クハ溶液トシテ用ニ坐藥トシテハ〇二羽ヲ用フ皮下注射ハ最確實ニ且ツ最速ニ効力ヲ呈スルノ處方ニ屬ス而シテ實際甚ク少量ニシテ目的ヲ達スルヲアリアルベルトニ「チオット」ハ規尼涅ヲ注射スレバ肝臟ニ感應アルモノニシテ一部ハ茲ニ止マリ後

可トス

處方

鹽酸規尼涅

食鹽

蒸溜水

一〇〇

〇〇七五

此溶液ヲ透明ニ保ツニハ微温トシテ豫メ煮沸濾過シテ後用ユ可シ其
 方法ハ前膊靜脈ノ腫脹スルマデ肘關節ノ上方ニ壓定綑帶ヲ施シ其腫
 脹ヲ待テ皮下注射器ノ針ヲ下方ヨリ上方ニ向テ小靜脈ニ刺入シ尖端
 ヲ固定シ注入ニ要スル一定量溶液ノ五立方仙迷ヲ徐々ニ注入シ此働
 作ノ間ニ皮膚ノ隆起ヲ形成セシメサル様注意ス可シ之レ針尖ノ正シ
 ク靜脈腔ニ刺入セサルニ因ル注入終レハ綑帶ヲ除去シ豫メ靜脈内ノ
 液ヲ驅逐シ針孔ハ格魯胃膜ヲ塗布ス可シ止血ニ便ナルガ爲ニ肘窩ノ
 靜脈ヲ撰ムヲ要スバツセリ一ハ多ク此法ヲ用ヒシモ局處障得及腫瘍
 ヲ形成シタルコトナシト云フ且此法ハ効力確實ニ速効アリ一〇ノ

規尼涅鹽詳言スレバ全製劑ノ四十乃至八十仙瓦量ニ於テ屢良果ヲ收
 メ同氏ハ甚タ重症ト雖モ再發ヲ防止スト云ヘリ

此ノ大量ノ注射殊ニ一〇ニ於テ直ニ規尼涅中毒ニ固有ノ症候ヲ呈シ
 口内苦味眩暈失神悶絶等ヲ起シ脈ハ始メ小ニシテ次デ徐脈トナリ然
 ル後徐々ニ耳鳴ヲ發シ終ニ全ク雙トナリ煩悶皮膚冷却ヲ來ス然レモ
 最長キモ二十分間ニ過ギス反對藥ヲ投セサルトキハ此症狀ニ陥ル
 アルモ心臟充奮藥ヲ用ユレバ此症狀ヲ減スルヲ得可シ

バツセリ一ノ研究ニ依レバ此法ニ依リ注入セル規尼涅ハ他ノ方法ヲ
 以テセル規尼涅ヨリ體外ニ排泄セラルルヤ速ナリト云フ而シテ此注
 入ニ最良ナルハ發作ノ前一二時間ニ在リ

規那皮中ノ種々ナル亞爾加魯依士「キニジン」ニシンコニン「シンコニジ
 ン」「ヒノジン」六種々ノ方法ヲ以テ麻刺里亞ニ試用セリ然レモ其用タル
 ヤ規尼涅ニ同シク其効ヤ確實ナラズ

「キニジン」ハ單味ニテ一日一二ヲ散トシ或ハ一二滴ノ硫酸ヲ加ヘ溶液

トシテ用フ此鹽ハ硫酸鹽ヲ最優トシ一乃至二〇ヲ散丸水溶液トシテ
 投スルニ同ク其效ハ強クナラズ
 「ジシヨミン」ハ硫酸鹽ヲ良トス殊ニ本品ハ硫酸規尼涅ニ同量同形トシ
 テ用フ他ノ鹽類鹽酸醋酸及丹寧酸鹽ヲ用フ丹寧酸鹽ハ特別ナル治療
 上ノ價直ヲ有ス可シト雖モ其効力明瞭ナラズ
 「キノイジシ」ハ鹽酸硫酸枸橼酸鹽ヲ灌腸トシ若クハ皮下注射用トシテ
 用ユ用量規尼涅ニ同ジ
 此等ノ亞爾加魯依土ノ寄生蟲ニ於ケル作用ハ研究上未タ明ナラズ而
 シテ例之ヒ其作用ハ相同シキモ功力遠ク規尼涅ニ及ハズ故ニ之ヲ放
 棄スルニ如カズ
 規尼涅ハ其價額甚ク高ク之カ爲ニ亞爾加魯依土ヲ代用スルコトアリシ
 モ今日ハ其價低減セラレタルヲ以テ其必要ヲ見ス
 規那皮ハ一般ノ性質ヲ保ツト雖モ亞爾加魯依土ノ含量ヲ殊ニシ且共
 ニ含有スル所ノ酸即チ丹寧酸ハ強壯収斂ノ性質ヲ有シ規那皮ハ主成

分ハ麻刺里亞ニ價値アリ若シ強壯収斂ヲ望マバ規那皮ヲ用ユ可シ故
 ニ此病ノ貽後病タル貧血衰憊惡液質等ニ用ユ規那皮ハ通例煎劑ニ一
 〇〇乃至一五〇ヲ一五〇〇乃至二〇〇〇ニ煎出シ濾過シ二十四時間
 ニ分與ス五乃至十滴ノ鹽酸ヲ加ヘ殊ニ該皮ヨリ水製或ハ亞爾加魯依
 製越幾斯若クハ丁幾ヲ製シテ用ユルモ煎劑ト同一ノ効ヲ有ス
 「クイニユン」ハ佛國ニ於テ越幾斯ト名ク之レ酒精ト加兒基ヲ以テ作ル
 モノニシテペロシデレボウヒアルダトハ之ヲ治療上ニ用ヒタリ是
 レノ製劑ニシテ規尼涅聖古尼涅及總テノ規那皮効分ヲ含有シ此製
 劑ヲボーピアアルダトハ殊ニ慢性頑固ノモノ及屢再發セル麻刺里亞
 殊ニ傳染地方ニ居住セル虛弱患者ニ賞用セリ
 ラヴェランハ神經痛ニ効力アルヲ見殊ニ冬季間屢再發シ規尼涅ノ無
 効ナルキニ用ヒウオハ麻刺里亞惡液質ニ用タリ「クイニユム」ハ丸ト
 シテ十五仙瓦乃至五十仙瓦ヲ二日乃至十日間持續シテ與フ又酒ニ溶
 解シ與フ一日量一五〇〇―二〇〇〇ルモ可ナリ

多ク用ヒラルル砒石製劑及其他ノ藥物

品ハ決シテ同等ニハアラズ砒石ノ寄生虫ノ上ニ作用スルハ信スルニ足ルト雖モ急性ノ場合ニハ用ユルコトナシ然レモ繼久ノ症狀無熱ニ經過シ殊ニ全身榮養障害顯ハレタルキハ甚タ要用ナリ最モ能ク規尼涅ト共ニ投スルキニ功アリトス之ニ反シ胃ノ障碍アレバ砒石ヲ投ズ可ラズ

砒石製劑中多ク用ヒラル、モノハ左ノ如シ

(a) バウ、デイン、氏、液、此製法ハ亞砒酸一〇ヲ二〇、〇ノ液ニ溶解セルモノニシテ此溶液一日乃至二十滴ヲ與フ故ニ亞砒酸ノ量ハ二分一密瓦ヨリ十密瓦トナル

(b) ホー、レル、氏、水、之レ一%ノ砒酸ヲ含ミ五乃至二十滴ヲ一日量トナシ漸次増量シテ用フ

(c) バツ、セリ、氏、混、和、劑、ハ硫酸規尼涅四〇酒石酸鐵加里一〇、〇砒酸末〇、一溜水三〇〇、〇ヨリ成ル此混和劑ハ古來不軌ヲ計ルニ當リ毒殺ノ爲メ屢々用ヒラレタリ此製劑ハ第一日ノ熱間歇時ニ每一時一食匙第

二日ニハ毎二時一食匙第三日ニ毎三時一食匙トシ漸次一時間宛延長シ終ニ只朝夕一食匙ヲ與フルニ至ル可シ蓋シ此用法ハ麻刺里亞地方ニ於テ一般ニ用ユル所ナリ

ザハアリシハホーレル水ヲ皮下ニ注射シ麻刺里亞ヲ療セリ此際ホーレル水ヲ稀薄ニセシテ用ユルニハ白芷精ヲ加フル時酒精ヲ過度ニ加ヘサルヲ要ス之レ刺入ノ際疼痛ヲ發スルカ故ナリ單純ノ製劑ニ酒精ヲ缺クモ毫モ感應ナキモノナリ

鹽酸ハハ、コリ、ユ、ハ他ノ製劑ノ如ク伊太利ニ於テ麻刺里亞ニ試用セラル而シテアルベルトニ一ノ經驗ニ依レハ今日獎勵ス可キ成績ヲ與ヘタレモ之ヲ以テ規尼涅ニ比較ス可ラス然モ亦全ク無用ナルモノニモアラス只虛弱者ニ大量ヲ投スレハ稍催眠ノ傾向アリ此藥物ハ小兒科ニ必要ニシテ惡キ味ナク消化管ニ障碍ヲ與フルコトナシ醫用トシテ長時之ヲ與ヘ發作ヲ防止スルモ六乃至七日ヲ越ユ可ラス

ハ、コ、リ、ユ、ハ、〇乃至四、〇ヲ與フルニハ一回ニ〇五宛分與ス可ク而シ

又此藥物モ規尼涅ヲ用ユルノ原則ニ從テ投スルヲ要ス
 「オイカリブツ」ハ三年以前迄ハ甚ク熱中崇拜セラレヘルツハ直ニ規
 尼涅ノ後繼者トナセリ然レモ經驗ニ徵スルニ熱ニ於ケル此作用ハ忽
 チ經過シ再發ヲ顯ハシタリ故ニ此藥物ハ持續療法トシテ用ユル能ハ
 ス「オイカリブツ」製劑ノ治療上功績多キモノハ新葉ノ酒精丁幾及酒
 精浸劑ニシテ一日二乃至四茶匙ヲ與ヘ不良ノ場合ニハ尙増加スヘシ
 「オイカリブツ」油ハ〇、二乃至二、〇ヲ一日量トシ膠囊ヲ以テ用フ
 氷治法ハ發作前或ハ發作中灌漑狀若クハ纏包或ハ寒冷灌腸法トシテ
 用ヒラル或ハ此施用中脾臟ノ縮少スルヲ認メタリト云フ故ニ此傳染
 上ニ作用スルハ望ヲ滿スニ足ラン
 カウリーノ水治法ニ熱狂スルニモ係ハラスプリスニツ及ヘルツノ水
 治法特ニ名聲アリ而レモ麻刺里亞ニ就テ特別ナル治療力ヲ有スル
 ナク惡液質ニハ強壯療法トシテ職責ヲ有ス又規尼涅ノ能キ補助藥ト
 シテ頑固ノ不規則ナル發作ニ用フ

デユラポイハ古キ慢性麻刺里亞ニ石炭酸ヲ皮下注射トシ〇、〇八乃至
 〇、一六用ヒタルコアリ「アシチビリン」「アンチエプリン」「ヘナセチン」
 「ハルシ」及「アナルチン」等ハ熱症ニ應用セラレ而シテ之ヲ制止スルノ効
 アリ然レモ稀ニハ此作用ノ經過シタル後再ヒ發作シ前ヨリ劇シキ
 屢之アリ之レ此作用間内臟ニ起熱物ヲ堆積セシメ之ニ因テ後ノ發作
 ヲ劇發セシムルモノトス故ニ此藥物ハ起熱物ヲ中和スルノ効力ナキ
 モノナル可シ
 又次ニ用量ヲ列舉スル藥物ハ名聲アルモ綿密ノ經驗ヲ有タルモノニ
 非ズ
 「ビベリン」〇、六乃至二、〇
 「硫酸」〇、三乃至一、〇
 「硫酸」〇、五乃至一、五
 右免熱時ニ投ス
 又「アピオール」(洋芹成分)「解皮丹寧」龍胆「ミルトオール」亞爾蘇撒里失涅

斯篤里規尼涅、珊篤寧、食鹽、沃度、硫酸那篤留謨、硫酸麻屈涅、叟謨、枸櫞皮煎、鹽酸加里、安門鹽、丹寧酸鐵、藏化鐵加里、等アリ其他尙枚舉ニ違アラズ而ノ是等ノ中又麻刺里亞ニ効力ヲ及スノ目的ニアラサルモノモアラン彼ノ魚骨、蜘蛛網、鵝糞、初生初胎便及自家ノ尿ヲ用キテ良効アリト信スルモノアレモ此等ノ藥物ノ淺薄ナル經驗ニ良果ヲ有シタルハ恐クハ自然治癒ヲ顯ハシタルモノナル可キノミ

麻刺里亞臨床療法

一般麻刺里亞治療及豫防總論

個人的及公衆的ノ豫防規則上麻刺里亞ハ一種ノ傳染病ニシテ只一定ノ場所ト一定ノ季節ニ顯ハルハ吾人ノ已ニ學ヒ得タル處ナリ而シテ其如何ナル要約ニ關スル哉ノ解釋ニ對シテハ傳染性ナルコト全ク確定セリ之レ病的芽胞ハ特ニ夜間地底ヨリ一定ノ高サニ飛揚シ呼吸器ヲ媒介トシテ體內ニ侵入スルハ甚ダ信ズ可キ處タリ其他ノ消化管ニ因

麻刺里亞臨床療法

一般療法及豫防法

リ侵入スベキニ疑フ處ニシテ殊ニ麻刺里亞地方ノ飲用水ニ最モ疑ヲ想起スベキ此水ニ因テノ試驗ニハ今日マテ陰性ナリシ如何トナレバマルヒアバウアツェルリザロモチーマルノハ不良ノ水ヲ飲用スルモノ決シテ麻刺里亞症候ヲ發スルモノニアラズ此知識ハ個人的豫防法上種々ナル規則ヲ感スル所以ニシテ麻刺里亞地方ニ於テ本病ハ季節ニ從テ顯レ此現狀ヲ保持スルコト簡單確實ナル規例ナリ然レモ此關係ヲ改良シ得ルハ羅馬ニ於ケル經驗ノ證スル處ニシテ今日羅馬市ニ於テハ季節ニ因テ麻刺里亞ヲ發スルガ如キコトナク全ク市内ヲ驅逐セリ麻刺里亞地方ニ旅行セント欲セハ季節ヲ選ミ最モ本病發生ノ時期(六、七、八、九、十月)ヲ避ケ又夜間ヲモ避ケザル可ラズ然レモ若シ鐵道ニ搭乘シ窓戶ヲ閉鎖シテ旅行スルガ如キハ此限ニ非ズ麻刺里亞地方ニ居住スルニハ住所ハ此區域中最モ高所ヲ撰ヒ夜間決シテ窓戶ヲ開ク可ラズ飲用水ハ使用前ニ煮沸シ或ハ之ヲ濾過スルヲ良トス水中寄生蟲ヲ驗

麻刺里亞汎論

出スル能ハサルモ傳染毒ハ容易ニ之ニ附着スルヲ忘ル可ラス而シテ此有機物ハ豫防及防禦藥ニ對シ抗抵力ヲ有シ之ニヨリテ損害ヲ被ルヤ僅々タリ故ニ麻刺里亞地方ニ居住スルモノハ多量ノ含窒物ヲ以テ營養シ能キ酒及咖啡ヲ飲用シ抗力ヲ作ル可シ日常ノ經驗ニ依レバ能ク養ハレタルモノニハ傳染スルノ僅少ナルヲ知ル故ニ勉勵ト良養ハ傳染力ヲ弱メ或ハ之ヲ避ケ得可シズルウツトリトムマジトハ伊太利ノ著名ナル實驗家ナルガ此問題ニ對シ麻刺里亞地方ノ住民ノ感染ヲ防クニ最良ナルハ彼ニ良キ食物ヲ與ヘヨト公論セリ

規尼涅ハ豫防藥トシテ古來ノ經驗上軍隊ニ於テ良成績ヲ得タリ好例ハ麻刺里亞地方ニ在リシ聯隊ニ於テ二百人ノ兵卒ニ一日硫酸規尼涅〇三ヲ與ヘ他ノ四百人ニ少シモ之ヲ與ヒザリシニ前二百人ニハ四人ノ熱症ニ罹ルモノアルノミ他ノ四百人ニハ三百人ノ本病ニ罹ルモノアリシト(ワルレン)我臺灣ニ於テハ効力疑シキヲ報ズルモノ多シ此他ピンツアルデルハ規尼涅ヲ用ヒタモノハ麻刺里亞ニ罹ルモ決シテ惡

麻刺里亞傳染ノ療法總論

性ニ陥ルコトナシト云ヘリ

又伊國ニ於テ亞砒酸ヲ豫防藥トシテ試用セルモ其結果ハ大ナラズ此他總テ過度ノ奢侈生殖機及營養器過勞ト過働トハ麻刺里亞發生ニ要約ヲ爲ス之レ不便ノ土地ニ居住セルモノ急ニ都市ニ轉居セル際ニ屢實驗セル處ナリ

公衆豫防法ハ全ク地底ノ掃除法ニシテ滯溜セル水ヲ排除乾燥セシメ不耗ノ地ヲ耕シ埋管ヲ媒介シテ地水ヲ除却シ若シ要スレハ地表面ノ上土ヲ剝去シ鋪石ヲ敷キ地底ヨリノ蒸發ヲ防クハ麻刺里亞ヲ終局セシムルノ適法ニシテ衛生警察ノ光暉ヲ放ツ所以ナリ羅馬市ハ眞ニ此事實ノ好例ニシテ王國伊太利ニ於テ新ニ都府ヲ開キ大衆ヲ移轉セシメ全ク麻刺里亞ノ根據ヲ斷テリ

麻刺里亞傳染ノ療法總論

麻刺里亞病臨床的療法ハ彼ノ傳染毒ヲ撲滅シ彼ト結局ノ戰爭ヲ試ル

三在リ即チ個人ノ抗方ト防禦法豫防法ニ打勝チテ侵入セル病毒ヲ確
 實ニ消滅セシムルヲ云フナリ
 マンナベルヒハ自然的治癒ニ於ケル血液ヲ驗シ漸次日ヲ重テ「ハマト
 ツオアリ」ノ數ヲ減シ終ニ全ク消失スルヲ見タリト云フ
 如斯醫療ヲ加フルコトナク終局ノ自然治癒ニ放任スルヨリハ寧ロ確實
 カル療法ヲ用ユルニ如カス乃チ病床的ニ規尼涅ヲ以テ寄生虫ヲ破壊
 セシムルニ醫タルモノ、義務トス此規尼涅ヲ用ユルノ方法ハ各症狀
 ニ從テ血中ニ寄生蟲存在ノ瞬時ヲ撰ヒ適量ヲ血中ニ入ラシメ最モ正
 確ニ彼ヲ壞崩セシム可シ詳言スレハ最モ抗抵方ノ僅微ナル生物學的
 時期ニ於テシ勝利ヲ占ムルニ在リゴルギノ從來用タルノ時期ハ彼
 ノ分裂ノ成立スル際ニシテ此時ヲ以テ抗力最モ尠キ時期ト認メタルナ
 非蓋シ此規尼涅ノ作用ハ芽胞形成期ニ於テ殊ニ有効ナルガ故ニ寄生
 蟲繁殖ノ時即生存ノ當初ニ於テス可シ此芽胞形成期ハ熱ノ發作アリ
 故ニ瞬間時ニ熱勢ヲ壞崩スルノ目的ヲ以テ規尼涅ヲ血中ニ輸送スル

用法ニヨリ規尼涅
 ノ血中ニ現出スル
 時間

如クセサル可ラズ
 此方法ヲ以テ規尼涅ヲ投ゼザレハ規尼涅ハ効力ヲ逞フスルヲ得ズ之
 ニ注意セズシテ規尼涅ヲ投スレバ規尼涅ニ會合スルモ新生殖ヲ來シ
 未來ノ發作ヲ免ル、能ハス醫士ハ只新發作ノ時及日ヲ明カニシ數學
 的ニ綿密ニ一定ノ時期ヲ撰ヒ注意シテ規尼涅ヲ投シ血中ニ規尼涅ヲ
 集中セシメ規尼涅ノ有機體ニ侵入スルノ力ニ依頼スルナリ
 吾人ノ經驗上最モ速ニ規尼涅ヲ血中ニ吸收セシムルハ靜脈内ノ注入
 ヲ以テ著明ナルモノトス詳ニ言ヘハ即チ直腸若クハ皮下ニ注射セル
 モノハ三時間ヲ要シ之ヲ口内ヨリスレバ六時間ノ多キヲ費ス然レモ
 稀ニ病症ニ依リ發作ヲ來スコトナシトセズ之レ寄生蟲ノ生物學的時期
 ニ適應セサルニ因リ彼ヲシテ再ヒ發育ヲ逞スルガ爲メノミ然ラサレ
 バ他ノ事情ニ關スルモノトス之レ既ニ今日ノ如ク顯微鏡的検査充分
 ナラザリシ時臨床上ニ實驗スル處ナリ麻刺里亞ノ熱發作ヲ顯シタル
 後治癒ニ到リ五六個月間決シテ熱發作ナク治癒シタルノ觀アリ而シ

テ此者ノ麻刺里亞地方ニ至ラスシテ再ヒ固有ノ熱發作ヲ起スル血
 中ニ寄生蟲ヲ再顯シタルヲ推察ス可シ
 如斯場合ハ寄生蟲ノ生活時期ノ長キヲ證スルモノニシテ例令ハ寄生
 蟲ノ成育シ生熱期ニ至リ芽胞形成ヲ來スニハ數月ヲ要スルコトアリ故
 ニ終リノ生殖ニ起因スル熱發作ヨリ起算スルノ他策ナシ生殖階級ノ
 靜止狀ノ生活時期ニ在リテ熱發作ヲ來スコトナキハ眞ニ僅少ノ生殖作
 用ヲ數回ニ顯出シ之カ爲ニ少量ノ起熱素ヲ血中ニ輸送スルヲ以テ發
 作ヲ覺知セザルナラン然レモ如斯ノ人ハ熱ノ起因物ニ對シテノ抗力
 弱マリ容易ニ病ニ侵サル、ニ至ル故ニ經驗多キ大家ト雖モ規尼涅ヲ
 連續スベキ時期ヲ定ムルニ確實ナル支柱ヲ缺ク個様ナル場合ニ於テ
 ハ反テ熱發ヲ顧慮セス規尼涅ヲ投シ速ニヘマトツアリンノ傳染力ヲ
 弱メ之カ成効ヲ全カラシム可シ規尼涅ハ幼體ノ上ニ作用スルノミナ
 ラズ古キモノニモ亦適セサルニアラズ故ニ彼ノ生活中ハ常ニ血中ニ
 規尼涅ヲ保タシメ以テ傳染力ヲ減弱セシムルヲ要ス

規尼涅ハ時ニ他ノ藥物ニ因リ補佐セラル、コアリ即チ寄生蟲ノ抗抵
 力強ク傳染力ヲ全ク消滅セシムルニ満足セサルハハ善良ノ營養ヲ採
 リ佳良ノ氣候ニ居住セシメ亞砒酸鐵及水治法ヲ以テ強壯療法ヲ施シ
 以テ身體ノ活力ヲ増加セシムルハ此藥物ヲ補佐スルニ肝要ナル處タ
 リ規尼涅獨リ満足ノ効力ヲ呈セサルハ他ノ補佐ニ委任シ營養ノ回
 復ヲ計ルベシ
 規尼涅ヲ投スルノ節ニハ他ノ藥物ヲ必要トセス麻刺里亞ノ始メニ本
 品ヲ投シ若シ目的ヲ達スル能ハサレバ吸收ヲ佳良ナラシムルカ或ハ
 亦輸入道ヲ變更スルヲ可トス茲ニ注意ス可キハ胃腸ニシテ通例規尼
 涅輸送ノ途ニ撰定シテ適當ナル部位タリ若シ吸收道路加答兒ニ罹ル
 片ハ先ヅ下劑ヲ投シ之カ回復ヲ計ルカ或ハ皮下苦クハ靜脈注入ヲ施
 シ或ハ灌腸ヲ撰ムモ可チラン
 各方法ヲ以テスルモ規尼涅効ヲ奏セザレバ之ヲ助クルニメチトレン
 プラウヲ以テス可シ然ルハ規尼涅ノ有効無効ヲ注意ス可シ若シ他

藥ヲ用ヒ之ヲ補助スル能ハザレバ衛生的強壯法ヲ行ヒ以テ規尼涅ノ目的ヲ達スルコトアリ規尼涅ニ對スル特異素因アルモノニハ他藥ヲ用ユ可シト雖モ之ヲ決定スルハ甚ダ困難ニ本病ノ各種ノ症狀ニモ尙規尼涅ヲ投ズルノ必要アリ寄生蟲聚落破壊ノ効ヲ奏ス可シ若シ熱發ヲ誘起スレバ新ニ無數ノ生殖作用再起シタルノ徵ナリ又麻刺里亞ハ其地方ニアラザルモ之ヲ發スルコトアリ如斯場合ニハ寄生蟲ヲ循環血中ニ認メズ反テ脾及其他ニ於テ驗出スルコトアリ新ニ傳染セルモノニ於ケル脾腫ノ進行斯ニ於テハ營養障礙ハ陰性ニシテ適當ニ規尼涅ヲ投ジ脾臟ノ復舊スルコトアリ

麻刺里亞療法中最良ノ方法ハ熱ノ發作時ニハ少シモ特異ノ療法ヲ加ヘズ惡寒アレバ其儘放置スルカ若シ此症狀劇甚ナレバ温飲料ヲ與ヘ時ニ武蘭珪酒ヲ加ヘ或ハ薄荷礮砂加茴香精其他興奮劑ヲ加フルモ可ナリ又皮膚ノ乾燥磨擦ヲ用ヒ嘔吐アラバ沸騰散ヲ投ジ若シ要スレバ莫爾比涅ノ皮下注射ヲ施シ昏睡スレバ亞爾個保兒及尋常ノ興奮藥ヲ

以テ之ヲ助ケ總テ心臟興奮ニ速ニ作用スル咖啡涅ニ乃至三〇五六時間「カシムル」油六乃至一〇〇ヲ六時乃至十時間ヲ注射ス可シ重症特ニ重症神經障礙及他ノ偶發症ヲ伴テ發作セル者ハ在リ然レバ各其症狀ニ從テ療スルヲ要ス此傳染ノ結果ニ因テ營養及血液ノ變質ハ末期ニ到テ顯著ナルモノニシテ其症ニ從テ強壯藥ヲ以テ體力ヲ回復ヲ計ル可シ即チ次ノ方法ヲ實用スルニ本症ニ對シテ

(甲)鐵劑及鐵製劑ニ沃度ヲ加味セシテアル物ヲ丸劑若シハ舍利別トシ〇一二投ス但シ六〇申通例〇〇三五六含有セシ藥一、鹽酸銅ヲ其補給藥用シテ歐母虞魯敏一日〇二一回〇〇五ト磷酸加里〇五トヲ共ニ內服セシムルニ當リ鐵劑ノ用ハ單獨ニ患症ニ當リ賦クハ成ル

(乙)亞砒酸製劑ニ用ルル水ニ同量ノ番木甙ヲ幾ラ加テ混和シテ半滴乃至四十滴ヲ與テ即チ三日ニ至テ漸次四十滴ニ増量シ亦漸次減少スルヲ十滴ニ至テ可シ此藥ヲ用ルル時ハ成固クハ鐵劑ニ對シテ又機那煎(三〇〇)ヲ一日數回ニ飲用セシムルモ可ク其實驗上ホーレ

ル水ノ濃厚ノモノヲ用ヒタルニ之ニ耐ヘサルモノ屢之ヲ引ル
 (丙)水治法ハ常ニ寒冷灌漑法トシテ用フ此法ハ如何ナル僻地ニモ行フ
 ヲ得可ク而シテ能ク營養ヲ保持スルニ効アリ
 一般ニ麻刺里亞療法ニ於ケル患者ノ生命ト結果ノ良否ハ醫ノ巧拙ニ
 關係スルカ故ニ常ニ猶豫スルコトナク軍隊ノ患者ニ治ヲ加フルカ如ク
 最速ニ所決スルヲ要ス
 若シ麻刺里亞地方ニ於テ急性症狀ヲ發スルハ第一ノ發作輕キモ決
 シテ輕卒ニ安心ス可カラズ第二ノ發作ニ於テ惡性症狀ヲ跟隨スルコ
 トナシトセズ殊ニ老人小兒ニ於テ懸念スル處ナリ又本病ニ對シ抵抗
 力ノ弱キモノ天賦虛弱慢性病及輕視セズ疾病ニ因ル衰弱並ニ他病ニ
 回復期等ニ於テハ決シテ次回ノ發作ヲ待タズシテ其發作ヲ防止セザ
 ル可ラズ然レモ今日實際ノ處置ニ於テハ第二ノ發作ヲ待テ綿密ニ熱
 型ヲ定メ規尼涅ヲ投スルヲ要ス
 古來麻刺里亞地方ニ於テラナル土地ニ於テ本病ニ罹ルルハ之ヲ診定ス

整然タル間歇熱ノ療法

ルニ時ヲ要ス雖モ充分抵抗力アルモノ一定時熱ノ持續セルハ惡
 性症狀ナルヤヲ考ヘサル可ラズ
 其他規尼涅ノ用法及用量確實ナルハ決シテ惡性ニ陥ラシムルコトナシ
 然レモ時ト量トヲ誤ルルハ重症ニ轉ゼシム
整然タル間歇熱ノ療法
 輕キ間歇熱症狀ニハ通例發作前五六時間ニ規尼涅ヲ投テ可シ此満足
 ス可キノ常量ハ鹽酸規尼涅一〇乃至二〇ヲ一回乃至二回ニ與テ遲ク
 モ全量ヲ一時間内ニ内服シ終ルニ在リ此量ニ於テ通例次回ノ發作ヲ
 防止スヘシ然レモ新生殖作用ニシテ大ナル只之ヲ妨グルカ其作
 用ヲ弱ムルノ故ニ第三ノ發作前六時間ニ更ニ規尼涅二〇ヲ投テル
 ヲ要ス而シテ第三發作ノ來ラサルハ規尼涅ヲ止メ若シ此二回ノ規
 尼涅ニ真正ノ効力ヲ呈セサルカ或ハ只一部ヲ稍輕快セシムルノミナ

ルノ際規尼涅五乃至三〇ヲ二回ニ皮下注射ス可シ但シ三時乃至四時ニ投ズ可シ然ルルガ總テ二十四時間ニ再ビ一〇乃至一八ヲ投ジ次ニ發作ノ起ラザルニ到ラシム若シ毎日熱ノ定型ヲ有スルルハ次日ニ三日熱ナレバ二日ニ投ジ尙六日乃至八日等ニ一定量ヲ與ヘ若シ第三日ニ規尼涅ヲ投ゼザルルハ藥量ヲ增量ス可シ又長期ノ來ルヲ待テ療法ヲ始ムルコトアリ或ハ已ニ發作スルガ或ハ發作起ラントスレバ規尼涅ハ病熱ヲ妨グ反テ煩悶ヲ來スモノニシテ病症已ニ進ミタルルハ規尼涅ノ確効アルコトアリ若シ之ヲ杜絶シ得ザルモ次ノ發作ニ効力ヲ顯ハスモノトス始メノ處方後ハ毎十二時間ニ一定量ヲ反復スルヲ要シ尙長時間發作ヲ防止シ得バ直ニ又一定量ヲ投ジ之ヲ反復スベシ此ノ人若シ甚ダ速ナル作用ヲ欲スルルハ常ニ皮下注射ヲ選ビ情急迫セザルニ餘脈内注入法ヲ撰用スレバ更ニ良シトスルハ眼鼠病ニ對シテ爾及此熱ハ全治セズ不規則ノ發作ヲ爲スル之ヲ如斯場合ニハセリ山氏合劑ヲ實用シ居住ヲ轉シ水治法ヲ施ス等モ亦可ナリ

新
法
規
尼
涅
の
投
注
法

法
亞
稽
留
性
惡
性
熱
療
法

今此熱型上臨床的ニ如何ニ着眼ス可キハ最綿密ニ說明スル所ニ此熱型ニ發作ノ總計ニ就テ傳染ノ最高劇度ヲ定メ臨床的觀察ヲ忽ニセザレバ決シテ錯誤スルコトナシ而シテ此際ニ於テモ亦規尼涅ニ唯ニ藥物ニシテ之ヲ助成スルニ正確ノ時ト満足ス可キノ用量トハ最必要ナリ塞扶斯類似ノ症候或ハ肺炎癩麻質狀ヲ呈シ眞症狀ヲ呈スルコトナク又神經障礙ヲ發スル等ハ血管區域ノ血行障礙ニ起因シ眞ニ各人ノ素因ニ依リテ現症ヲ顯ハズモノニシテ局所ノ炎症症狀ヲ要用テ之ヲ須ラズ本病ノ傳染原ニ向テ加療スルヲ要ス此症狀ニ於テ發作ノ終ト間歇時ヲ區別スルコト能ハズ之ヲ互ニ錯雜的ニ發スルガ故ニシテ亦之ヲ區別スルコト必要ヲ認メズ之ニ規尼涅ヲ投ズルニ寄生蟲ノ生殖作用ヲ增多スルヤ如何ナル時ニ發作セシム可キヤヲ定メ大量即チ三〇乃至三〇ヲ投ジ又要スレバ十時乃至十二時

亞稽留性惡性熱療法

混合性間歇熱療法

此療法之特點

隔テ増量シ結合セテ發作ヲ速ニ消滅セシメ持續セテ發作ヲ單一
 歇性ナラシメテ之ヲ治ス計可シ
 其他患者ノ全身狀態ヲ胸算シ規尼涅ヲ作用ヲ待ツ可シ
 能ク抗抵抗耐ヘ得ル以テ狀態ヲ保ツ可キ爲メ心臓亢奮藥即後亞爾爾保
 兒咖啡涅樟腦等ヲ漸次投與シ又内臓充血ヲ防止セシメガ爲メニ皮膚
 引赤藥及乾角若ク血液角ヲ貼シ誘導ヲ計ル可シ
 本症亦通例各人發作ノ原因ニ依テ處置スルモノナルヲ以テ特別ノ
 方法ヲ有セズ
 發作ハ中風狀或癲癇狀ニ間代性搖蕩ヲ發シ或ハ卒中狀ニ重キ人事
 不省ヲ顯シ若クハ假死狀ニ或深キ昏睡ニ陥リ或ハ破傷風樣ノ發
 作ヲ以テ來ルアリ如斯症狀ヲ發スルモ亦此瞬間時ニ於テ常ニ規尼
 涅ニ因テ治療ス可シ

混合性間歇熱療法

効力ヲ速ニ示ルヲ以テガリ其用法ハ先ニ該藥ヲ與テ十時乃至十二時
 ニシテ亦後藥ヲ投シ熱ノ定型ニ從テ二十四時間若クハ四十八時間
 靜脈注入法ヲ施シ定量ヲ注入シ三四日ヲ止ム然ル時ハ此療法
 ヲ止ムルモ尙爾後十日間ニ發作ヲ來スル稀ナリ然レバ此療法
 此發作ニ伴發スル特異症狀ニハ通例對症療法ヲ施シ若シ卒中狀ヲ顯
 ハスルハ乳頭突起部ノ局所瀉血水蛭頭部ハ水囊ヲ施シ時ニ望テ刺絡
 ヲ爲スモ亦可ナリ癲癇發作ニハ通例用ユル中樞反射減却法ヲ適當
 ス臭素石灰臭素曹達臭素加里臭素斯篤倫胃護
 麻刺里亞混合傳染ニモ亦規尼涅ヲ以テ疾患者一部ヲ防止シ得可シ之
 レ麻刺里亞混合熱本病ニ起因スルコト主ナルヲ以テガリ之ヲハ密ニ
 熱型ヲ調査シ熱ノ最モ近キ瞬間ヲ撰ヒ規尼涅ヲ投テ不可シ之ヲ麻刺里
 亞發作ニ因テ熱症ヲ更ニ増悪セシムルヲ以テガリ併發病誘起而シテ
 此療法ニ因テ發作ヲ防止シ然ル後ニ混合セル他病ヲ療ス可シ
 假面麻刺里亞モ亦規尼涅ノ効力ヲ以テ主權トシ是ニ對テ熱ヲ發作アル

其功亦皆無ナルコトモテリ規尼涅ヲ用スルノ原則ニ從テ時下量下ヲ
 定法可シトシテ其功ハ鐵製劑亞砒酸水治法及轉地等ニシ
 麻刺里亞惡液質ニ利益アルモノハ鐵製劑亞砒酸水治法及轉地等ニシ
 之加ニ總テ營養ヲ可良ヲラシメ然レモ茲ニ注意ス可キハ特異症狀即
 チ脾腫ニシテ之レ死ヲ轉歸ヲ探ルコトナシト雖モ惡液質ノ療法ト大ニ
 關係的意義ヲ有スルモノニシテ脾ノ回復ヲ計レテ惡液症候ヲシテ可
 良ナラシムルコト事實ニ於テ證明スル所ナリ管テ羅馬ニ於テホステ
 シホスキトハ脾臟ヲ摘出術ヲ施シ患者ヲシテ著シク可良ノ結果ヲラ
 シメタリ故ニ治療的ニ脾腫ヲ回復ヲ試ムルコト屢之アリ
 之ニ用ユル藥物ハ甚々多ク「ベリキリナ」伏牛花「ハ」不「ネ」ラ「ク」不「黄色素」
 「オ」ホ「カリ」ツ「テ」油「セ」ル「ル」ニ「麥角」臭素加里等ナリ然レモ總テ是等ノ藥
 物或ハ之ヲ賞シ或ハ之ヲ嫌忌シ全ク作用ナキモノアリ總テハ藥物
 ヲ内服セシメ尙規尼涅ヲ投スルモ目的ヲ達スル能ハサルコト脾臟
 内注入法ヲ創始セシハ實ニモズルニシテ多クハ學者ニ研究セラレ

一三至レリモスレルハ三%石炭酸水トホ「ホ」氏亞砒酸水(一トニ)〇、
 〇ヲ以テ良果ヲ収メフヘシ「グ」リ「ホ」大人ニ麥角五乃至三十仙瓦ヲ用
 ビ血管及脾臟ノ滑平筋ニ作用シ良果ヲ收メ已ニ五回注射ノ後ハ著シ
 ク脾ノ縮少シ血液ノ比例善良トナリ速ニ寄生蟲一般ニ効力ヲ呈ス
 云ハズ「オ」イン「ナ」ハ「ス」ノ「グ」リ「ホ」規定ニ從テ麥角ヲ用ヒ大ニ良効ヲ
 奏セリ「ホ」云「フ」外「ニ」因「テ」「ホ」水「ニ」「ホ」「ホ」「ホ」
 ヤコチニンハ斯篤里規尼涅ノ注射ヲ施シ良果アリト云ヒエフ「フ」チ「オ」
 ハ之ニ反シテ脾臟組織ニ規尼涅注射ヲ施シ良成績ヲ收メ以テ此法ハ
 論理上ニ叶ヒタルノ方法ナリ「ホ」注意セリ「ホ」
 〇「ホ」ハ脾臟ニ寄生蟲存在スルニ證明シ此法ハ傳染原ニ必要ノ
 効力アルヲ解セシメ然レトモ只規尼涅ハ脾腫ヲ挽回スル効力
 有ズルヤ否不明ナリ之レ刺入セル機械的作用ハ或ハ注入セ
 ル液體作用ガ「ホ」ヤ明ナラス又「ホ」ツ「チ」ハ單ニ脾臟中ニ針ヲ刺入
 シ脾臟ノ挽回的功力顯著ナルヲ示シ「ホ」ア「ゾ」ハ蒸溜水ヲ注射シ良成

續列於下云云。其結果機械的作用ノ著ルシニ論ヲ俟テ
種々藥物ヲ注射スルハ其結果機械的作用ノ著ルシニ論ヲ俟テ
故ニ規尼涅注射ヲ施シ脾内ニ蔓布セシムルハ此特效藥ニ機械的作
用トス兩用相應シテ利益ヲ與フルヤ大方ラン脾臟部ニ電法按摩法モ
亦利益尠シク然レモ規尼涅ノ注射ニ及ハズルヲ遠ク又ハオズイ
氏以電流ヲ通スレハ脾臟ヲ牽縮セシムルノ卓効アリ

黑水熱

第三章

黑水熱

膽液性血色素尿膽熱

麻刺里亞ニ傳染ニ因テ黑水熱ヲ發スルヲ知リシハ實ニ近年ニシテ
之ヲ追想スレハ僅ニ五十年前ニ在リ故ニ有名タルトシテ著書中
ニ於テ本病ヲ記載セズ黑水熱ハ熱帶次熱帶地方ヲ鄉國ニシテ只例外ニ
他處地方ニ蔓延スルコトアリ且其發病ニ對シテ同病ニ對シテ著
始メテ此特異ノ疾病ヲ報告セルハ佛國海軍ヲ醫テ以シモ當時完全決
ル説明ヲ得ル能サリシガ此報告ニ依レハ亞弗利加以西岸殊ニセチ

ル亞米利加等ニ發生シ特異ノ臨床的症狀ヲ以現今ハ獨逸海軍及醫
殖民地ノ醫師ニ依リテ報告セラルルコト多キニ至レリ且其發病
歐洲ニ於テハ本病屢々希臘ニ來リ又伊太利撒爾西尼亞シ、リエン等
ニ於テ經驗セラレ其他中央歐羅巴ニ顯ルルコトアリ且其發病ニ
黑水熱ヲ發スル主部ニ亞弗利加ノ南岸ニカスガルニシテ其内地
ニ於テモ亦一地方ニ經驗セラルル瓜哇ニユウギニア亞米利加ノ佛領
アナ玖馬コチツラ等ニモ本病ヲ有シ之ニ反シテアラビヤニハ皆無
ク其發病ニ對シテ其發病ニ對シテ其發病ニ對シテ其發病ニ對シテ
フジボキノ統計ニヨリテ希臘ニ於テ麻刺里亞患者三四九三七中
七〇ノ血色素尿アリト云ヒラザランコトアルギールニ於テ之ヲ認メ印
度ニ於テハ重症麻刺里亞ノ流行地ナルニモ關セス黑水熱ヲ認メタル
所ナシト云フコトアリ且其發病ニ對シテ其發病ニ對シテ其發病ニ對シテ
經驗ニ徵スルニ黑水熱ハ長ク重症ヲ熱病アル地方ニ居住シ數回麻刺
里亞ニ罹リタル人民ヲ侵スモコトニテ佛國ノベレンシガハ黑水熱百八

ル、泥瘴熱ニ於テモ亦然。麻刺里亞ヲ反復スルノ他個人的素因ハ一
般ニ關係スル處ニシテ又熱帶ノ氣候及亞爾個保兒中毒ヲ稱本病ノ媒
介タルコアリ殊ニ慢性亞爾個保兒中毒ハ人體ノ抵抗力ヲ減少シ又急
性亞爾個保兒中毒ハ直接ニ黑水熱發作ノ原因タルヲ稀有ナラズ又本
病ハ水銀中毒ニ因リ赤血球ヲ破壞スト云ヒ或ハ之ヲ梅毒ニ歸スル病
シアレ信スルニ足ラス。又本病ハ其血中ニ鐵質ノ減少ヲ見
住居ノ移轉ハ本病ニ關係スルコト之アリ例令ハ内地ニ居住セルモ
沿岸地方ニ轉居及旅行(行軍等)ニ因リ屢本病ニ罹ルコトアリ(兵隊守備
第四中隊ハ曾テ此病ヲ發シ又規尼涅ヲ投スレハ之ニ因テ黑水熱ノ
素因ヲ誘起スト説クモノアリ蓋シ麻刺里亞地方ニ居住スルモノハ多
クハ長ク規尼涅ヲ用キタルモノナルヲ以テ充分價值ナルノ説ニアラ
ス。又本病ハ其血中ニ鐵質ノ減少ヲ見ルコトアリ(兵隊守備
ト計時スルコトカクモニ於ケル實驗及カラミタル實驗ニヨレハ
規尼涅ヲ少量ニ内服セルモノニ固有ノ劇甚ナル發作ヲ起シ血色素尿

ヲ發スト云ヘリ即チ反復麻刺里亞ニ罹リ或ハ慢性傳染ノ狀態ナルモ
ノニ規尼涅ヲ投シ已ニ長時麻刺里亞發作ヲ避ケ終ニ藥物ノ耐力タル
特異素因ヲ一時消滅シ爲メニ此反應ヲ起スモノトナセリトマスリ
トハシシリニ於テ單純麻刺里亞ニ黃疸性血色素尿ヲ起スコトアルヲ
主張シ發作直前ニ此患者ハ規尼涅ヲ内服セルヲ證明シ此病者ノ發作
ハ規尼涅ノ作用ニアラス一種ノ疾病ナルヲ疑ハズト云ヘルモウゲツ
チトハ之ニ反シテ黃疸性血色素尿ハ斷シテ規尼涅中毒ニ他ナラスト
セリ之ニ經驗ヲ同フセルモノハモンテレツトブリクツトカラミツツ
アスモスカトトコトコトツクコツホ等ニシテ黑水熱ハ已ニ長キ間
規尼涅ヲ用タルモノニ來ルト云ヘリカルチールハ之ニ類セル報告ヲ
ナシクレリトシテハ規尼涅ヲ用ユレハ子宮出血、流産アルコトヲ云ヘリ
バツセリトハ此症狀ニ注意シ決シテ規尼涅ニ依テ血色素ヲ來スニア
ラズ單純麻刺里亞ニ血色素尿ヲ顯シタルヲ經驗シ規尼涅的血色素尿
ヲ決シテ麻刺里亞ト共ニ來ルモノニアラストバスタチチリトモ亦之ニ

同意ヲ表セリ
 最近ノ確説ハ麻刺里亞血色素尿ハ發作前少シモ規尼涅ニ直接ノ關係
 ナク顯ル、モノニシテ其他實驗上屢麻刺里亞ニ罹リ血液検査上傳染ノ
 繼續ヲ證スルコト能ハサルモノニ規尼涅ヲ用ユルハ熱發作ト血色素尿
 ヲ以テ來ル此狀態ハ規尼涅ノ誘導セル麻刺里亞血色素尿トシテ記ス
 ルヲ得可シ有毒麻刺里亞傳染ノ多クハ規尼涅ヲ内服スル時期前ニハ
 著明ノ症候ナキモ此藥物ヲ内服スルノ後熱發作ト血色素尿ヲ發スル
 コナリ

第一類ハ急性麻刺里亞(無規尼涅)ニ劇熱發作ト血色素尿ヲ來シ
 第二類ハ規尼涅ノ結果ニ依リ血色素尿發作ヲ來ス
 第一類ハ寄生蟲即其病毒原因ニシテ第二類ハ規尼涅ノ有毒作用ニ依リ
 此素因アルモノハ之ニ因テ赤血球ヲ破壊シ血色素ヲ溶解スルニ由テ
 此結果ヲ來スニ至ルナルヘシ

第三類血色素尿發作ハ急性麻刺里亞ノ經過中規尼涅ヲ投シタル後ニ

來ル之ニ判斷ヲ下スニ規尼涅ノ血球ヲ破壊スルニ起因スルカ或ハ規
 尼涅ヲ用キザルモ偶然顯出スルノ二途ニ出ヅルモノトス

此發作ノ顯ル、ヤ規尼涅ヲ持續シテ投スレハ益々發作ヲ頻數ナラシ
 ム止ヲ得ス之ヲ中止スレハ輕快ス然ルモハ規尼涅中毒ニ因テ血色素
 尿發作ヲ來スモノ、如シ然レモ如斯ハ其例證甚タ乏シ概テ黒水熱ニ
 ハ規尼涅ノ効力著シキモノニシテ規尼涅ヲ投スレハ熱發作ハ一時止
 ムカ或ハ全ク制止シ血色素尿ヲ顯サ、ルコトアリ思フニ規尼涅ハ劇シ
 キ中毒症狀ヲ顯スコアルモ亦少シモ之ニ關セサルコトモアラシ寒冷ハ
 血色素尿發作ヲ促シ單純規尼涅血色素尿ノ如ク劇度ニ達セシムルコ
 トアリ又寒冷ト規尼涅ハ共ニ發作ヲ誘起スルコトアラシ、ブレインハ十
 五人ノ麻刺里亞患者(土人)中十三名ハ規尼涅ニ關係アルコトハ正確ナレ
 血色素尿ヲ發スルコトナシト然レモ血色素尿發作ヲ始メニハ規尼涅
 ヲ投スレハ過失ニ陥ルノ憶説ヲ以テ固ク執リテ動カス

ゼチガルニ於ケルデボイトノ説ニ從ハハ黒水熱ノ回復在再タルモノ

ニ次ノ發作ヲ豫防スルニ通例規尼涅ヲ投シ少シモ次ノ血色素尿發作ヲ避フスルコトナシト云フ
 グルニシテハ試驗上寄生蟲ヲ認メタル者ニ〇、四ノ規尼涅ヲ投シ體溫四十度ニ達シ血色素尿ト電擊性發作ヲ起シ寄生蟲消失後一、五ノ規尼涅ヲ皮下注射セシニ輕度ノ發作ヲ起シ體溫三十七度九分ニ昇騰セリト云フコトハ此實驗ニ基ヅキ説明ヲ下シテ曰ク規尼涅ハ麻刺里亞患者ノ血球ヲ破壊スヘキ毒物ニアラス反テ之ヲ投スレハ寄生蟲ハ因テ以テ其毒ヲ刺戟シ赤血球ヲ犠牲ニスル場合アルナリト此説明ハ然モ事實ニ添ハズ眞ニ寄生蟲再生說ノ如ク規尼涅ハ如何ノ副作用ダモナキモノナラン然レモ規尼涅ノ中毒作用トシテ注意ス可キハ本品ヲ攝リシ後ニ發作起リ規尼涅療法ヲ中止スレハ治癒スルコトアルハ經驗上認ムル所タリ然モ亦始メノ規尼涅ハ血色素尿ノ失敗ヲ來シタルヤ否ヤハ未タ知ル可ラス概テ規尼涅ハ寄生蟲ヲ殺害シ疾病ノ治癒ヲ促サシムルヲ以テナリ

黒水熱ノ病理上急性麻刺里亞ニ起因スルモノニ規尼涅ヲ投ズレバ血色素尿ヲ發スルコトアレモ多クハ發作ヲ制止スルヲ以テ見レハ規尼涅ハ害ヲ與フルモノニアラサル可シ

本病ヲ前知スレハ血液ヲ檢シテ診斷ヲ下ス可シ規尼涅誘導血色素尿ノ治療方針ヲ定ムルニハ寄生蟲ノ陰性若クハ陽性ナルヤニ因テ之ヲ確定セサレハ此危險ヲ免ル、能ハズ
 黒水熱ハ場所ト期節ニ依リ異ナルコト屢之アリ總テ本病ハ熱帶ノ熱性病中心ニ顯ル、ハ主トシテ麻刺里亞傳染ニ起因ス統計上ノ原因ハ西亞弗利加佛國殖民地ノ住民中一々年間ニ場所ニ依リテハ〇、二乃至五三、〇五%ノ差アリ黒水熱ノ鄉國ト認ム可キグワボシ五三、〇五%コルトキユステ三七、七〇%ハウトゼチガル二一、三一%ニノ一年平均一七八%ナリダウビットソシバ二千六百ノ麻刺里亞中黒水熱百八十五例アリ此關係ハ一ニ就テ十四ヲ示セリフリドワツヒ、ブレトシズ經驗ハ一ト十一乃至十二アルトブレトシハカメルンニ於テ一ト

五乃至八トリングバー千八百九十六年三月ヨリ千八百九十七年二月
 マデカメルンニ於テ麻刺里亞百六十九中黒水熱ハ四十例ヲ見殊ニ注
 意ス可キハ熱帶ノ著明ナル麻刺里亞中心(印度)ニ之ヲ認メサルコ之ナ
 リ
 四季ニ關シテハゼチカルニ於テ一月乃至六月間ハ七月乃至十二月ノ
 間ニ比シテ甚タ尠シゴルドキユステグワボンニ於テハ四季ノ區別ヲ
 有セス多數ノ研究者ハ雨期ト乾燥期ノ間ハ最モ危險ナルコニ一致セ
 リ
 黒水熱ノ人種ニ因リ異ナルハ各研究者ノ同意スル所ニ之レニ依レ
 ハ黑人ハ甚タ不感性ヲ享ルモ或ル場合ニ於テハ此差異ナキコアリ又
 黑白混血者ハ本病ヲ患フルコ稀有ニシテ尙住居ニ依リ不感性トナル
 コアリ
 黒水熱ノ主徴ハ血色素尿黃疸及熱ノ三徴トス
 熱ハ間歇三日或ハ四日性ナルアリ弛張性ナルアリ或ハ稽留性ナルコ

黒水熱ノ主徴

アリ(岡軍醫ノ薩南縣萬丹街ニ於ケル實驗)一般ニ重キ發作後ノ免熱時ハ
 輕度ナリ
 尿ハ血色素ヲ含有スルヲ以テ本病ヲ診斷スルニ最要トス
 尿ノ赤色若クハ黒色ハ發作ノ始ヨリ數時ニシテ顯ル稀ニハ發作前已
 ニ血尿ヲ排泄スルコアリ其他ノ症候タル高熱ト黃疸トハ之ニ次ク尿
 ノ色ハ透明帶褐紅色ニシテ靜脈血樣透明色ヲ呈シ多クハポルト酒色
 一マラカ酒色或ハ黒咖啡ニ同シキコアリ
 尿ハ常ニ透明ニシテ數時之ヲ放置スレハ粘液狀物器底ニ沈降シ上層
 ハ混濁シ赤色若クハ帶褐赤色ノ沈澱ヲ生シ炎光分析器ヲ以テ檢スレ
 ハ著シキ酸化血色素ノ線ヲ顯シ又特ニ數時間直立シ置クキハ偽性血
 色素ヲ顯シ終ニウロビリソノ線ヲ證明スコロツコハ輕度ノ發作ニ於
 テハ只ウロビリソヲ認ムトベルチトルハ尿ノ血色素ハ分解ニ因テ除
 去セラルコナク血色素ハ固有ノ溶解狀態ニアラス反テ細小粉末狀血
 球ノ碎片トナリテ存在ス

黒水熱

尿ノ反應ハ弱酸性中性若クハ弱亞兒加里性ナリ
 尿比重ハ甚ク差異アリ一〇一四乃至一〇三五ノ間ヲ昇降ス而シテ尿
 量ノ増加ト共ニ血色素増加スルキハ殊ニ濃厚ナリ尿量増加セズシテ
 血色素ヲ有スルキモ亦然リ發作ノ經過ニ從テ透明多量ノ尿下ナレハ
 比重ハ從テ減少(一〇〇八以下)ス
 二十四時間ノ尿量ハ發作ニ從テ同シク變化ス然レモ多クハ減少シ唯
 僅ニ數立方仙迷ヲ漏スニ至ル或ハ全ク尿閉シ數日ニ涉ルヲ稀ナラズ
 偶然ニハ發作當日ニ四乃至五里埜兒ノ尿ヲ排泄シタルヲ經驗セルコ
 アリ
 尿中常ニ蛋白ヲ含ムハ血色素含有量ヨリ比較上大ナルコアリテ
 アイレスハ數度蛋白ヲ計測シ〇三乃至一六%ナルコヲ證明セリ
 蛋白尿ハ發作止ムノ後數日持續シ漸次減少ス又腎臟炎ヲ發スルコト屢
 之アリ漿液蛋白トシテ百弗頓弗魯百布頓ヲ認メ磷酸鹽ハ減少ス
 尿ハ長時間甚ク暗色ニシテ膽色素ハ屢飲除シグマツシ反應検査止之

ヲ認メズ血色素ヲ含有スルモノハ陰性ナルコト多シカレメツトハ決シ
 テ膽色素ヲ檢出セズト云ヘリ
 顯微鏡検査上尿中ニ少シモ血液ヲ認メザルカ僅ニ赤血球ヲ認ムルコ
 ミ沈澱物ハ白血球透明圓柱及時トノハ顆粒圓柱ヨリ成リ赤色不整ノ
 核ヲ附着シ此核ヲ多量ニ認メ終ニ腎尿道ヨリ來ル多クノ上皮ヲ見ル
 黄疸ハ黑水熱ニ關係シタル症候ニシテ屢前驅的熱發作ノ際既ニ輕ク
 發黃スルコトアルモ通例ハ血色素尿發作ノ始メニ顯ル而シテ灼熱時ニ
 著明ニシ速ニ來ル發作ハ屢數日間持續シ黄疸ノ度ハ著シク異リ鞏膜
 ハ輕黃色ヨリ高度ノ黃色ニ變ス
 黑水熱ノ經過ハ多クハ固有發作ニ先テ血色素尿ヲ前驅トシ熱症ハ二
 三日反復シテ顯レ多少惡寒アリテ通例熱帶麻刺里亞熱ノ前驅期ニ於
 ケル如シ或ハ此惡寒期ノ往々飲除スルコトアリ
 茲ニ注意ス可キハ惡寒ヲ飲ク所ノ前驅期ハ只全身倦怠關節痛及輕熱
 ヲ有スルノミナルコト是ナリ

稀ニハ黒水熱ニ前驅症ナク突然來ルコアレモ一ニノ前驅熱發作アリ
 テ他ニ全ク特異症狀ヲ呈スルコナク又一回ニ固有發作ヲ來シ或ハ本
 病ノ一般症狀ヲ以テ來ルコアリ此症候ノ輕重ニ從テ多クノ著者ハ輕
 症重症ヲ類別ス即チ(一)輕症間歇性(二)中等弛張性(三)重症稽留性(四)最重
 症(卒中性)等是ナリ而シテ此區別ニ從テ熱型ト重症々候ヲ是認スト雖モ
 亦除外例ナキニアラズ
 輕症ニ於テハ種々ナル惡寒ヲ以テ固有ノ發作ヲ起シ患者ハ頭痛ヲ訴
 (肝及胃部ノ緊張ヲ覺ス屢腰痛ヲ訴フルモノアリ又惡心嘔吐ヲ催シ
 吐出物ニハ殘餘ノ食物膽汁ヲ混ス然レモ或ハ此嘔吐症狀ナキコアリ
 患者ハ尙煩渴ヲ訴フルモ依然タル惡心ノ結果ニアラサルヲ以テ自然
 ニ消滅ス
 上腹部ハ右季肋緣ニ於テ疼痛劇シク屢全下腹ニ自然的或ハ壓迫ニヨ
 ル知覺過敏アリ肝臟稍腫起シ脾臟ハ打診上僅ニ增大シ概テ觸知スル
 ヲ得可シ

大便ハ秘結シ屢下痢ニ傾キ易シ
 佛人ハ鉛毒疝ニ類スル疝痛ノ來ルヲ說キ腹部ハ陷沒シ便秘シ持續セ
 ル劇甚ノ疼痛ヲ訴ヘ其他ノ症狀ハ稍鉛毒疝ニ異ルノミ此疝痛其他血
 色素尿ヲ看過スレハ診斷ヲ誤ルコアリト云フ
 發作ノ經過中尿ニセル酒色或ハ單純ノ血色ヲ有シ而シテ之ニ上記ノ
 諸症ヲ加フ
 排尿ハ概テ困難ナラス只患者ノ尿道ニ灼痛(岡田軍醫ノ經驗ニヨルニ)
 ヲ訴フルコト屢之アリコルシハ數回陰莖ノ強直ヲ經驗シ一回ノ排尿量
 ハ常量(一五〇乃至三〇〇立方仙迷)ニシテ偶々尿道ノ裏急後重ヲ顯ハ
 スモノアリ尿ハ發作ノ始メヨリ六時間ノ後ニ至レバ常色トナル黃疸
 ハ此場合ニハ全ク輕度ナリ
 四乃至六時ノ後上記ノ症狀ハ消失シ同時ニ體温下降シ屢發汗ス
 大概輕症ハ單純ノ發作ニ止ルト雖モ規則整然或ハ不規則ニ間歇シ尙
 第二ノ發作ヲ來スト始メニ於ケル經過ニ同ジ

上記ノ症状著シク持續シ其他尙虚脱症状ヲ加ヘ病狀甚タ不良ノ徵ヲ呈シテ重症ニ陥ル

又此初期ニ惡寒、劇頭痛、心悸亢進、呼吸困難等ヲ來シ次テ始メ劇烈ナル症候ハ輕減シ重症經過ヲ追想スルノミニ過キサルコアリ

患者ノ最恐怖スヘキ苦悶ハ連續セル惡心、制止スヘカラサル膽汁ノ吐出及膽汁様下痢等ニシテ其排泄物褐色或ハ帶褐紅色ニシテ此排泄物ハ甚タ容易ニ患者ノ尿ト共ニ變化シ特ニ苦悶ニ堪ヘサルハ吃逆ノ晝夜間斷ナク持續シ之ニ適應ノ藥物ヲ投セサレハ益亢進ヲ來ス又一般ニ苦惱スル所ノモノハ煩渴ニシテ發熱ニ依リ大量ノ液質ノ消耗休止ナク加之嘔吐モ亦持續ス

舌ハ肥厚不潔ニシテ屢黒苔ヲ被フ蓋シ膽汁様物ヲ吐出スル際ニ起ルモノナラン

腹部ハ概テ緊張シ知覺過敏ニシテ疼痛殊ニ著シク上腹部ヨリ右季肋緣及腰部ニ放散シ或ハ腰部ニ限局スルコアリ

黄疸ハ著明トナリ最高度ニ達シ疾病長ク持續スレバ再ヒ下降ニ傾キ皮膚汚穢土色トナリ黄疸持續シテ二週ニ及フコアリ

尿ハ赤紅色ニシテ其量ハ甚タ少ク二十四時間ニ五十立方仙迷ニ過キズ又時ニ全ク尿閉シ數日ニ及フコ稀ナラス此情態ヲ呈スルキハ其他ノ症狀トシテ尿毒症ヲ發シ尙始メノ諸症減退スルコナシ嘔吐吃逆下痢等患者ノ全身症狀ハ甚タ重クシテ初メハ煩悶不安ヲ主トシ終夜不眠トナリ後ニハ深キ虚脱症狀ニ陥ルコアリ

脈ハ急速緊張力アリ始メニ於テ屢著ルシク高度ニ達シ後ニハ俄然トシテ沈降ス此情態ハ終ニ總テノ惡性症候ヲ合併シ人事不省トナル此重大ナル症狀ハ數日乃至三週ニ至リ多少著明ナル弛張ヲ有シ又此弛張ヲ認メサルコアリ此症狀ハ危險ニ迫ルノ時期ナルヲ以テ醫士ハ最モ注意ヲ怠ル可ラズ

パスチアチカト血液寄生學上ノ検査ニ基キ種々ノ成績ヲ公ニシ小

「アメバ寄生蟲ノ發育スルコトアリ或ハ唯半月體或ハ只黑色素含有ノ白血球ヲ認メ遂ニ血液検査上陰性ナルコトモアリ解剖的検査上ニハ傳染ノ徴トシテ内皮末梢葉及血管周圍ニ黑色素ヲ顯ハスヲ見ルト云ヘリ」

ビグナミー、パスチチリノ寄生蟲検査ハ陽性ニシテ血色素尿ヲ發スル場合ハ寄生蟲ノ芽胞形成確實ナルコトヲ注意シ其小寄生體増加ハ即チ血球ノ破壞原因トナルモノニシテ各進行セル血色素尿ハ多クハ半月形ヲ顯シ水ク持續シ之ト共ニ熱ノ昇降ヲ經驗スルコト稀ナラスト即チパスチチリノ提議ハ始ノ場合ヲ(小寄生蟲)血色素尿發作トシ終リノ場合ハ(半月體)誘導性發作ノ血色素尿ト記載スルヲ適當トナスニ在リ血液検査上赤血球ハ麻刺里亞狀ニ變化シ全ク無色トナルコト稀ナラズビクナミー、パスチチリハ此ノ變化アル爲ニ麻刺里亞ヲ自然治療ニ至ラシムルモノトセリ

黒水熱ニ於テ寄生蟲検査陰性ナレハ病ノ新鮮ナラサルノ證ナルカ患者已ニ規尼涅ヲ服用セルノ證トストエリ

性ニシテ尙充分注意シタル血液検査上熱帶ニ於テハ眞性黒水熱ト規尼涅血色素尿ハ比較的共ニ多シト云ヘリ

黒水熱ハ血液検査上甚ダ速ニ赤血球ノ減少スルモノニシテ第一患者ハ發作前血球數一七〇〇〇〇發作後ハ六七〇〇〇第二患者發作前二四〇〇〇〇發作後一六〇〇〇〇ニ減少セリ此赤血球ヲ補充スルハ巨大血球及小血球ナラシ又血液ノ濃厚トナルノ原因ハ滲出性下痢ト嘔吐ノ結果ニシテ一立方仙迷中ノ血球比較的增加スルニ依ルパスチチリトハ黒水熱ニ多核白血球ト血小板ノ増加ヲ認メタリト云フ血漿ヲ検査スレバ溶解セル血色素ノ少量ヲ認メホイジンハ里昂ノ病院ニ於テ赤色ナル血漿ヲ炎光分析法ヲ以テ検査シ酸化血色素、偽性血色素及ウロビリリンヲ認メタリ

ベルチールハ血漿ハ炎光分析法ニ於テ酸化血色素ノ線ヲ證明シテ曰ク之レ尋常血漿ニ異ナルコトナシ故ニ麻刺里亞血色素尿ノ血色素ハ原因ニアラズ反テ腎ノ出血ヲ起シ之ニ因テ血色素尿ヲ發生スルナリト

黒水熱ノ持續

ハルヲリシハ腎臟出血ハ疑フニ及バズ發作後數時間肝臟及腎臟モ多量ノ血色素ヲ横領シ之ニ依テ血色素尿ヲ起スモノナルヲ經驗セリ本病ノ持續ハ二様ナラズ輕キハ二三回ノ發作ヲ發シ或ハ一二回ニ止ルヲアリ如斯ヲ以テ本病ノ經過ハ二乃至五日ヨリ多カラズ重症ハ亞稽留性ノ熱ヲ以テ持續シ十日以上ニ及ブ然レモ最重症ハ電擊性症狀ヲ以テ已ニ三三日ノ後ハ終極ニ至ルコトハ曰フ幸ニ經過セバ三日乃至十五日(或ハ二十二日)ニシテ輕快シ死ハ多ク二日乃至十二日ノ中ニアリト

黒水熱ノ結果ハ治療スルモノ多シ然レモ常ニ長キ回復期ヲ要ス之レ多クハ麻刺里亞ノ妨害ニ會スルガ爲ナラン故ニ其固有療法ヲ忘ル可エズ

死數ハ著ク異ナリ場所ト個人的素因及重症發生時期ニ關係アリ療法ニ就テハ後條ニ詳説ス可シ

コレレノ説ニ依レバ病院外ニ於テハ死者五〇%ニシテ病院内ニ於テ

黒水熱ノ結果

黒水熱ノ診斷

ハ二八%ゼ子ガルニ於テハ二五%マダカスガルニ於テハ一八五ト四九ノ比例(故ニ三一六%西亞弗利加三二一%ナリ

死ノ轉歸ハ種々ニシテ卒倒シテ死ニ至ルモノ屢之アリ又窒扶斯狀ノ神經症狀アリ細小速脈トナリ皮膚冷却發汗シ口唇煤色舌苔アリ精神ヲ失ヒ忽然昏睡若クハ搖擗ヲ發シ或ハ皮膚乾燥脈軟弱トナリテ小艇血、口内出血及腸出血ヲ發シ鼻孔口唇煤色トナリ頑固ノ吃逆ヲ發スルハ不良ノ徵ニシテ全ク尿閉ヲ起スカ少量ノ蒼白尿ヲ漏シ大便失禁譫語ヲ發シテ死ニ陥ルコトアリ

以上ノ症候ニ從テ最モ重症ノ虛脱ヲ來シ數日持續シテ二週ニ及ビ始メテ轉歸ノ顯ル、トアリ然ルモハ黃疸症狀ハ消失スルモノトス

黒水熱診斷ノ主症ハ熱、黃疸血色素尿及麻刺里亞寄生蟲ノ證明之ナリ寄生蟲ナキハ規尼涅ニ起因スルモノニシテ此中毒ト黒水熱ノ區別診斷ハ殆ント困難ナルヲ屢之アリ

發作性血色素尿ト黒水熱ハ主トシテ寄生蟲ニ因リテ區別ス寒冷水ノ

黒水熱ト黄熱トノ區別

灌腸モ亦本症ヲ來ス其他稀ニ稽留性間歇性麻刺里亞ニ規尼涅中毒ヲ來スニアリ

麻刺里亞地方黄痘ノ郷國ニ於テ黒水熱ヲ發シ殊ニ古來ヨリ屢々黄熱ト相混シテ來ルニアリ之ヲ區別ヤ容易ニハ黄熱ニハ決シテ血色素尿ヲ來スナク只稀ニ血尿ヲ來シ麻刺里亞モ亦稀ニ血尿ヲ來スノミ麻刺里亞ニ罹ラサル者ノ黄熱ハ前驅期ナク熱ハ稽留シ黄痘ハ弱ク始メ三四日間ニ起ルヲ以テ病ノ經過ヲ知ル可シ此臨床的症候ノ區別診斷ハ研究ノ結果血液検査ニ因テ速ニ診斷ヲ下ス可シ

寄生蟲ノ數ハ已ニ記載セル如ク黒水熱ニハ少數ナリト雖モ疑アル場合ニハ充分注意シテ血液ヲ檢スルヲ要ス黒水熱ト誤ルモノハ急性黄色肝萎縮燐中毒ワイル氏病等ナレモ其區別タルヤ甚ク容易ナリ

黒水熱ノ預後ハ謹慎スルヲ要ス始メノ症狀劇甚ナラス酒精中毒梅毒及其他ノ疾病ニ反復侵サレザルモノハ經過良ナリ然レモ之ニ反スレハ結果亦不良トナル

黒水熱ノ預後

黒水熱ノ合併症
後病及回復期

本病ノ經過中發作ノ間歇性ナルハ熱及其他ノ症候稽留セルモノヨリ佳良ナリ

數日持續セル嘔吐ハ危險ニ陥ラシムルヲ以テ患者ノ榮養ヲ佳良ニス可シ同時ニ滲漏性下痢ニヨリ衰弱ヲ來シ卒ニ脈ノ緊張方ヲ減降シ數脈ヲ顯シ吃逆ヲ發スルハ不良ノ徵ニ屬ス神經症狀ト昏睡ハ危險ナリ數日ノ尿閉ハ注意ス可シ然レモ必ス惡徵ノミニアラズ稀ニ再ヒ排尿ヲ來スニアリ

尿量過多ハ概ネ佳良ノ徵ナリ然レモ死ニ迫リ利尿ノ増加スルニアリ著明ハ黄痘ハ預後ニ關セス尿ノ暗色ノ多少モ亦預後ニ關スルヲ徵ナシ之ニ反シテ腎臟症候ハ頗ル豫後ニ關係ス重症黒水熱ハ他ニ稽留性症狀ヲ合併シ殊ニ神經症狀トシテ卒倒昏睡搖擗ヲ發シ多クハ死ニ到ルハ已ニ説明セル如シ此狀態ハ大概眞性ノ合併症ニアラス反テ麻刺里亞ノ傳染ニ關係ス尙單ニ尿閉ヲ以テ來リ急性尿毒症ヲ疑テ解ク能ハス此際只吐出物中尿素ノ證明ハ診斷ヲ明ニスルノ方法タリグイル

黒水熱

ラントハ黒水熱ニ於ケル著シキ尿毒症及腎臓炎ヲ記載セリ
 又劇甚ノ急性腎臓炎ヲ發スルコトアリ出血ニ就テハ網膜出血腦血ヲ來
 スト屢之アリ稀ニハ吐血胸膜内出血及心囊出血ヲ發スルコトアリ
 トユデルハ乾性胸膜炎ヲ來スヲ見タリト云フ
 胎後病ニ就テハ重症ノ貧血惡液質胃ノ知覺過敏食思欲乏及終日胆汁
 ヲ吐出スル爲メ嘔氣アリテ腸ノ蠕動機ヲ疲勞セシメ腎臓ノ多クハ刺
 戟ヲ受ケ血色素ヲ含ム所ノ尿ヲ漏シ終ニハ急性腎臓炎ヲ發スルコト屢之
 アリ發作後ハ無數ノ上皮顆粒圓柱血球圓柱ヲ顯出シ後ニハ蛋白尿ヲ
 來ス又本病經過ノ後腎臓炎ヲ發シ以前ヨリ腎臓炎アリシヤヲ疑ハシ
 ムルコトアリ
 回復期ハ大概長ク持續シ重症ノ貧血腸胃障害慢性麻刺里亞性虛弱ヲ
 胎シテ此患者ノ生活中永ク之ニ伴ヒ輕度ノ發作ノ後ハ忽チ佳候ヲ呈
 スルモノナリ
 黒水熱ノ發作ニ關シテハ已ニ記載セルガ如ク唯赤血球急速ニ破壊セ

ラル、ヲ以テ血色素尿ヲ相提携スルヤ明ナリ而ノ此壞崩セラレタル
 赤血球ノ數ハ非常ニ夥多ニシテ之ヨリ血色素ヲ出シ腎臓ヲ通過スル
 ナリボンフクノ試験セル血液検査上成績ハ麻刺里亞ニ近似セリ
 ボンフクノ試験ニ關シテハ赤血球ノ六分ノ一ヲ破壊スレハ血色素尿
 ヲ來シ少量ノ血球破壊ニノ肝臓機能完全ナレハ溶解セル血色素ハ膽
 汁中ニ排泄セラルト云フ
 血球破壊ノ原因ハ已ニ説明セル如ク黒水熱寄生蟲ハ形態學上決シテ
 通例ノ夏秋熱寄生蟲ト區別スル能ハス而シテ此毒物ハ一種固有ノモ
 ノナルヤ全ク固有ノ血液ヲ毒スル物質ヲ分泌スルヤ未タ茲ニ論及ス
 ルノ域ニ進マス
 黒水熱ハ寄生蟲ノ數ニ關係セルモノニシテ其數ノ割合ヨリハ熱度ヲ
 昇騰セシム而ノ本病ヲ患フルモノハ反復麻刺里亞ニ罹リタルヲ推知
 スルニ足リ又患者ハ長キ間熱帶ノ麻刺里亞地方ニ在リシモノナリ本
 病ノ素因タルノ徵候ハ之ヲ認ムル能ハス稀ニハ特ニ貧血ノ輩ニ存在

ナイルノ輕症黒水熱治驗

スルヲ見ルルアリ
 (第二)ナイルノ輕症黒水熱治驗
 ヤクエスハ三十八歳ノ海軍兵ニシテ三年亞弗利加沿岸ニ在リ十一月
 來リロシニワエニ駐劄シホツケニ到着ノ黒水熱ニ罹レリ病院ニ於テ熱
 發作ノ顯ルル前日規尼涅〇八ヲ吐根ト共ニ投セリ千八百六十八年一
 月十日惡寒ヲ發シ半時間持續シ胆汁ヲ吐出シ血球様ノ尿ヲ漏シ顔面
 蒼白羸膜黃色トナリ脈硬固ニシテ百十四至體温六腋窩ニ於テ四十度
 五分ニ達ス
 甘乗ノ膏ニ五十分時間ニ橙花浸テ以テ内服緩和巴布ヲ下腹ニ
 貼テ
 午後三時四回胆汁ヲ吐出シ三回胆汁様下痢ヲ尿ニ多量色ハポルト
 酒色腰部及上腹部ニ疼痛アリ顛頂部ノ頭痛煩渴複脈ヲ呈シ百十三至
 體温四十一度二分ニ達ス

處方 水里母奈埵

午後八時四十五分間ノ發汗アリ尿黃色尙僅少ノ蛋白ヲ含ミ腋窩ノ體
 温三十八度五分脈八十五至

赤酒水 冷肉汁

一月十三日午前七時 二時頃ヨリ新ニ發作アリ消夫蘭色ヲ黃疸尿ヲ
 出シ甚ク泡沫ヲ含ム診斷時體温四十度九分脈百十二至胆汁ヲ吐出シ
 惡心及腰痛アリ

午後四時 皮膚稍濕潤シ脈百〇二至體温三十九度四分

黒水熱

硫酸規尼涅 一〇罌粟舍利別橙皮舍利別各三〇〇 夕刻内服
氷片内用

午後九時 免熱時トナル尿黄色曇翳狀ニ混濁アリ能ク規尼涅ノ内服
ニ堪ユ

處方

赤酒水 羹汁

一月十二日午前七時 夜間適度ニ安眠シ患者ハ只大ニ衰弱シ眩暈アリ

處方

硫酸規尼涅 一、二 二十四丸ヲ作り投與ス

「チヨコラーデ」肉汁「ポルト酒」

一月十三日午前七時 免熱時患者食ヲ探ル

處方

硫酸規尼涅丸 一〇 攝養ヲ命シ退院

ポイソンの昏睡ニ
ヨリ卒死セル黒水
熱報告

(第二)昏睡ニ依リ卒死セルポイソンの報告

二十三歳ノ航海生遺傳病ナク十二歳ノ時窒扶斯ニ罹リタルノミマタ
カスガルニ到着後熱感ヲ覺ヘ五日間許重患ニ罹リタルノ情態ニシテ
六月ノ終ニ麻刺里亞ニ罹リ始メハ間歇熱ニ襲ハレ不規則ノ間歇ヲ有
シ熱ハ規尼涅ニ因テ制止セラレ九月サナダトリムニ航送セラレ一ケ
月ノ後歸還セリ

リボンノ病院ニ於テ發作セシハ十二月七日ニノ羸瘦衰弱貧血ハ甚シ
カラス肝臟ハ稍肥大脾臟ハ肋骨縁ヲ超ユルヲ三仙迷尿中糖分蛋白ナ
ク消化器、血行器及神經系統ニハ病理的變化ヲ認メズ十二月ノ經過ニ
於テ(十六日十九日)中等ノ熱發作アリ六時間持續セリ

十二月二十六日患者ハ頭痛下痢アリ

二十八日興奮ノ狀アリテ夜間不安ナリ

三十日午徐ニ發熱作ヲ來シ劇シキ惡寒加リ體温(二時)四十一度八分
皮膚速ニ黄色ヲ呈ス

黒水熱

午後六時ニ體温四十一度七分少量ノ尿ヲ漏シ著ルシク赤色ナル血色素ヲ含ミ少シモ赤血球ヲ認メス夜九時昏睡シ僅ク血色素尿アリ著シク暗色多量ノ蛋白ヲ含ミ顆粒圓柱有リ然レモ膽色素ノ痕跡ナシ且ニ二十六日ニ至ルニ至リテ

通宵昏睡ニシテ翌朝(十二月卅二日)七時不歸ノ客トナル死體解剖上唯麻刺里亞症狀ヲ呈セルノミ

(第三重症治療ノ實驗(アルベルドプレートシ))

患者mナル大工職ニシテ強壯ノ一男子十ヶ月以來(千八百九十四年十月)カメルンニ於テ數回重症ノ熱病ニ罹リ通例規尼涅一〇乃至一五ヲ以テ熱ヲ下降セリ

千八百九十五年六月霍亂樣發作ト神經痛症狀ヲ呈シ重キ虛脱ヲ發シ其後十四日間微熱アリ九月三十日ノ午前七時ニハ尋常體温ニシテ健全ナリシモ規尼涅一五ヲ用キタリ午前十時惡寒發熱暗紅色尿ヲ漏シ午後四時ノ尿ハ平常ノ色ニシテ蛋白ヲ見ズ

アルベルドプレートシノ實驗

九月二十八日mハ臥床ヲ離ルニ至リテ九月二十八日正午四時ニ至リテ

九月三十日退院セリ

十月七日mハ再ニ熱發作ニ罹リ來院乞診當時體温三十八度五分

十月八日惡寒體温三十九度三分心臟ニ非常ナル疼痛ヲ覺エ膽汁ヲ吐出シ午後三時二百瓦ノ帶黑紅色ノ尿ヲ漏シ尿道ニ灼痛ヲ感シ點滴狀ナリシト比重一〇二〇醋酸ヲ加ヘ煮沸スレバ僅少ノ蛋白アリ稠厚ノ沈澱ヲ生ズ數多ノ顆粒圓柱ト腎上皮ヲ含ミ少シモ濃汁ヲ含マズ莫爾比涅及溫繩法ニヨリ輕快ヲ自覺スト云フ體温三十八度尿量百六十立方仙迷尿性午後三時ニ同シ

十月九日夜睡眠ヲ得テ午前四時新ニ劇シキ惡寒高熱ヲ發シ煩悶加リ嘔吐及尿ハ昨日ニ同シ夕七時五十分方仙迷比重一〇一〇

午前七時體温三十九度三分發汗ヲ始ム

血液ハ長時検査ノ後血球内ニ寄生蟲ヲ認メ其大サ血球ノ五分ノ一

午前十時少量ノ排尿アリ單純靜脈血ノ如シ體温三十八度十時惡寒

黑水熱

體温三十九度三分
 正午十二時非常ノ發汗アリ
 午後二時五百五十立方仙迷ノ排尿變化ナシ
 午後四時體温三十九度八分發汗止ム
 午後九時體温三十九度五分乃至三十八度六分脈百三十二至尿七百五十五立方仙迷高度ノ貧血皮膚黃色トナリ排尿ノ際尿道灼熱ヲ覺
 十月十日午前六時全宵熱アリ然レモ惡寒ナシ貧血高度重症黃疸尿
 ハ汚穢褐赤色ニシテ千立方仙迷
 十二時體温三十九度三分脈百三十二至尿量六百二十立方仙迷比重
 一〇一二全量 $\frac{1}{2}$ ノ沈澱ヲ生ズ
 午後三時體温三十七度五分
 全六時體温三十七度四分不安ニ著明ノ嘔吐アリ脈百二十八至
 午後九時體温尋常大ニ衰弱脈百二十八至尿千四百二十立方仙迷透

明紅寶石色ヲ呈ス

十月十一日嘔吐止ム氷片ト共ニ牛乳ヲ榮養灌腸ス最高體温三十七度
 九分終日尿量藥黃色ニシテ三千立方仙迷比重一〇一三
 十月十二日午前六時體温三十八度脈百三十二至尿量多ク比重一〇一
 二蛋白ハ混濁ノ痕跡ノミ
 午後三時體温三十九度六分血球內寄生虫ヲ見ズ強キ白血性トナル
 午後六時變化ナシ
 十月十三日朝温三十八度六分
 午後三時體温三十九度三分脈搏亢進百十六至ヲ算シ或ハ百二十八
 乃至乃至百四十至ノ間ニ在リ而シテ甚シキ譫語アリ血中少シモ寄生
 虫ヲ認メス又白血球中ニモ色素ヲ認メス尿ハ甚タ多量ニシテ藥黃
 色比重一〇一三醋酸ヲ以テ煮沸スレハ僅ニ蛋白ノ痕跡ヲ認ム夕刻
 ニハ症候輕快シ夜中再ヒ熱發ス
 十月十四日熱度下降シ三十七度六分乃至三十七度四分夜ニ入り再ヒ

三十九度脈百三十八至大量黃金色ノ大便ヲ排泄シ發汗アリ脾臟ハ
 肋骨緣ヨリ二指横徑ヲ越出シ肝ハ腫大ヲ認メズ黃疸ハ減退シ大ニ
 健康ヲ覺ヘ體温ハ高ク亞爾保個兒及多量ノ牛乳ヲ飲ミ最早嘔吐ナ
 シ

十月十五日體温夕三十九度八分脈百四十至ニシテ稍力アリ
 十三時三十分強ク發汗シ體温三十九度赤血球ノ大サハ尋常血球入
 三分一ヨリ三倍ノ大サニ在リ巨大白血球ハ已ニ無色トナリ大ナル
 圓形核ノ甚ク著シキヲ知ル定形ノ血球内寄生蟲全ク缺除シ或白血
 球中ニハ單ニ色素ヲ認ムルノ疑アリ脾ハ縮少ス

十月十六日午前八時體温三十八度八分規尼涅ヲ内服セシメ莫爾比涅
 十散ヲ投シ良ク安眠セリ

十二時體温三十九度四分脈百四十八至榮養ヲ攝取シ可良ナリ五乃
 至六里埜兒ノ牛乳薰腿白麵麩ト赤酒ヲ飲用ス

午後六時體温三十八度七分脈百二十四至夜間規尼涅〇五ヲ與フ

十月十七日m著シキ佳候ヲ呈シ體温三十八度七分脈百二十四至午
 前八時規尼涅一〇安眠スタ體温三十八度脈百〇四至規尼涅〇五

十月十八日最高體温三十八度三分ニシテ一般ニ佳候ヲ呈ス

十月十九日平温

十月廿一日速ニ回復ニ向ス含核赤血球消失ス數日來視力障礙ヲ訴フ

十月二十四日檢眼鏡検査上三個ノ網膜出血ヲ認ム

十月三十日網膜紫紅白色トナリ視力快復セリ

十月三十一日體温三十九度僅ニ全身障礙ヲ認メ尙食慾減退ス

十一月一日體温昇騰三十八度ニ達ス

十一月二日朝多量ノ膽汁ヲ吐出ス體温四十度新鮮血液液中僅カニ細
 小輪狀ノ寄生蟲アリ夕温三十八度規尼涅一〇ヲ投ズ

十一月三日午前六時體温三十八度三分

午前九時體温三十七度六分血中少シキ寄生蟲ヲ認メズ

午前十時規尼涅一〇ヲ投ズ

黒水熱療法

十一月四日規尼涅一〇發熱ナシ
 爾後十一月中ニ尙一回ノ發作アリ體温四十度ニ昇騰シ寄生蟲ノ繁殖ヲ認メ規尼涅一〇ヲ以テ確効アリ其後五日間毎日〇五宛ヲ與ヘ熱全ク消散シ十二月獨乙國ニ歸還セリ
 療法ハ學者各自ノ意見ニ依リ甚タ異ナリト雖モ結局之ヲ二種ニ大別ス〇即チ規尼涅ヲ賞用スルモハト之ヲ忌避スルモノハ是ナリ而ノ斯意見ヲ異ニスルハ眞性黒水熱ト規尼涅中毒ノ區別診斷ノ困難ナルニ起因ス今日見ル所ニ依レハ凡テノ血色素尿熱ニ規尼涅ヲ用キント欲スルハ誤謬ニシテ之等ハ廢スルニ如カス
 抑モ此問題ノ分歧セル所以ハ診斷上ノ着眼ノ精粗ニ關スルトハ已ニ記スル所ニシテ此場合ニ血液検査ヲ施セバ明ニ了解スルヲ得可シ而シテ血色素尿ハ規尼涅ヲ投スルノ後ニ顯ル、トアリト雖トモ既往症ニ於テ已ニ規尼涅ヲ用ヒ損害ヲ受ケタルトナク而シテ今血中ニ寄生蟲ヲ檢出セハ猶豫ナク規尼涅ヲ投セザル可ラズ規尼涅ヲ内服スルコ

數次ニノ更ニ血色素尿發作ヲ來シタルハ血中ノ寄生蟲ハ消失スルヤ否ヤ反復注意シテ之ヲ檢セザル可カラス此際ハ早時ニ規尼涅ヲ投ゼズシテ血液検査上寄生蟲ノ多少ヲ認メタル後規尼涅ヲ投ズルヲ可トス既往症ニ於テ患者已ニ一回ノ規尼涅ヲ内服シタル後血色素尿發作ヲ來シ血液検査上寄生蟲ヲ缺クハ絶對的ニ規尼涅ヲ避クルヲ要ス
 重症麻刺里亞寄生蟲檢出多シ流行ノ際規尼涅能耐力ナキガ爲メニ來ル血色素尿ヲ區別スルハ實際甚タ困難ナリ如斯場合ハ患者ヲシテ規尼涅ニ因リ危險ヲ起サシメ又他ノ場合ニ於テハ規尼涅療法ヲ停止スレハ麻刺里亞傳染ヲ増悪シ同シク危險ニ陥ラシムル等之ヲ撰擇取捨スルコト頗ル困難ナリ然レモ經驗上藥ツ可ラサル藥物使用ノ時ヲ失ヒ症狀ヲシテ益重症ニ陥ラシムルハ良ナラズ如斯時々少量ノ規尼涅ヲ投スルモ此病毒ヲシテ決シテ制止スルコト能ハサルハ勿論反テ黒水熱ヲ誘起ス故ニ然ルハ一〇乃至二〇ノ規尼涅ヲ投スストユデルハ大

量八〇乃至一〇〇ヲ與ヘタリト雖モ同意ヲ表シ難シ
 トーマスリーハ如斯場合ニ於ケル規尼涅ノ補助藥若クハ他ノ藥物ヲ
 發見セント欲シ困苦勉勵セシモ其成功ヲ得ズ或場合ニハ規尼涅ニ阿
 片ヲ配伍シ稍目的ヲ達セリトゴグリトーンハ規尼涅ニ阿片及麥角ヲ
 配伍シ良効ヲ奏セルヲ主張セリ即チ其處方ハ左ノ如クニノ經驗上價
 値アリ

硫酸規尼涅 〇、七五

麥角 〇、三

阿片 〇、〇五

右分三包每一時一包內服

然レニ黃疸性血色素尿及麻刺里亞ノ種々ナル療法ノ成績ハ唯比較的
 ニ統計上ノ百分比例ニ過キス學理的一顧ノ價値ナキハ悲ム所ナリ

茲ハ、亞弗利加ニ於ケル統計ヲ示ス左ノ如シ

番 區 別	患 者 數	死 亡	死 亡 %	摘 要
a	七一	二二	三一	甚タ少量ノ規尼涅甘
b	四〇	八	二〇	乘中等量ノ規尼涅
c	二九	五	一七	少量ノ甘乘
d	一一	四	三六	甚タ少量ノ規尼涅甘
e	四二	三	三一	乘及其他ノ下劑
f	三〇	九	三〇	
g	四五	五	一一	
h	一八	〇	〇	大量ノ規尼涅
總 計	二八六	六六	平均二三	

チゾンハ二十四人中規尼涅ヲ以テ治癒セシモノ三三八%之ヲ用キズ
 ノ治癒セル者二五%ナリト云フ
 ワイプハ三十三人中規尼涅ヲ以テ治癒セルモノ六九六%規尼涅ヲ用
 キサルモノハ悉皆死亡セリト云フ

ストユテ(東亞弗利加)ハ大量ノ規尼涅ヲ用タリ量ハ一日ニ規尼涅八〇(一回〇八)ヲ用タルニ十八人中三人ノ死亡即チ一六乃至一七%ナリシト是等ノ療法ニ反對スルノ證明ハ次ノ如シ

ダニールハ規尼涅ヲ用ユルヲナクシテ治療セルニ九十三名中八二%ハ治癒シ死亡ハ一八%其他又規尼涅ヲ用ヒサルモノ五九%治癒シ之ヲ用キタルモノ四一%死亡セリ

アルベルト、ブレインハ五十三名中ノ死亡五即チ九八%ハ中等ノ規尼涅ヲ用ヒタルモノナリト而シテ此著者ノ撰定セル處方ハ次ノ理由ニ依ル第一規尼涅ヲシテ暫時ノ間ニ固有ノ働ヲ起サシムルニハ過剩ナルヲ要ス第二規尼涅ハ最大量ヲ適當トス血液破壊ヲ誘起スルニ至リテ始メテ幸福ヲ得可シ

興味ト教訓多キブレインノ實驗セル病歴ヲ一閱スレハ黑水熱ハ事實上決シテ規尼涅中毒ニアラズ氏ノ記載ニ依レハ五十三例ノ本病發作中四十八例ハ規尼涅ニ因テ緩解シ此經驗ニ於ケル患者ハ尙其後規尼

涅ヲ内服セリト以下同氏經驗中ノ一二ヲ引證シ他ハ省略ス

總テ此患者ハ規尼涅ヲ嫌忌スルニ係ラス稍熱ヲ有スル者ハ規尼涅ヲ投シ血色素尿發作ニ從フ規尼涅ノ量ヲ撰定センニ皆麻刺里亞制止ノ作用有リブレインハ每回血液ヲ檢シ僅少ノ寄生蟲アルヲ明ニセリ若シ此患者治癒セザルハ規尼涅ヲ用ユルヲナク治癒ヲ計ラザルカ反テ少量ヲ用キ又規尼涅ヲ發作前ニ投スレハ此目的ヲ達スルヲ認メタリ又ブレインハ血球ノ破壊セラレハ血行中ニ在ル寄生蟲ノ媒介スル所タルヲ認メタリ正ニ此媒介セラレタル寄生蟲ハ血球内ノモノニ比スレハ規尼涅ヲ以テ容易ニ損害セラレ而シテ少量ヲ以テ強力ノ作用ヲ逞スト云ヘリ之ヲ以テ見レハ黑水熱ノ療法ハ少シモ疑フ所ナク最困難ナル熱帶醫師ノ問題ヲ解釋シ責任ヲ全フスルヲ得ン

醫師ノ血液検査ノ不充分ナル結果本病ヲシテ不正確ニ解釋スルヲアリ黑水熱ノ療法ハ或人ハ之ヲ頌揚シ或人ハ之ヲ用ユルヲ忌ム等千差萬別ナリト難厄原因的ニ此療法ヲ要スルハ疑ヲ容ル可ラス症候的療

法ハ基礎トスルニ足ザルナリ
クエテックハ二十二人ノ患者ニ次ノ療法ヲ施シ良成績ヲ得タリト即チ
中等量ノ規尼涅ヲ投シ四〇乃至六〇ノ噶囉仿謨ヲ與フ

處方

噶囉仿謨

四〇乃至六〇

亞刺比亞謨謨

適宜

砂糖水

二五〇〇

右毎十分時ニ一食ヒ宛飲用セシム然ルキハ嘔吐吃逆ヲ止メ利尿ノ効
アリ其他下劑トシテ食鹽一〇〇水一〇〇〇〇ノ寒冷液ヲ腸内ニ灌注
スヘブラルドモ亦同法ヲ用ヒ良功アリシトヲ唱導セリ
ランゲハ發作ノ始メ六個ノ血角ヲ腰部ニ貼シ抱水臭素化規尼涅ニ三
滴ノ麥角液ヲ加ヘテ注射シ旋那浸ニ滿那ヲ加ヘタルモノ及キンケリ
バツハ煎ノ三杯ヲ内服セシム(キンケリバツハ)亞弗利加西岸ノ植物ニシ
テ其四〇ヲ水二五〇〇ニ煎出シ一日ニ用ユ然ルキハ四十八時乃至六

十時ノ後ニ尿ハ透明トナル而然レ此血球破壞アル疾病ニ血角ヲ貼
シ血液ヲ採ルハ今日嫌疑スル所タリ

ゼガルドハ丹寧三〇ヲ發作ノ間ニ内服セシメ良成績アリト然レ亦
規尼涅ヲ黒水熱發作前ニ投與セルノ功モ尠カラザルモノナラン
カツニスハ少シモ規尼涅ヲ用キズ反テ腎臟及肝臟部ニ艾炙若クハ維納
腐蝕泥ヲ貼セリ

中古以來全ク拋棄セラレタルグイルラウドノ療法ハ大量ノ吐根ト規
尼涅トヲ用キ水蛭六十條ヲ貼スルカ或ハ血角ヲ腎臟部ニ貼セルモ尙
本病ハ反復發作セリ甘汞ト吐根ハ熱帶ニ於テ總テノ麻刺里亞症狀ニ
多量ニ用ユルモ吾人ノ見ル所ニヨレバ概テ適應セザモノ、如シ
ストユデルノ賞用スル輸血法ハバツセリノ研究セル酸素吸入法ニ同シ
ク只温ヲ取ルノ効アリ又食鹽水ノ皮下輸送ハ簡單優等ヲ證スルニ足
ル
プレートンハ發作前ニ酒精類ヲ用ユルヲ警戒セリ

多クノ著者ハ患者ノ休止スヘカラサル嘔吐ト煩渴トニ向テハ之レニ飲料ヲ與フレハ直ニ之ヲ吐出スル故ニ果シテ飲料ヲ與フ可キヤ否ヤヲ疑問トセリ吾人ノ見ル所ニヨレバ之ニ食鹽水ノ注腸法若クハ皮下輸入法ヲ施スヲ以テ最モ適良ニシテ液體ノ消耗ヲ補フノ方法ト信ズ局所ノ渴(口渴)ニハ氷片ヲ内用セシムルヲ可トスレモ亦患者ノ氷片ヲ好マザル者ニ遭遇スルコト稀ナラズ

小兒及老人ノ急性麻刺里亞傳染

第四章 小兒及老人ノ急性麻刺里亞傳染

特ニ小兒ノ麻刺里亞傳染ニ感受性ヲ有スルハ人ノ説ク所ニノ只初生兒ハ除外タリ而シテ不幸ニモ初生兒ノ之ニ罹ルキハ已ニ出産ノ日ニ於テ其症候ヲ顯ハシ診斷ト治法ヲ施サ、ル可ラス子宮内ニ於ケル本病豫後及哺乳ニ關シテハ尙他章ニ於テ之ヲ詳論ス可シ
麻刺里亞傳染ノ小兒ハ經驗者ノ報告上大人ヨリモ甚ダ多ク殊ニ小兒ハ麻刺里亞流行ノ始メニ侵ル、モノナリ(グリージ、バウデン、シ

ラン、メイ、パウ、ベル、チイ、グレイ、ブレ、ネラウ等)チエ、グレイノボウハニク(アルギール)ニ於ケル麻刺里亞死亡統計ニヨレバ千八百八十七年ヨリ千八百九十三年マデ統合スルニ大人六十二人小兒百十五人ニ過ギズト
之ニ反對セル研究者(ドワイト、チャピン、オスレル)ハ小兒ノ之ヲ患フルハ稀ナリ經驗上之ヲ決定スルニハ小兒ノ麻刺里亞殊ニ二年以下ノ患者ハ容易ニ看過セラル、ト其他市街ニ於テ麻刺里亞ノ犠牲タルモノハ田舎ニ比スレハ僅少ナルトノ關係アリ之レ市街ノ小兒ハ一日ノ大部分ハ住家ノ内ニ在リ故ニ比較的ニ本病ノ傳染ヲ防禦スルナラント、
ポーンノ經驗ニ從ヘバ小兒ノ二年乃至七年ノ間殊ニ本病ニ罹ルモノ多シト
小兒ノ麻刺里亞傳染ノ症候ハ大人ニ於ケルヨリ多クノ異リタル點アリ殊ニ二年以下ノ小兒ニ於テ誤認スルコト屢之アリ
小兒ノ麻刺里亞症候學ハ殊ニポーンノ賜多キガ故ニ吾人ハ氏ノ好業

小兒及老人ノ急性麻刺里亞傳染

績ニ謝セサル可ラス佛人ニ於テハグリヰルレイ、ユーレス、ジモン、ボス
 シユ、ガルランド、ボノイト、チグレ等之ヲ研究シ英ニ於テハトーマス、チ
 トドル及キングスレイ之ヲ研究セリ然レモ亦古キ研究者ノ注意能ク
 之ヲ助ケタルヲ少ナカラズ已ニ本病歴史ハモルトン、ジーデンハム、ト
 ルチー等ノ示ス處ナリ古人ハ小兒ニハ毎日熱最多ク三日熱之ニ次キ
 甚タ稀ニハ四日熱ヲ顯スト云ヒ熱帶及次熱帶地方ハ毎日熱亞稽留性
 熱弛張熱ヲ經驗スルヲ最多シ
 ボーンハ小兒ノ病的發作大概正午ヨリ夜間ニ起リ大人ハ之ニ反シテ
 他時間内ニ發作スト云ヘリ而シテ病ノ起ルヤ一般症候ノ稽留スルヲ
 稀ナラズ性狀ハ弛張熱性ニ數日ノ後ニ定型ノ熱ニ進ムヲアリ
 吾人ハ茲ニ先ツ二年以下ノ小兒ノ定型發作ヨリ研究セントス
 惡寒期ハ全ク缺除スルヲアリ或ハ短ク或ハ稀ニ又著明ナルヲアリエ
 ウリン、ジモンハ單ニ數分時持續スルカ稀ニ四時間持久セルモノヲ見
 タルヲアリ此時期ニハ小兒ノ顔面稍蒼白色ニシテ四肢冷却シ皮膚皺

襞ヲ作り恰モ身體容積ノ減少セル如ク呼吸及脈搏甚ダ促迫シ小兒ハ
 屢欠伸シ又嘔吐スルヲ稀ナラズ
 ボーンノ經驗ニ依レバ嗜眠ヲナシ身體ノ展伸ヲ樂マズ欠伸及四肢戰
 慄アリ眼筋痙攣性運動ヲ呈ス而シテ四肢戰慄及眼筋ノ痙攣ハ哺乳
 兒ニ在リテ著明ナリトス
 發熱期ハ小兒ニ於ケル固有ノ特徴ニシテ皮膚熱灼腫脹シ小兒ハ不安
 トナリ屢母胸ニ倚リ或ハ昏睡ニ陥リ或ハ全經過中眠ルヲアリ
 發汗期ニハ大概四肢僅ニ濕潤シ後頭部殊ニ著シク稀ニハ汗ノ溢出セ
 ルガ如キヲアリ
 諸發作ノ全經過ハ四時乃至六時間持續シ或ハ十二時間以上ニ達スル
 ヲアリ
 發作ノ時間ハ小兒刺戟性トナリ食慾ナク不安不眠等ヲ發スルモ亦屢
 此症狀ヲ缺除スルヲアリ
 又唇部匍行疹蕁麻疹等ヲ經驗スルヲ屢之アリボイツエスコ、モンコルヴ

アハ已ニポーン以前ニ多クハ發作ニ從テ一ノ結節性紅斑狀ニ顯レタル發疹ヲ經驗シ此發疹ハ硬固ニシテ疼痛劇シク發作時ニ腫脹シ紅色ノ結節ヲ四肢ニ局發セリ

チエードルハ主トシテ頸胸腹部ノ皮膚ニ限局セル猩紅疹ヲ經驗シ大人ニ就テハ決シテ認メサルモノナリト云ヒハンドヒルド、ヨウチス等ハ之ニ類スルモノヲ經驗セリト云フ而ノ該患者ハ三歳ノ小兒ニシテ全身ヲ三四日間非常ノ紅色ヲ以テ被ハレタリト

脾臟ハ多クノ場合ニ於テ其腫大セルヲ認ムフェルライラハ現今ノ經驗上總テ麻刺里亞ニ實際證明セラレルヤ否ヤヲ疑フ蓋シ單純ニシテ疑ナキ場合ト雖モ脾腫ナキヲアレハナリ

ポーンハ常ニ脾腫アルヲ云ヒ此症狀ハ大人ニ比スレハ小兒ノ診斷ニ甚タ必要ナルヲ公論セリ

脾ハ腋窩腺ノ後方若クハ胸壁ノ後ニ認ムルヲアリ此腫脹アル者ハ壓迫及指尖衝突ニ當リ知覺過敏若クハ劇痛ヲ發ス之レ發熱期ニ於テ然

ルモノニ又屢繼發スルモノハ氣管支症狀胸膜炎肺炎等ヲ發スルヲアリ

小兒ノ脾腫ハ通例壓迫ニ對シ甚タ知覺過敏ナリ

發作ノ持續後速ニ高度ノ貧血ヲ顯スルハ此際決シテ脾腫ノ缺クルヲナク臍部ニ達スルノ脾腫アルヲ屢之アリ

繼發症候ハ下痢ニシテ非常ニ過多ナリ而シテ是レ發作ノ始メニ來リ此病ノ經過中及尙長時ニ及フヲアリ免熱時ノ間ハ通例全ク繼續シ或ハ少シク減少ス(カンタニー)大便ハ黃色或ハ綠色ナリ

ポーンハ時トシテハ虎列刺樣霍亂樣暴瀉ノ爲メ速ニ虛脱ヲ來シ危險ニ陥ルノ發作ヲ顯ハシ大便ハ血樣トナルヲ引證セリ

嘔吐ハ屢強劇ニシテ之ニ因リ直接ニ生命ヲ危險ナラシム而ノ或ハ此情態ヲ持續シ或ハ又間歇性ナルヲアリ

黃疸ハ殊ニ熱帶ニ於テ經驗セラル之ト共ニ皮膚ノ出血性紫斑狀ヲ呈シ又粘膜出血及靛血ヲ來スヲ屢之アリ

急痢的痙攣ハ發作ノ各時期ニ來リ全身ノ筋肉ニ及シ數分時若クハ間歇性ヲ以テ數時ニ及フコアリ

痙攣ハ稀ニ發作ノ始メ惡寒期ニ起リ屢發熱期ニ來ル第一系統ノ寄生蟲ニヨル傳染ニ就テハ小兒ハ其際急性傳染病ニ於ケルガ如ク各運動中心ノ刺戟症狀ヲ呈シ第二系統ノ寄生蟲傳染ニ於テハ之ニ反シテ寄生蟲ノ配置内臟殊ニ大腸ニ止ルノ結果ヲ顯ハスコト又大人ニ於ケル如キヲ以テ之ヲ記憶スルヲ要ス

ボーン曰ク搖擗ハ常ニ只熱ニ伴フモノニ決シテ免ル、コトナシ此場合ニ於テ稀ニハ痙攣發作ニ止リ三乃至七回マテ反復スルコトアリ又其搖擗ハ數時内ニシテ止ムコトアリ

ボーンハ種々ノ小兒ノ痙攣ハ同一ナルモノニアラス第一回ニハ運動刺戟ヲ顯シ第二回ニハ眞ノ痙攣發作ヲ呈シ解熱ト共ニ緩解シタリト云ヘリ

氣管支症狀殊ニ氣管支肺炎ハ胃腸及神經症狀ヨリ稍尠シ本病發作前

ヨリノ氣管支炎若クハ喉頭炎ハボーンノ言ノ如ク經驗ニ依レハ麻刺里亞發作ノ時期ニ危險ニ迫ルモノニシテ甚ダ高度ニ腫脹スルコトアリ然ルキハ小兒卒然眞性格魯布症狀或ハ危險ナル蔓延性氣管支炎症狀ヲ顯ハス蓋シ輕易ノ喉頭加答兒若クハ氣管支加答兒ノ熱發作ニ伴ヒテ増進スルニ因スルモノニ脾腫及發作ノ間歇スルハ診斷ヲ助クルノ媒介タリ

熱帶地方ノ麻刺里亞ハ小兒モ亦成人ノ如ク屢惡性症狀ヲ執リ最屢惡性急痢ヲ經驗シ稀ニハ單純昏睡狀ヲ呈スルコトアリ

神經痛モ亦始メヨリ來ルコトアリ然レモ亦概テ死ニ先ダチテ來ルヲ常トス又惡性ノ滲出、下痢、虎列刺、窒扶斯樣胸痛ヲ顯ハシタルコトアリ(ベノイト、チグレイ)

惜哉小兒ノ麻刺里亞ニ就テハ今日血液検査ヲ施シタルノ實驗尠ク之ヲ施セルモノモ亦單ニ本病歴史上麻刺里亞トシテ記載セルノミ二年以上殊ニ五年以上ノ小兒ノ熱發作ハ成人ニ類似ス故ニ是等ノ關係ハ

小兒及老人ノ急性麻刺里亞傳染

少ナキモノ、如シ
 小兒ノ惡性模範トシテ殊ニチグレイノ病床日誌ヲ記載セントス
 ベルトウハ千八百九十一年八月夜十時ニB婦人ニ因リ診ヲ乞フ彼ノ
 小兒ハ痙攣ヲ發シ而シテ甚タ不安ナリト
 小兒ハ一年半ニシテ能ク發育シ今劇シキ搖擗ニ罹リ全ク人事不省ニ
 陥リ瞳孔開大ノ反應ナク拇指ヲ握リ顔面ハ僅ニ歪斜腹部陷沒上肢下
 肢ヲ屈曲牽縮シ而シテ劇シク搖擗シ呼吸ハ緩徐トナリ間歇シ時々切
 齒シ多量ノ泡沫ヲ唇上ニ認メタリ
 搖擗ハ瞬間ニシテ止ミ其後ハ昏睡ニ陥リ呼吸絶止セントシ脈ハ僅ニ
 觸知シ二乃至三分時間ニシテ眞性ノ譫語ヲ發ス
 此危險ナル情態ハ半時間ニシテ稍輕快シ氏ノ着後十分間ニシテ痙攣
 昏睡狀トナレリ而シテ患者ノ母ハ少時ヨリ健康ニシテ尙父ハ熱病ニ罹
 リタルコトヲ言フ
 午後七時ニ小兒ハ營養物ヲ拒絶シ善ク熟睡シ而シテ睡眠中發作ヲ來

シ母ト小兒ハ此地ニ數日間此病ニ依リ滞在セリ然モ此症狀ヲ以テ麻
 刺里亞性搖擗トノ診斷ハ疑ナキ能ハス此區域ハ最健康ノ町ニ之ニ
 關セス吾人ハ今ニ重キ發作中體溫ヲ直腸中ニ於テ計ルニ四十度五分
 アリ大轉子ノ部ニ重鹽酸規尼涅〇二五ト依的兒ノ注射ヲ施シ同時ニ
 下劑ノ灌腸ヲ與ヘ所々ニ芥子泥ヲ貼セリ
 一時間ノ後ニ體溫三十八度ニ下降シ而シテ精神明瞭トナリ
 翌日更ニ重鹽酸規尼涅〇二五注射セルニ再ヒ發作ノ來ルコトナシ
 翌九月新ニ熱發ヲ有スル搖擗ヲ發セルモ第一回ヨリ輕ク〇二五ノ規
 尼涅注射ヲ以テ制止セリ
 其後屢診スルモ小兒ハ全ク病徵ナキニ至レリ
 假面熱モ亦總テ幼兒ニ經驗スル處ニシテ之レ屢發スルモノナルヤ否
 ヤハベノイトハ其數多ガラスト云又キングスレイハ假面ノ形ニ於テ
 定期性頭痛胃痛扁桃腺炎痙咳等ヲ經驗セリト云ヒボトシハ確實ト熱
 練ト云以テ定期性扁桃腺炎三叉神經ノ區域内ノ神經痛坐骨神經痛神

經性出血胃痛間歇性眩暈昏睡アルヲ記載シ特ニ定期性前額痛ハ一年半以下ノ小兒ニ發スト云ヒ又出血性下痢ヲ毎日性三日性熱等ニ發シ熱ハ僅微ナルカ或ハ之ヲ缺除スルヲアリポーシハ自家ノ經驗セル假面熱ヲ記セリ

クローチルハ前額神經痛ノ四日性ニ定型スルモノヲ七年半ノ女子ニ見タリト云ヘリ

グライゼイハ麻刺里亞傳染ニ因テ來ル所ノ以上所記ノ他ノ症狀ハ一般ニ稀ナリト云ヘリ

第一系統ノ寄生蟲ニ因ル發作ハ若輩ヲ侵スハ多カラス之ニ反シテ第二系統ノ寄生蟲ヲ以テノ傳染ハ甚ク多シ而シテ症候上熱候甚ク高カラス經過シ之ニ因リ診ヲ誤ルヲアリ患者排尿ナキ時ハ輕度ノ不眠頭痛及疲勞症狀ヲ來シ危險直接ニ顯ル轉歸ハ大概急劇ニシテ短時ニ持續性昏睡ニ陥ル

麻刺里亞接種試驗

第五章 麻刺里亞接種試驗

此試驗的報告ハ歐州ニ於ケルモノ數多アルノ他臺灣ニ於テ實驗セル我軍醫ノ成績トノ吾人ノ耳ニセル所ノモノ數多アリ然レモ茲ニハ彼ヲ揭ゲ此ヲ省ク蓋シ臺灣ニ於ケル成績ニ就テハ尙探究ヲ要スルモノアレバナリ

(第一) 麻刺里亞接種試驗表

番 號	研究者	接種原ノ熱型及寄生蟲	病發感染期	接種寄生蟲ノ形狀	感染ノ熱型	注入血量及注意
一	ゲルハルド	毎日熱(寄生蟲不明)	七日	—	始メ不規則熱ニシテ毎日熱	一立方仙迷
二	ゲルハルド	毎日熱(寄生蟲不明)	十二日	—	毎日熱	—
三	グアルシー及アントリザアイ	少無色「アメバ」後ニ半月體	十日	再發不整熱或ハ亞稽留性或ハ毎日熱	—	三立方仙迷(靜脈内)
四	グアルシー及アントリザアイ	無色「アメバ」少量ノ色素ヲ有ス	十二日	輕度不整熱	—	三立方仙迷(靜脈内)
五	グアルシー及アントリザアイ	—	十五日	—	四日熱	血中多クノ芽胞アルモノ三立方仙迷(靜脈内)

麻刺里亞接種試驗

十八	バイ	三熱 (熱型毎日)	十二日	接種原ノ形状	毎日熱	二立方仙迷
十七	バイ	三熱	十二日	接種原ノ形状	毎日熱	二立方仙迷
十六	カラシテ ルチナ	半月形	十五日	接種原ノ形状	不整熱	一立方仙迷皮下注射
十五	カラシテ ルチナ	四日熱	十八日	接種原ノ形状	四日熱	一立方仙迷皮下注射
十四	テ、マツ タイ	小「ア」 半月不整熱	十四日	接種原ノ形状	不整熱	二立方仙迷皮下注射
十三	テ、マツ タイ	四日熱	十一日	接種原ノ形状	四日熱	二立方仙迷皮下注射
十二	テ、マツ タイ	四日熱	十八日	接種原ノ形状	四日熱	〇、五立方仙迷皮下注射
十一	テ、マツ タイ	四日熱	?	接種原ノ形状	四日熱	
十	テ、マツ タイ	半月形	?	接種原ノ形状	不整熱	
九	カルテ イ及 アン トリ ザイ	半月形 (免熱時)	十三日	八日間「ア」 メ、チ 認メ、 其後 半月形 八日間 免熱及 再發	十日間不整熱後二 三日熱	二立方仙迷 (静脈内)
八	アン トリ ザイ 及 アル モ	三日熱ノ 徴	十一日	接種原ノ形状	三日熱ノ 徴後ニ	一、五立方仙迷ノ發 熱時血液(静脈内)
七	アン トリ ザイ 及 アル モ	三日熱ノ 徴	十一日	接種原ノ形状	毎日熱	熱發ノ始メ血潮ヲ探 ル(静脈内)
六	クアル シ、 アン トリ ザイ	四日熱	十二日	接種原ノ形状	四日熱	

十九	バイ	三熱 (熱型毎日)	九日	接種原ノ形状	三日熱	二立方仙迷
二十	バイ	三熱 (熱型毎日)	九日	接種原ノ形状	三日熱其他六日免 熱後ニ毎日熱再發	二立方仙迷
二十一	バツセ リ	四日熱	十二日	接種原ノ形状	四日熱	四立方仙迷僮カノ寄 生蟲及芽胞アリ
二十二	バツセ リ	三日熱	六日	接種原ノ形状	始メ不規則後ニ 毎日熱	三立方仙迷
二十三	ピクナ ミ	悪性三日熱	六日	接種原ノ形状	悪性三日熱	皮一滴ノ注射片
二十四	ピクナ ミ	悪性三日熱	十日	接種原ノ形状	悪性三日熱	皮一滴ノ注射片
二十五	マンナ メル	三日熱	二十一日	接種原ノ形状	三日熱	〇、二立方仙迷(發作時 ノ遠心沈澱皮下注射)
二十六	セルリ 及	四日熱	二十五日	接種原ノ形状	四日熱	四立方仙迷皮下注射 (馬ノ血漿ヲ以テ所置)
二十七	セルリ 及	四日熱	二十五日	接種原ノ形状	四日熱	四立方仙迷皮下注射 (永牛血漿ヲ以テ所置)
二十八	セルリ 及	四日熱	二十五日	接種原ノ形状	四日熱	四立方仙迷皮下注射 (此牛血漿ヲ以テ所置)
二十九	セルリ 及	夏秋熱ノ 小寄生蟲	三十日	接種原ノ形状	?	射(五立方仙迷皮下注射 馬血漿)
三十	セルリ 及	夏秋熱ノ 小寄生蟲	六日	接種原ノ形状	?	射(五立方仙迷皮下注射 永牛血漿)
三十一	セルリ 及	夏秋熱ノ 小寄生蟲	十七日	接種原ノ形状	?	射(五立方仙迷皮下注射 牝牛血漿)

麻刺里亞接種試驗

三十二	バスタチアチリ 及ビクナミ	悪性三日熱	三日	接種原ノ形状	不整熱	二、立方仙迷(發作ノ終リニ探リタル者)
三十三	バスタチアチリ 及ビクナミ	悪性三日熱	四日	接種原ノ形状	不整熱	五、立方仙迷(發作ノ終リニ探リタル者)
三十四	バスタチアチリ 及ビクナミ	無色(アメ)バ熱型?	四日	接種原ノ形状	不整熱	寄生蟲多キ者〇、五
三十五	バスタチアチリ 及ビクナミ	有色及無色(アメ)バ熱型?	四日	接種原ノ形状	不整熱	寄生蟲多キ者〇、二

(第二) 麻刺里亞寄生虫及熱型表

熱型	固有寄生蟲ノ侵入
四日熱	單純四日熱寄生蟲繁殖
三日熱	第一 通例三日熱寄生蟲ノ繁殖 第二 悪性三日熱寄生蟲ノ繁殖
每日熱	第一 毎日熱寄生蟲ノ繁殖 第二 三日熱寄生蟲ノ二階級ノ繁殖 第三 四日熱寄生蟲ノ三階級ノ繁殖
稽留熱	第一 悪性三日熱寄生蟲ノ多クノ階級繁殖 第二 毎日熱寄生蟲ノ多クノ繁殖 第三 四日熱寄生蟲及通常三日熱寄生蟲ノ三階級ヨリ多ク即チ二個ノ繁殖ヲ顯シタル者
不整熱	第一 毎日熱寄生蟲ノ數多ク繁殖 第二 四日熱寄生蟲多クノ繁殖二十四時間以上間歇アル者 第三 血液ノ特異質ニ依リ混合傳染ニ因ル

麻刺里亞病毒侵入
經路

第六章 麻刺里亞毒侵入經路

麻刺里亞病毒ノ人體ニ侵入スルノ道路ハ最モ明ニセザル可カラズ此問題ノ正確ナル説明ハニニ學理的麻刺里亞豫防法ノ導子ナリ故ニ麻刺里亞寄生虫ノ發見以來永ク之ニ就テ作業ヲ爲シ此問題ニ答ヘント試ミタル者尠ナカラズ

今日事實上麻刺里亞ノ發生ハ地底ニ關係アルヲ疑ヒ地底傳染毒ト相比較スルニ至レリ只疑ラクハ地底ヨリ人體内ニ達スル病毒ノ侵入路ヲ明カニセザルコトヲ

麻刺里亞傳染ニ三種ノ應說アリ此三種共ニ新說ニアラズ或ハ勝ヲ占メ或ハ敗レ或ハ長ク持續シ終ニ試験的ニ終局ノ判定ヲ要スルニ至レリ

第一水ノ有害說

麻刺里亞ヲ移殖スルヤ飲用水ニ因ルコトハ多クノ事實ヲ利用セリ此事

第一水ノ有害說

麻刺里亞病毒侵入經路

實ハ輕慮ニ於テハ稍々信ズ可キモ熟慮ヲ廻ラセバ捕フ可キノ證明ヲ有セス即チ汚穢ナル水ヲ飲用スル者ノ總テガ麻刺里亞ヲ患ルニ非ズ唯試驗上飲用水有害ノ確證ヲ得ント欲シ本病皆無ナル地方ニ於テ熱性病アル地方ノ水ヲ給シ其人ニ血液検査上實ニ麻刺里亞ヲ企起スルハハ確實ナル證明ヲ得可シトナシ特ニ此試驗ヲ企圖シタルモ其成績ハ陰性ナリシセルリハ羅馬ノ病院ニ於テ數多ノ人ニ數時間ホントニイ沼及羅馬府周圍沼澤ノ水ヲ飲用セシメタルモ其人ハ少シモ麻刺里亞ニ罹ラサリシト云ヘリ
 二於テ反復セルモ陰性ノ結果ヲ得タリツヅクハ九人ニ五日乃至二十日間各一五乃至三里埤兒ノ麻刺里亞地方ノ水全量一〇〇乃至六〇〇里埤兒ヲ飲用セシメ十六人ニハ此水ヲ塵埃狀ニ飛散シ附着セシメ五人ニハ灌腸シタルモ此被驗者中麻刺里亞ニ罹レルモノナクザロモシモリノウノ試驗モ亦陰性ナリキ故ニ今日ノ經驗ニ於テハ水ノ麻刺里亞ヲ媒介スルノ說ハ殆ンド敗レタリ

他人事實所謂試驗的證明ニ近キモノハ船中ノ實驗ニシテ多クノ水夫ハ甚々汚染セラレタル麻刺里亞所在沿岸ノボルドニ於テ水ヲ取り之ヲ航海中ノ飲用消費ニ用タリ而シテ船員ハ陸地ニ到ルナク船中ニ於テ麻刺里亞ニ傳染セリボウヂノ多ク引證セル最古キ事實ハ千八百三十四年七月陸軍ノ守備兵ヲ乗船セシメボウヂヲ出帆セル船アリ而シテ飲用水ハボウヂノボルドニ於テ取り之ヲ飲用セルニ麻刺里亞ニ罹レル故ニ水夫ハ此水ノ飲用ヲ止メ以テ健康ヲ保チ之ニ因リテ多クノ批難ヲ受タルコアリシモ結局空論ニ流レ此軍隊ハ已ニ乗船前ニ感染セルモノトナルニ至レリ此關係ヲ明瞭ナラシムルノ例證ハ曾テ亞米利加ノ要塞ニ麻刺里亞ノ流行セシキ清良ナル泉水ヲ導キタルモ麻刺里亞ノ患者數ヲ絶對的ニ變スルヲ能ハサリシ故ニ現今主クシテ伊獨西國ノ研究者ハ已ニ此說ヲ信スルモノナシト雖モ尙英米ノ醫師ハ此飲水學說ヲ固執セリ
 二ラブランハ飲水說ニ疑ヲ存シタリシモ終ニ之ヲ放棄シタルシキトテ

ルハヨリニ續テ銳意飲水學說ニ反對シテ攻究セリ而モザイレルマ
 シン等ノ有名ナル徒ハ今ニ此學說ヲ固執シテ動カス甲ハ濾過セル
 水ヲ飲用スルモノハ他ノモノニ比シテ麻刺里亞ニ罹ルコト稀ナリト云
 ヒマシオンハ飲水ノ試驗ヲ示シ印度ノ飲用水一、二ドラクムノ水中ニ
 ハ麻刺里亞血液ヲ吸ヒタル印度蚊ノ卵子ヲ認メタリ而シテ印度蚊ハ
 已ニ試驗前ニ除去セラレアリ其後十一日一名ノ熱病者ヲ出シ三日ノ
 後自然治癒シ血中ニハ輪狀寄生蟲ニ系統ノモノヲ無數ニ證明シ半月
 狀態ヲ認ムルコト亦再發セザリシト
 此試驗ハ後チニ他輩ノ反復スルモノアリシモ悉ク陰性ナルヲ以テ始
 メテ陽性試驗成績ハ是ニ因リ消滅セリ故ニ此ノ飲水說ニ於ケル侵入
 路ハ明カナラス只飲水學說中一、三ノ見ル可キ事實ハラヴラン之ヲ集
 メテ此作業ヲ證明セリ
 今ヤ麻刺里亞ト水トニ關スル所見ハ網羅シ終レリト雖モ尙茲ニ臺灣
 ニ於ケル實驗ヲ掲グレバ明治三十三年三月蕃仔山討伐ノ際守備歩兵

某大隊ハ二十一日ニ店仔坑ノ東南二里半ノ牛肉崎ヨリ鳥湖庄ニ向テ
 進入セリ此行進路ハ發程地ノ溪水ヲ離ルハ山陵起伏一ノ飲水タモ
 ナキ處ニシテ多少ノ土匪ニ遭遇シ午後三時頃ヨリ驟雨沛然益ヲ覆シ
 兵士一般ニ濕潤全膚ヲ濕セリ此夜鳥湖庄ノ土匪ノ家屋ニ村落露營ス
 上雖モ燃料ニ乏シク濕衣ヲ乾燥スル能ハス飲水モ亦缺乏シ僅ニ土匪
 ノ殘置セル竹筒中ノ水ヲ以テ導明寺ヲ濕シ腹ヲ肥セリ翌二十二日ハ
 携行スルノ飲水ナク進行シテ水流東ニ到レハ溪谷中昨夜ノ降雨ニ因
 リ瀦溜セル汚水ヲ認メタリ然ルニ昨日來生理上必需ノ飲水ヲ缺キシ
 ヲ以テ幹部ノ注意アルニ關ラス皆窃ニ此不良水ヲ貪飲セルヲ見タリ
 如斯三十一日於ケル驟雨ノ濕潤ト不良水ヲ飲用セルハ疑フ可ラサル
 事實ナリト雖モ是ヨリ三週間ニ於テ特ニ麻刺里亞ヲ發生セルモノナ
 キヲ以テ見レハ水ハ本病ニ關セサルヤ知ル可シ況ンヤ苦力(勞働者)ノ
 如キハ屢靴痕ニ瀦溜セル雨水ヲ飲用スルヲ認ムルニ於テヲヤ但シ目
 下蕃仔山一帶ノ地ハ麻刺里亞流行地籠ナリ

ルハコリンニ續テ銳意飲水學說ニ反對シテ攻究セリ而モザイレルマ
 ンツン等ノ有名ナル徒ハ今ニ此學說ヲ固執シテ動カス甲ハ濾過セル
 水ヲ飲用スルモノハ他ノモノニ比シテ麻刺里亞ニ罹ルヲ稀ナリト云
 ヒマツンハ飲水ノ試驗ヲ示シ印度ノ飲用水一、二ドラクムノ水中ニ
 ハ麻刺里亞血液ヲ吸ヒタル印度蚊ノ卵子ヲ認メタリ而シテ印度蚊ハ
 已ニ試驗前ニ除去セラレアリ其後十一日一名ノ熱病者ヲ出シ三日ノ
 後自然治癒シ血中ニハ輪狀寄生蟲ニ系統ノモノヲ無數ニ證明シ半月
 狀體ヲ認ムルコトナク亦再發セザリシト
 此試驗ハ後チニ他輩ノ反復スルモノアリシモ悉ク陰性ナルヲ以テ始
 メテ陽性試驗成績ハ是ニ因リ消滅セリ故ニ此ノ飲水說ニ於ケル侵入
 路ハ明カナラス只飲水學說中一、二人見ル可キ事實ハラヅラン之ヲ集
 メテ此作業ヲ證明セリ
 今ニ麻刺里亞ト水トニ關スル所見ハ網羅シ終レリト雖モ尙茲ニ臺灣
 ニ於ケル實驗ヲ掲グレバ明治三十三年三月蕃仔山討伐ノ際守備歩兵

某大隊ハ二十一日ニ店仔坑ノ東南二里半ノ牛肉崎ヨリ烏湖庄ニ向テ
 進入セリ此行進路ハ發程地ノ溪水ヲ離ル、ヤ山陵起伏一ノ飲水タモ
 ナキ處ニシテ多少ノ土匪ニ遭遇シ午後三時頃ヨリ驟雨沛然益ヲ覆シ
 兵士一般ニ濕潤全膚ヲ濕セリ此夜烏湖庄ノ土匪ノ家屋ニ村落露營ス
 ト雖モ燃料ニ乏シク濕衣ヲ乾燥スル能ハス飲水モ亦缺乏シ僅ニ土匪
 ノ殘置セル竹筒中ノ水ヲ以テ導明寺ヲ濕シ腹ヲ肥セリ翌二十二日ハ
 携行スルノ飲水ナク進行シテ水流東ニ到レバ溪谷中昨夜ノ降雨ニ因
 リ溜溜セル汚水ヲ認メタリ然ルニ昨日來生理上必需ノ飲水ヲ缺キシ
 ヲ以テ幹部ノ注意アルニ關ラス皆窃ニ此不良水ヲ貪飲セルヲ見タリ
 如斯二十一日於ケル驟雨ノ濕潤ト不良水ヲ飲用セルハ疑フ可ラサル
 事實ナリト雖モ是ヨリ三週間ニ於テ特ニ麻刺里亞ヲ發生セルモノナ
 キヲ以テ見レバ水ハ本病ニ關セサルヤ知ル可シ況ンヤ苦力勞働者ノ
 如キハ屢靴痕ニ溜溜セル雨水ヲ飲用スルヲ認ムルニ於テヲヤ但シ目
 下蕃仔山一帶ノ地ハ麻刺里亞流行地窺ナリ

第二印度蚊ノ有害説

沼澤地ニ生活セル昆蟲特ニ印度蚊ノ螫傷ニヨリ人ニ有害ナル泥瘴毒ヲ輸入スルコトヲ始メテ世ニ紹介セルハ實ニランナジニシテ此學說ハ現今再ビラヴランノ信ヲ得之ヲ準用セルモノハマソソソ、ビグナミイエルコソホ等アリ大ニ紹介ノ勞ヲ執レリ

マンソソハ此原因ヲ既ニロソソノ試験的説明ニ從ヒ印度蚊ノ麻刺里亞病者ノ血液ヲ吸ヒ之ニ因リ寄生蟲ヲ採リ此寄生蟲ハ形狀ヲ變シ彼ノ子孫ニ移行シ體外即チ水中ニ排泄セラレ此水ハ飲用水終ニ固有ノ傳染力ヲ擔フナラント而シテ此説明ハマンソソノ絲狀蟲ヲ決定セルガ如シト云ヘリ

ラヴランハ原因ヲラシチジイノ想像説ノ如シトナシ印度蚊ハ麻刺里亞原ヲ健康人ノ身體内ニ移植スルコトヲ承認シ又ビグナミイハ印度蚊ノ吸嘴ヲ以テ地層ヨリ採リシ麻刺里亞寄生蟲ヲ移植スルコトヲ考慮シ

更ニ此方法ニ於ケル一二ノ價值アル試験ヲ施シタリ即チ其始メハハスチア子ルト共ニ僅少ノ麻刺里亞液ヲ皮下ニ移植シ終ニ傳染ノ目的ヲ達スルニ至レリ即チ印度蚊ノ螫傷ニ近似セシムル爲ニ他ノ方法ヲ用ユルコトナク皮下注射器ノ針ニ麻刺里亞血液ヲ附着シ皮下ニ刺入シ以テ一二ノ場合ニハ惡性麻刺里亞ヲ誘起セシムルヲ得タリ

ビクナミイチオニジ一ハ印度蚊ニ就テ直接ニ試験ヲ施シタリト雖モ其成績ハ陰性ナリシ又或ル場合ニハ麻刺里亞地方ニ多クノ蚊ノ群集セルハ爭フ可ラス室内ニ強壯ノ男子ヲ試験的ニ睡眠セシメタルニ輕熱ニ罹リ他ノモノハ之ニ類スル試験ニ僅々タル症狀ヲ呈シタルハミ又ビグナミイハ數多ノ蚊ニ就テ顯微鏡的ニ試ミ少シモ成績ヲ認メザリシト云フ

エルコホハ麻刺里亞患者ノ血液ヲ吸ヒタル印度蚊ノ寄生蟲ヲ其子孫タル卵中ニ移行スルヲ認メ此生殖作用ヲ繼續シテ蚊ノ螫傷ニ因リ麻刺里亞ヲ誘起シ今日ノ蔓延ヲ致スト言フト云ヘル氏ハ其試験ノ證明

ヲ與ヘザリキ
 若シ傳染スルヤ血液ヲ吸收シタル昆蟲ノ結果タル直接ノ證據ヲ缺ク
 ト雖モ多クノ事實ニ於ケル例證ノ表明ヲ是認ス大概麻刺里亞地方ニ
 ハ多クノ此昆蟲ヲ認ムト雖モ普ク此昆蟲ニ關スルコトノミナラザラン
 ツツガンハマントンニ反對シジイルアラランニ於テハ重症麻刺里
 亞ヲ有スルニモ關セス只僅少ノ印度蚊ノ存在スルノミト(カメルンノ
 タイマン)説クモハアリ
 アムレルソンハ蚊螫説ニ反對シテ長キ間麻刺里亞地方ニ生活セル熱
 病者ハ多クハ印度蚊ノ螫傷ニ罹ルモノニシテ地球上多クノ場所ハ蚊
 群存在スト雖モ麻刺里亞熱ノ在ラサル處アリ然レモ全ク蚊螫説ヲ價
 値ナキモノトス可ラス蚊群ハ只病芽ノ媒介者タラント云ヘリ
 其他ラヴラジハ此麻刺里亞地方ヲ健康ナラシメ又之ヲ避クルニ印度
 蚊ヲ驅除スルヲ目的トセルニモ關セス事實上疑問ヲ起シテ曰ク千八
 百九十年ボラアニ於テ著ルシク印度蚊ノ繁殖シ夜中蚊群蚊帳内ニ充

滿シ四十以上ノ螫傷ヲ受クルニ至ルモ麻刺里亞ハ此以前ニ比シ増多
 セザリシト
 麻刺里亞ハ風ニ從ヒ擴ク蔓延セザルガ若シ之レ有リトスルモ甚タ少
 キハ蚊螫説ヲ以テ良ク説明シ得ル所ニシテ此昆蟲ハ彼ノ出生地ヲ離
 ルトナク風ノ來ルヤ忽チ樹木ノ下葉及雜草等ノ内ニ隱匿シ又氣流
 劇シク室内ニ吹入スルモ蚊群ハ能ク之ヲ避ケ僅カニ飛揚ヲ妨グルニ
 過キス
 或ハ麻刺里亞地ニ假眠スルノ危險ナル所以ヲ解スルニ眠レハ昆蟲ノ
 螫傷其欲スル處ニ委カスヲ以テナリト云フモノアリ之ニ類スルノ例
 證ハ小兒ハ大人ニ比較シテ甚タ本病ニ罹ルコト多キヲ以テ知ル可シト
 夜間ノ殊ニ危險ナルハ印度蚊ハ夜ヲ好ミテ群集スルモノナルガ故ニ
 ノ又麻刺里亞ノ高キ所ニ達セザルハ蚊群ハ數迷突兒ヨリ高ク飛揚ス
 ルコトナク常ニ氣層ノ深キ處ノ地面ニ止ルモノナルヲ以テ證ス可シト
 尙實驗上今日單ニ麻刺里亞血液接種ニ因リ人工的麻刺里亞ヲ誘起ス

ルヲ見レハ本病ハ自然皮膚ニ因リ傳染路ヲ取ルコトアラン
 蚊蝨説ノ多ク保持スル處ハ人及動物ノ血液病ニ同シク糸狀虫ノ蚊ヨ
 リツエテイゼ病 (ツエテイゼハ熱帶亞弗利加ノ鳥) (牛馬ヲ危險ナラシムル羽蟲)ノ犬馬ヲ侵シツウルラン
 トニ於テツエテイゼ羽虫ニ因リ牛ノテキサス熱ヲ移植セラレ又現今臭
 虫ノ整傷ニ因リ再歸熱ノ移植セラレトヲ想像スルガ如シ
 之ニ類スルノ例證ヲ掲グレンハテキサス熱ノ牛ヨリ牛ニ至ルニハ道ヲ
 臭虫ニ執ルモノニ更ニ此傳染セル牛ハ健康ノ地ニ到リ疾病ニ罹ル
 コアリ麻刺里亞ニ於テハ之ニ類スルコトナシ故ニマンソンコホノ持説
 ノ的中セルコトヲ紹介セラレサリシ而シテ實際患者ニ因リ疾病ヲ繁殖ス
 ルハ今日考ヘ能ハサル所ニシテ其機會ハ佛ヤ英ヤ今世紀及數千年間
 麻刺里亞ハ獨リ兵隊及役員ノ負担タリ故ニマウレアウハ本病ハ偶然
 ニ發生スルモノト信シタリ尙印度ノレウニオンマウリチウス及ロド
 ドリングベルレラウノ如キハ副木ヲ伐採シ沼澤ヲ導クヲ重要ナル作
 業ノ伴侶トシテ報告セリ

蚊蝨學說ノ一般ニ關シテハ吾人亦疑ナキ能ハス殊ニ麻刺里亞萌芽ハ
 地球表面ノ一定點ニ在リ其地ニ發生スル普通ノ蚊ト雖モ人體上ニ移
 殖スルコトアラン即チ一定ノ場所ニ於ケル昆蟲ノ血液ヲ吸收スルハ固
 有ノ性質ニノ之ニヨリ傳染ノ媒介ヲナスニ過ギザルヲ以テナリ故ニ
 マンナベルヒノ如キハ想フニ全ク麻刺里亞流行上ニ關係セサルモノ
 ナラント云ヒリ

マンソンロツス等ノ經驗ハ今日ノ理會上ニ於テハ趣味ヲ證スルコト能
 ハスカラシムルウクチオハ牧場ニ於テ蚊體ニ麻刺里亞寄生蟲ノ侵入
 シ在ルモ能ク飛揚スルコトヲ證セリ然リト雖モ印度蚊ノ學說ハ尙一頓
 挫ヲ來ス可キノ經驗場裡ニ在リ此學說ニ從ヘハ麻刺里亞地方ニ於テ
 蚊帳ヲ用ユレハ傳染ヲ避クルヲ得可シ殊ニ知ラサル可ラサルハイミ
 シンバシヤハ常ニ蚊帳ヲ携帶シテ旅行シ其長時日間麻刺里亞患者ノ甚
 々稀ナリシ是ナリ

麻刺里亞侵入經路

他人事實上印度蚊ノ學說ヲ述ブレハ麻刺里亞地方ノ寓居ニ於テ夜間

燈火ニ近ク居ルハ稍危険ヲ免ル、ハ古來ヨリ證スル所ニシテ之レ
 烟燭ニ因リ昆蟲ヲ殺スカ若クハ交戦不能タラシムルカ故ナリト説述
 スル者アリ
 印度蚊ノ學說ハ經驗的ニ多クノ攻撃ヲ受クルハ常ニシテ之ニ速ナル
 決定ヲ用意セサレハ此説ヲシテ長ク保持スルヲ難シ
 結局本病ノ傳染ハランヂーノ考究ノ如ク種々ノ方法上ニ結果スル
 可ヲ注意ス可シ
 蚊蝨學說ニ就テハ既ニ其例證ヲ記載セルモ其執ル可キノ點薄弱ニシ
 テ同意スルヲ能ハス臺灣ニ於ケル實驗上ニ於テ嘉義ハ十二月ヨリ三
 月ノ間ハ蚊群最多ク發生スル時期ナルニモ關セス此時期ニ於テハ麻
 刺里亞尠キ時期ニシテ麻刺里亞患者三十五乃至三十九名ニ過ギズ漸
 次其減少スルヲ見ルモ四月ニ至リ本病特ニ增多シ五十八名トナレリ
 亦臺中縣及蕃薯寮附近ハ本島中蚊ノ比較的寡ナル地方ナルモ麻刺
 里亞ハ最多ク明治三十二年ノ統計ニ依レハ甲地ハ三九八・一％乙地ハ

四七八〇％ナリ

茲ニ最良ノ例證ヲ示セハ臺灣守備某大隊ハ明治三十二年軍制ノ改革
 ニヨリ嘉義ニ駐屯スルヲトナリ其中隊ハ蚊帳ノ備アルモ乙隊ハ創
 設ノ際未タ蚊帳ヲ具備セズ十二月ヨリ明治卅三年一月ニ至ル二月月
 間之ヲ用ユルヲ能ハサリシ而シテ其麻刺里亞發生比較左ノ如シ
 (無蚊帳)甲中隊 十二月 二十人
 (有蚊帳)乙中隊 十二月 十五人
 是ヲ以テ見レハ兩中隊共ニ格段ノ差異ヲ認メサルニアラスヤ本年一
 月ヨリ三月ニ至ル三回ノ蕃仔山討伐ニモ亦蚊帳ヲ携行セザリシモ特
 ニ之カ爲ニ本病ノ増加セルヲ認メス九重橋ニ一個中隊屯在スルヲト
 ナルヤ諸準備略備ハリ蚊帳ヲ用ユルニ至リ反テ麻刺里亞増加シ多ク
 ハ良性ナラサルモノ、如シ故ニ蚊蝨學說ハ信ヲ置クニ足ラス若シ蚊蝨
 說學者ノ曰フ如ク蚊ノ種類ヲ異ニスルトスレハ本島ニ於ケル本病ノ
 流行ハ蚊群ニ起因スルモノニアラス他ニ原因ヲ求メサル可ラス從テ

第三空氣ノ有害説

本島ニ於ケル麻刺里亞流行ハ蚊ト一致セサル流行タルヤ疑ナシ
 抑モ麻刺里亞ナル名稱ハ衆庶ノ實驗上ヨリ名ケタルモノニシテMal
 ハ不良 mial ハ空氣ナルガ故ニ不良空氣ニ因スル疾病ニ命名セルノミ
 或ハ譯名ニ瘴氣毒ノ名ヲ用エルモノアルモ亦宜チリ麻刺里亞寄生虫
 ノ地底ヨリ氣中ニ飛散シ而シテ呼吸器ヨリ侵入路ヲ報ルハ最モ古ク
 世上一般ニ信用スル所ナリキ然レモ科學ニ於テノ可否ハ信者ノ多數
 ヲ以テ動カス可ラサルハ勿論ニシテ長ク此空氣説ニ安ンシタルニ拘
 ラズ現時ニ至リ銳キ論難蜂起シ漸次進歩シテ細密ニ論及スルニ至ル
 此空氣説ハ或ル事實上比較的説明ニ困難ナルヲアリ或ハ只強テ之カ
 説明ヲ試ムル所アリ
 日常ノ經驗上先ツ重症傳染地方ノ附近ニハ又免疫地ヲ有スルヲ著明
 ニシテ或時ハ其居住町村住民四分ノ一ハ麻刺里亞ニ罹リ他町ノ住民

ハ之ニ罹ラザルノ例アリ亦一家屋ニ就テモ或ル居室ニ住スルモノハ
 本病ニ罹リ他室ニ居住スルモノハ之ニ罹ラサルコトアリ又重症傳染
 地ノ沼澤上數迷突兒ノ高極地下想像スルノ所ニ於テ此傳染ヲ防禦シ
 得ルガ如キハ最モ著明ナル例證尠カラズ此經驗ハ船中ニ於テ認ムル
 所ニテ重症麻刺里亞所在ノ沿岸ニ碇泊セルモニ實驗セラル即チ船員
 ハ陸地ニ到ルヲナク碇泊地ハ岸ヨリ距離多カラサルニモ關セス本病
 ニ罹ルモノ甚々稀ナリブリングレイハ之ガ例證ヲ與ヘテ曰クワルヘ
 レン島ニ於テ碇地ヲ定メタル英國ノ艦隊ハ陸地ニ於テ現ニ船員ハ麻
 刺里亞ノ災害ニ罹リタルニモ關セス船中ニ在リシモノハ全ク無事ナ
 リシト
 マダカスカルノ遠征(一千八百九十五年)ニ沿岸ニ重症傳染アリシモ
 船員ハ沿岸ヨリ約三百迷突兒ノ海上ニ碇泊シテ健康ナリキ羅馬ノ國
 民ニ熱病流行ノ際コルソオヨリ數百迷突兒間ハ疑ナク流行スルニモ
 關セスエスミシレノ病院ハ免病地ナリ短距離ノエスバネヨニ向テ重

症ノ麻刺里亞中心ナリシキモバオロノ住民ハ其家屋ノ居室内ニ眠ル時ハ安全ニシテ亦海上モ危險ナカリシ之ニ反シテチンメルンニ於テハ沿岸住民ノ危險ナルヲ實見シタリ(ビグナミ)之ニ類スルノ實例ハ麻刺里亞地方一般ノ人民ノ多ク實驗セル所ニ維納ニ於テハ只ボナウフェルスノ地方ニ熱病ノ來ルヲ知ルノミ

麻刺里亞毒ガ空氣中ニ浮遊スルモ重キモノナルヲ理解セラル故ニ氣流ト共ニ運搬セラレ、トナク彼ノ發生地ヨリ遠隔地ニ飛散スルハ困難ナリ然レモ此病毒ヲ空氣ニ因リ竊ニ携行スルヲアルハ全然否認ス可ラス

麻刺里亞ノ屢繁殖増加スル數多ノ地方ニ於テ經驗スル所ハ風ノ一定ノ方向ヨリ吹キ來リ其方向ニ沼澤地ノ存在スルヲ見ル風ニ從テ麻刺里亞芽胞ノ増殖シ得ラル、ノ觀念ヲ起セシハランチジョノ發議ナリト雖モ適當ノ例證ヲ得ザルキランチジョハ又羅馬ノカンバダニグレゴル十三世ノ樹木截伐ヲ企テタル時之ニ因テ惡疫ノ流行セルヲ唱導

セリ此時ニ風ハボジチニ沼ヨリ吹キカンバダニ通スルヲ知レリト云セ且森林ニ傳染毒アル空氣ヲ清淨ニスル作用アルヲ紹介セリ

ランチジョノ說ハ然モ多クノ缺點ヲ有シ沼澤ヨリ羅馬ニ到ル路程ニハ多クノ市街(ヴレトリ、ゲンツア、ニオ、アリク、チア、アル、レ、アン、ス、等)在リテ全ク麻刺里亞ヲ皆無キト假令風ニ罪ヲ歸スルト雖モカンバダノ北部ノ多クノ市街ハ麻刺里亞ノ皆無ナルコトヲ瞰過セリ然レモランチジョハ全ク說ヲ誤リタルニアラス如何トナレハ既ニ言フ如ク多クノ例證ハ又風ニ據リ彌蔓スルノ證明ヲ與フルヲ以テナリ現今ジレトクノ經驗セル說明ニ從テハボリア市街ノ多クノ麻刺里亞ヲ發生スルハ附近ノ沼澤ヨリ吹キ來ル風ニ最大ノ關係ヲ有シジレトクハ雨量ト溫度ト東風(東南及南)ハボリアハ麻刺里亞ヲ管理スト之ニ因テ注意ス可キハ二個ノ沼澤(ラトト)及ビクコラトト町ノ南西ニ在ルト是ナリ

ニエルク、ハ、ボ、ル、トニ於テ同時ニ船中ニ麻刺里亞患者二十七名ヲ發

麻刺里亞侵入經路

生シ其後船ハ夜ヲ通シテ四十八時間進航シザインテアリアニ碇泊シタルニ前ノ熱病ハ皆無トナレリ
 グヅルリーハニユー、ヘブリデンノ東南ノ管轄地ハ麻刺里亞長ク中等ニシテ南西及西部ハ固有ノ流行アルコトヲ報告シマウレルハ此關係ヲ説明シテ佛國グヤナニ於テ空氣ノ永ク鎮靜ナルカ或ハ風ノ健康地ヨリ吹ク時ハ數千迷兒ニ在ル沼澤アルモ此害ヲ受クルコトナシト記載シサイヌ子ハ例ヲ示シテ若シ風ノ數日沼澤上ヲ經過スルキハ健康地方ニ速ニ數多ノ本病患者ヲ顯スト云ヘリ
 總テ麻刺里亞地方ノ附近ハ風土病トナリテ蔓延スルノ他又要素トシテ風ノ所爲ニ關係ス然レモ芽胞ノ繁殖ハ風ニ歸スルヲ得ス反テ氣温ノ變化及濕潤ノ關係ヲ主ナルモノトシ只風ノ方向モ一顧ニ供ス可キノミ麻刺里亞毒ハ風ニ從テ行クト雖モ亦遠方ニ持去ルコトナキモノナリヒルシハ之ニ就テ遠距離ニ達スルコトヲ信ズルト雖モ此病毒ハ運動セル空氣ニ摺送セラレ、コアルモ要スルニ甚ク稀有ニ實際ニ其

距離ハ甚ク短ク或ル定度ニ止ルコトヲ經驗ス即チ或ル土地ヲ占有セルモノ、如キモ陸地ノ疾病蔓延シ直ニ附近ニ碇泊セル船舶ニ及スコアリ總テ之等ノ經驗ニ徵スルニ沿岸ニ近ク在ル船舶ノ船員ハ陸風ニ胃觸セラレ、ト雖モ殆ト本病ヲ避クルヲ常トス故ニ危險ナル陸地ニ到ラサルハ豫防法ノ一端ナリ
 今已ニ説明セル如ク此毒ハ多少ノ重量アルヤ明ニ空氣中ニ混セル芽胞ハ空氣ト共ニ遠方ニ擔行セラレ、トハ思考シ難シ然レモ植物ヤ植物モ不潔ノ空氣ト共ニ遠キニ及スコトナシトセス
 ビグナミトハ本病ニ就テ大ニ攻究シ業績ヲ重キ世ニ紹介シテ曰ク芽胞ハ地面ヨリ空氣中ニ達スルモノニシテ地底濕潤セル所ハ此傳染ニ最モ多クノ關係ヲ有ス而シテ若シ空氣ノ乾燥シテ塵埃ノ飛散スルニ至レハ此病毒ハ減少スト
 多クノ事實ハ此空氣說ニ因リ明ニ説明ヲ與フルヲ得可ク日没ト日出前ハ麻刺里亞感染上甚ク危險ニシテ殊ニ麻刺里亞地方ノ地上ニ假眠

スルガ如キ最モ危険ナルモノトス。此ノ麻刺利亞ノ侵入ニ關シテ、
 空氣中ニ廣ク麻刺利亞芽胞ノ撒蔓スルハ長キ間想像セル處ニシテ近
 クハ麻刺利亞地方空氣中ノ有機小體ヲ檢シランチジ「ハ早ク已ニ此
 方法ヲ定メ現今多ク之ニ從テ而シ吾人ハ又「ハンモン」ト「レマイン」
 「マウレン」ト「フーグ」ト「グラッ」シ及「カランドル」ク「チ」等ノ如キ注意ヲ要シ之ニ
 ハ多ク「ポウホル」ト「ノ」空氣計「レ」ヤ「ホル」調厚器ヲ以テス。此等ノ器
 「フーグ」ト「ポラ」ト「ノ」空氣ハ非常ニ不潔ニシテ殊ニ多クノ有機小體ヲ認
 ズ此有機物ハ恐ラズハ流行セル麻刺利亞繁殖ニ關スルモノトモ「レ」セリ
 「ウ」ルハ麻刺利亞氣中ニ毎回「アメ」ヲ認メ健康氣中ニハ之ヲ認メス
 又患者ノ鼻粘液中ニ「アメ」ヲ認メ此直接ノ證據ヲ以テ呼吸器ヨリ實
 際寄生虫ヲ誘入セラルハ價値アリト認メ「グ」シ及「カランドル」ク「チ」
 「オ」等ハ鳩ノ鼻粘液中ニ毎夜沼澤ヨリ蒸發スル麻刺利亞地方ノ空氣中
 ニ曝露スル「アメ」ハ胞ヲ認メ又稀ニ草露中ニ「アメ」ヲ認ムルコアリマ
 シ「ナ」ベルヒハ麻刺利亞地方ノ土ニ之ニ類スル試驗ヲ施シ現ニ調厚水

中ニ無數ノ「アメ」ヲ移行セシメ得タリ。此等ノ器ハ麻刺利亞ノ侵入ニ關シテ
 空氣說ニ對スル總テノ抗論ニ未タ尙終局ニ關スル支柱ヲ破壊セラ
 ル「ト」ナシ然レモ亦未タ急ニ決定シ試驗ヲ與スルノ目的ニ達スルコ
 ト難シト云フ。此等ノ器ハ麻刺利亞ノ侵入ニ關シテ、
 以上列載スル處ヲ以テ見レバ土中及空氣中ニハ多少「アメ」ヲ移行ス
 ルヲ推知不可シ之ニ對シテ充分研究ス可キハ論ヲ待タズ臺灣島ニ於
 ケル經驗ニ依リテ古來言ス所ノ如ク土地ニ於ケル人工及天然の變化
 ヲ與フルキハ此病原ノ増殖ヲ誘因スルモノ、如シ例之ハ嘉義彰化ノ
 如キ殆ト占領以前ノ狀況ニノ城内ニハ汚染セル沼池瀦水溝渠ノ不潔
 一見不健康地タルヲ證スルニ關セス本病ハ比例的尠少ナル之ニ反シ
 テ臺中雲林礁吧叫ノ如キハ多少工事ヲ施シ稍衛生事業ヲ進メタルモ
 反テ尙本病中樞タルノ觀ヲ呈ス然レモ之レ全ク罪ヲ工事ニ歸ス可
 ラス從來本病ノ多キヲ以テ之ガ工事ニ着手セル「ト」明ニ是レ結局如
 斯衛生的小工事ヲ以テ本病ヲ防止スルハ大功ヲ奏シ能ハサルヲ證ス

ルニ過キス此例證タルヤ尙尠カラス後來空氣及土地ニ就テクラッシュ、マ
シナベルヒノ試験ヲ繼續シ接種試験ニ因リ此アタバハ果シ病原タル
ヤ否ヤヲ確定スルニ至レハ稍學理的豫防法ヲ創設スルノ期ニ近接シ
得ルナラシ

第七章 バツセリーノ麻刺里亞ニ對スル ル静脈内規尼涅注入法

Bacillus 伊國ノ醫學大家ニシテ一千八百二十二年ニ生レ一千八百
八十二年羅馬大學教授トナリシ人ナリ
血中麻刺里亞傳染原ノ赤血球神經系及神經節ヲ侵スハ病床實驗上已
ニ余(バツセリー)ノ數年前ニ決定セル所ニシテ現今ニ至リセルリー、マ
ルヒ、フ、ウ、ラ、グ、エ、ラ、ン、ゴ、ル、ギ、等他ノ業績ヲ追加シ血液組織ノ顯微
鏡的證明ヲ確定セリ然レモ此新智識源ハ未ダ生活ノ安全ヲ補助スル
ニ到ラズ唯僅ニ亦此目的ヲ達シタル爲ニ吾人ハ赤血球ニ規尼涅ヲ觸

中醫學
百七十二

接スルノ希望ヲ想起セルハ奮テ論理學的價值ヲ顯ス所以タリ此經驗
ハ唯眞性ノ目的ヲ達シタルノミニアラズ危險ノ場合ニ速ニ且確實ニ
貴重ノ治療藥ヲ進入セシムルヲ目的トスル爲メニ實施シタリ又此新
治療法ハ少量ノ藥物ヲ以テ甚大ナル作用ヲ達シ得ルト思考セリ
治療的ノ關係ニ於テ各治療藥ヲ直接血球ニ抵觸セシムルハ余ノ提議
スル所ニシテ然ルハ寄生蟲ハ持續シテ確實ニ破壞セララル、ハ常ニ口
ヨリスルモノ及皮下ヨリスルモノヨリ速ニシテ殊ニ惡性症ニ見ル所
タリ故ニ此規尼涅靜脈内注入ヲ主張スル所以ナリ此法ニ依レハ

(第一)少量ニシテ確實ノ治療ヲ得

(第二)藥物ヲ適當ノ時ニ與ヘ發作ヲ妨ケ或ハ之ヲ絶滅ス

(第三)已ニ傳染ノ原因ニ由ル變質血液ノ構成ヲ變ス

醫治的研究上規尼涅靜脈注入法ノ殊ニ麻刺里亞ヲ防止スルノ目的ニ
用テテ秀テタルハ疑ヒナキ事實ニシテ唯其生理的食鹽ヲ配伍セザル酸
性液ハ動物試驗上甚ダ不良ノ作用アルコトヲ決定セリ即チ簡様ナル液

「バツセリー」ノ麻刺里亞ニ對スル靜脈内規尼涅注入法

ハ試兔ヲ數分時ノ内ニ殺シ、完全ノ中性液ト雖モ用ニ適セス廣キ經驗
 ニ因リ最良ナル中性鹽酸規尼涅溶液ヲ作ルニハ溜水ニ格魯兒那篤留
 膜ヲ合有セシメ以テ水ノ血液ニ於ケル有害作用ヲ防止スルヲ可トセリ
 〔處方〕 方 〇〇七五
 格魯兒那篤留膜、
 溜水、
 此液ヲ全ク透明ニ保タシムルニハ微温トナス可シ之レ蓋シ反覆セテ
 試驗ニ因リ決定セル所ニテ免ニ就テ十仙瓦ヲ用ユルモ全ク無害ナリ
 故ニ此量ハ人ニモ亦恐ル、コナク用ト得可シ此注入ヲ施スニハ上肢
 ノ肘窩ノ上部ニ於テ結縛シ血行ヲ止メ前膊靜脈ヲ腫脹セシメブラワ
 ツツ針ヲ下ヨリ上方ニ靜脈腔ニ刺入シ僅ニ前ニ引出シ以テ後出血ヲ
 防クヲ常トス此際通例前膊ノ屈側ニ在ル靜脈ヲ撰ムヲ要ス注射量ハ
 約五立方仙迷突ニ各其撰ム所ノ量ニ從フ然シテ針ハ刺入スル前ニ

之ト連接スベシ
 此小手術ハ常ニ嚴重ナル消毒法ヲ要ス故ニ藥液ハ使用前ニ濾過シ而
 シテ數回煮沸スルヲ要ス液ヲ注入スルニハ只徐々ニシテ其他ニ注意ス
 可キハ注射後該部ノ少シク腫脹スルヤ否ヤヲ見若シ腫脹スレバ針端
 ノ靜脈管内ニ刺入シ得サルヲ證ス針ノ正シク刺入セラレ、ギハ注射
 柄ヲ壓入スル前ニ綱帶ヲ除去ス可ク針ヲ拔去セル後ノ刺創ハ格魯胃
 膜ヲ以テ鎖ス可シ
 吾人ノ經驗上此注入法ハ決シテ注射部ニ局所反應ヲ發シタルコトナク
 只一回膿瘍形成ヲ見シメ而シテ此場合ハ針尖血管腔ニ達スルコトナ
 ク注入液ヲ皮下結組織内ニ漏ラセルガ爲メニシテ之ニ因テ前膊ノ浮
 腫ヲ呈シタリ
 十乃至三十仙瓦ノ少量ヲ用ユルニハ少シモ注意スベキノ顯象ナク三十
 乃至八十仙瓦ノ大量ヲ用ユルニ至リ始メテ三回注入後直接的障害規
 尼涅中毒的ニ特徴ヲ呈セリ即チ口内苦味、眩暈、失氣、細脈後ニハ全ク徐

脈(トナル)其他耳鳴、煩悶、皮膚冷却ス而シテ通例此状態ハ最高時ヨリ二十分時ノ後ニハ消失ス只長キ間麻刺里亞ニ罹リ亞稽留性ノ症狀アルニ患者ニ於テ心臟衰弱數時間持續シ興奮藥ヲ要スルニ至レルコトアリ經驗ニ依ルニ四十乃至六十仙瓦ノ量病ノ度ニ從フヲ以テ甚タ満足ノ結果アリ即チ殆ント常ニ第二ノ發作ヲ抑制シ而シテ或ル場合ニ於テハ全ク免熱シ再發ナク此量ヲ以テ満足セリ然レモ再發及ヒ小發作ヲ消失セシムルニハ充分ナラス試驗ノ結果ニ依レハ體重二幾魯瓦ノ兎ハ三十仙瓦注入スルモ少シモ障害ナク人ニ就テハ一瓦ヲ越ユ可カラズ熟考スルニ只單ニ體重ノミニ關セズ特異體質ヲモ考ヘザル可ラザルニ由ル又他ノ亞爾加魯乙土ニ堪ユル如ク人ニ於テモ能ク三瓦ヲ注入シ得ルコトアリ

此法ノ充分希望ヲ滿スベキ成績ハ惡性ナルモノニ缺ク可カラサルノ治療法トシテ効驗アリ只個人的性質ニヨリ種々ノ規尼涅中毒症狀ヲ發スルヲ經驗スルコトアレモ數秒時持續スルニ過キス此量ニ於テ我病

床實驗室ニ八日間止ルコトナセシモ再發スル者ナク僅ニ體温ノ昇騰ヲ見ル然モ決シテ一度ヲ越ユルコトナク自然ニ消失セリ

上文記スルノ法ヲ以テ余(バツセリ)ハ惡性症ナル五名ヲ治療セリ即チ其症狀昏睡性ニシテ半身不隨ト中心症狀アルモノニハ如何ナル場合ニモ固有ノ藥劑ノ外興奮藥及ヒ心臟亢奮劑ヲ與ヘ殊ニ反覆シテ大量ノ依的兒注射廿四時間ニ五乃至十瓦ヲ施セリ此療法ノ結果ハ危險ノ症候消失シ體温モ亦下降セリ

重症ハ最小量ヲ治療ニ到ルマテ用ユルヲ要ス

體温昇騰ハ個人ニ依リ甚タシキコトアリ或ハ輕度ナルコトアリ素因ニ依リ窒扶斯熱ノ如ク病ノ持續スルコトアルハ總テ實地醫ノ知ル所タリ濫リニ麻刺里亞ニ規尼涅ノ大量ヲ投スルカ又屢々規尼涅ヲ投スルカ或ハ反應ヲ來シ診斷ノ正確ヲ誤ルハ經驗ノ證スル所ニシテ吾主張スル經驗ハ亞稽留性及間歇性ニ實驗セル所ナリ茲ニ於テ速ニ靜脈内ニ規尼涅ヲ輸送スレハ甚タ僅少ニシテ非常ノ成績アリ總テ靜脈注入ハ一瓦以

「バツセリ」ノ麻刺里亞ニ對スル靜脈内規尼涅注入法

内ヲ以テ甚タ良果ヲ呈ス此目的ヲ満足セシメント欲セハ小量約五十乃至七十仙瓦ヲ屢々施シ重症悪性症ト雖モ一回一瓦ヲ越ユ可カラズ一麻刺里亞傳染ノ特徴タル形體學的血液變化ヲ研究セル結果規尼涅鹽注入後半時間毎ニ血液ヲ檢セルニ始メノ六時間ハ著シキ變化ヲ認メス寄生蟲ノ「アメバ」狀運動ヲ認メ就中始メノ二三時間ハ殊ニ劇シキ運動ヲ見二十四時間ノ後ニハ殆ント總テノ寄生蟲消失ス充分目的ヲ達セサレハ退行現象及死ノ現象ヲ經驗シ即チ血中ニ色素及鎌狀體ノ形狀ヲ止ム然レモ數日靜脈内ニ規尼涅ヲ輸入スレハ熱ヲ制止スルニ到ル「著明ナリ熱ト血液變化ノ關係ニ就テハ「アメバ」ノ形狀ハ熱時期ニ關聯シ色素ノ形成及半月狀形成ハ解熱時ニアリ而シテ之レ寄生蟲自ラ形成スルモノナルヤ規尼涅療法ニ起因スルヤ明瞭ナラズ

小量ノ規尼涅ハ勿論之ニ關セサルヤ明瞭ナレモ只中等量ハ血球荒蕪ノ結果ヲ疑ハサルヲ得ス然レモ此藥物ハ甚タ速ニ排泄セラレ、モノニシテ規尼涅ハ眞ニ血液中ニ寄生蟲制服作用ヲ呈シ他ノ一般ノ消毒

藥ノ一定量ト同一時間ヲ要スルカ如シ此寄生蟲制服作用中藥物ノ堆積作用ノ起ラサルハ排泄ノ速ナルニ因ルビントロスバツハノ試験ニ依リハ小有機體ノ規尼涅液ニ死スル程度ハ五千倍溶液ヨリナリト規尼涅ノ有機體ニ作用スルハ酸素ヲ奪却スルニ因ルナラン此決定ニ從テ注入セル小量ノ規尼涅ハ効力ヲ顯スト雖モ亦忽チ排泄セラレ故ニ小量ヲ反覆スレハ反テ功績アルノ理ナリ實地的證明ニ因レハ靜脈内ニ輸入セル規尼涅排泄ノ速力ト持續ノ關係ハ全ク他ノ方法殊ニ皮下注射ニ異ナル「ナク尿中ニ於ケル著明ナル亞魯加魯依士反應ハ已ニ靜脈注入後十分時ニ檢定セラレ而シテ尙二十二時間後ニ多量ノ規尼涅ヲ尿中ニ認メ規尼涅皮下注射ニ於テモ亦十分時ニ著ク規尼涅ノ反應ヲ呈シ二十四時間乃至四十八時間持續スル「屢々之アリ規尼涅内服ノ後ハ二十分時ニノ尿中ニ顯レ三十六時間ハ其反應アリ此事實ハ能ク「マンナザイム」ノ規尼涅ハ熱ニ罹ルルルハ吸收ヲ妨ケラレ長ク保持セラルトノ試験ニ適合スル所ニシテ又シ「ユウエンゲルビン」ツ及ケルチン

「バツセリー」ノ麻刺里亞ニ對スル靜脈内規尼涅注入法

ノ相次テ是認セル處ナリ是等ノ諸氏ハ又甚タ鋭敏ナル試験法ノ助ケ
ヲ以テ規尼涅輸入後十分時ニシテ現出セルヲ證セリ

吾(バツセリー)試験ニ依レハ規尼涅ハ二十四時間ハ全ク寄生蟲ニ作用
スルヲ信ズ可ク實驗ニ依リ次ノ規則ヲ定ムルヲ得即チ血行器ノ衰弱
消化器及皮下組織ノ吸收ヲ損害セラレタルキハ醫タルモノハ最モ確
實ニ藥物ヲ靜脈内ニ注入シ一回ヲ以テ全ク正確ニ最満足ナル作用ア
ル規尼涅量ヲ直接ニ血液中ニ輸入スルヲ得可シ

規尼涅ノ確定セル一定量ハ一瓦ヨリ少シ然ルキハ規尼涅ハ血液ニ對
シテ一ト五〇〇ノ比例ナリ皮下及消化器ヨリ規尼涅二瓦ヲ屢々持
續シテ投スルヲアルハ病理的作用ニ因リ吸收ノ緩慢トナリシニ依ル
モノトス

今實地研究ノ結果トシテ得タル規尼涅ヲ投スルノ要約ヲ掲レバ如左

(第一)規尼涅一瓦ヲ發作ノ始メ若クハ發作ノ三時間以内ニ應用スル
モノモ發作ヲ消失セシムルヲ得ス

(第二)規尼涅ヲ熱ノ最高點ニ投スルモノ分利ヲ促スヲ得ス

(第三)規尼涅ヲ發作ノ分利期若クハ其終ニ投スレハ次回ノ發作ヲ妨
グルカ少クモ次ノ發作ヲ輕減ス

(第四)規尼涅ヲ亞稽留性症狀ノ下降時ニ投スレハ亞稽留性ノモノヲ
シテ間歇性タラシムルカ或ハ發作ヲ輕減シ速ニ分利ヲ促ス

伊國ノ第二内科醫會ニ於ケル麻刺里亞報告ノ要旨ハ麻刺里亞療法ニ
靜脈注入ヲ普及セシメント欲スルハ主トシテ甚タ重症ナルカ或ハ吸
收力ノ不充分ナルキニシテ此小技術ハ多少熟練ト嚴重ナル消毒ヲ以
テスレバ惡性麻刺里亞療法上ノ功力正確ニシテ最モ速ニ藥物ヲ作用
セシムルヲ得可シト云フニ過キス
今バツセリーノ創見ニ係ル靜脈内規尼涅注入法ハ無害有効ノ良法ニ
シテ麻刺里亞療法上唯一ナルハ吾人亦信シテ疑ハズ故ニ吾人ハ現今
尙ホ臺灣ニ於テ同僚諸君ト共ニ之ガ實驗ヲ積ミツツアリ板ヲ改ムル
ノ時ニ當リ掲ゲテ世ニ問ハント欲ス

第八章 ローベルト、コツホ、印度亞

弗利加旅行報告

熱帶地方ノ麻刺里亞千八百九十八年二月二十
五日ダレザラムニ於テ

今獨領東亞弗利加ノ健康度ヲ標榜シ之ヲ安穩ナラシムルニハ全然麻刺里亞ヲ驅逐スルニ非レハ特ニ歡喜ス可カラス之ニ反シテ他ノ疾病ハ一般ニ尠少ナルハ何人モ直ニ認メ得ル所ニシテ若シ此領土ニ麻刺里亞ナカリセバ實ニ健康ノ樂土タリ從テ此疾病ヲシテ歐洲ノ如ク可良ナラシムルハ死亡數ヲ減スルヤ勿論ナリト雖モ是レ未ダ行ハレサル所ノ難事ニ屬ス乃チ同地方ハ腸窒扶斯顯ル、事ナク實布埜里ヲ實驗スル事ナク只結核ハ多少散在スト雖モ之レ亦歐洲及埃及ヨリ輸入スルヲ常トシ熱帶病トシ恐ル可キ疾病ノ一ナル赤痢ト雖モ沿岸地方ニ存在スルノミニシテ甚タ稀有ニ只一地方ニノミ限局シ今吾人ガ熱帶各地ノ病院ヲ巡視スルモ此三四年間或ル場合ヲ除クノ他ハ流行セル

事ナシト云フ之ニ反シテ麻刺里亞ハ夥多ニシテダレザラムノ病院ニ於テ一千八百九十一年ヨリ一千八百九十六年迄ノ患者數八百九十九人中麻刺里亞患者四百八十五人即チ五四%ヲ占有セリ今當地方ノ麻刺里亞ヲ熱視スルニ固有ノ熱型ヲ顯シ殊ニ所謂日發熱即チ毎日反覆スル所ノ發作ヲ以テ經過スル麻刺里亞ニ之ニ適當ノ療法ヲ加ヘサレハ速ニ貧血トナリ永ク虛弱ヲ貽遺ス而シテ何人ト雖モ一回本病ニ侵サルレハ漸次快復ニ傾クカ或ハ忽チ治癒スルモ容易ニ感受性トナリ爾後屢本病ヲ患ヒ甚タ危險ニ陥ルコトアリ蓋シ傳染ノ極死ヲ轉歸ヲ執ルハ所謂黑水熱ニシテ獨領東亞弗利加ニ於テ惡性熱タル麻刺里亞ノ死亡數ハ殆ト全ク惡性熱即チ黑水熱ニ起因スルモノナリ

吾人ノ經驗セル成績ハ只獨領東亞弗利加ナル一小境域ニ過ギスト雖モ之ヨリ打算ノ他ノ熱帶地方モ亦同一狀態ナラント信ス蓋シ吾人ノ研究的基础トセル麻刺里亞ハ其區域甚ダ廣カラスト雖モ可及的證據

ヲ得ルコトニ注意シ即チ麻刺里亞ノ疑アルモノ百五十四人ニ就キ麻刺里亞固有ノ熱發作、特異症狀、全經過及麻刺里亞ノ臨床的症狀規尼涅療法ニ關スル價值等ヲ實驗シ總テ此場合ニ麻刺里亞ノ疑アル患者ニシテ寄生體ヲ認メタルモノハ本病ニ記入シ病ノ全經過中之ヲ認メサルモノハ全ク算外ニ置ケリ然レモ實際上之ヲ認メサルモノハ甚ク尠ク尙充分ナル臨床検査ヲ施シタルニ之ヲ有セザルモノハ事實上又麻刺里亞ニアラザリシヲ知リセリ

麻刺里亞疑似患者百五十四人中七十二人ハ寄生體ヲ證明セリ此内熱帶麻刺里亞六十三人三日熱七人尙三日熱中ノ二人ハ熱帶麻刺里亞ヲ合併ス四日熱一人不整熱一人ナリシ

吾人ハ如斯麻刺里亞ヲ區別スルニハ各麻刺里亞寄生體固有ノ種類ヲ確實ニ臨床的ニ決定シ得タリ黑水熱ハ已ニ注意スル如ク吾人ノ検査上麻刺里亞熱ノ系統ニアラズ故ニ前ノ比例ニハ含有スルコトナシ此黑水熱ニ就テハ特ニ報告セントス

（嘉義及其他盛中ニ於テハ實驗ニ依リテ黑水熱ハ麻刺里亞ノ一種ト認メテ可ナルガ

如シ何トナシ多クハ寄生體ヲ檢出スルヲ以テナリ

四日熱ハ只一人ニシテ殊ニ撒麻里人（亞弗利加東部ノ住民）不整熱モ亦一人ニシテ護亞寧人（印度ノマラバールタリ而シ之ニ就テ注意研究セル結果麻刺里亞ノ特異症狀ニ屬スルモノナルコトヲ知レリ獨領東亞弗利加ノ固有ノ疾病ハ只熱帶的麻刺里亞及三日熱中央歐羅巴ノ麻刺里亞ニ最も多キ症狀ヲ見ル而シテ此比例ハ六十三ニ對スル七ノ割合トス

熱帶麻刺里亞ト他種ノ麻刺里亞トニハ最著明ノ固有の病床經過及特異ノ血液寄生體ヲ確認シタリ

熱帶麻刺里亞ノ經過ハ單一ナラストラツアルハ患者ハ通例前ニ規尼涅療法ヲ施サレタルカ故ニ甚ク速ニ熱型ノ下降ヲ見然ラサルモ之ヲ障礙セラレタルヲ見ル吾人ハ之ニ反シ麻刺里亞ヲ確診スルマデハ規尼涅療法ヲ施スコトヲ其經過ヲ見ルコトヲ勤メ熱帶麻刺里亞固有ノ熱型ヲ得シト欲セリ

前述ノ如ク吾人ノ多ク邂逅セルハ日發熱殊ニ三日熱發作ナリ此症狀